

岡田文弘

極光綺譚 (オーロラ-きたん)

(2008.08～11)



あるいは Corn Flake Blues

#ジムノペディ#

第一章 キャンプ場でオーロラを見た

#ジムノペディ#

第二章 火

#ジムノペディ#

第三章 さよならハガキ職人

#ジムノペディ#

第四章 恐竜紳士

#ジムノペディ#

第五章 お夏ちゃん

#ジムノペディ#

#ジムハッピー#

・・・・・・・・コーンフレークの皿の中で

ぼくはずっと ぐるぐる回るよ

きみはぼくの腕をすり抜け

ケムリにかわって消えてしまった・・・・・・・・

——ラジオから奇妙な歌が流れて来る。雨のつぶてが電波の邪魔をしているせいかな、歌には無数の雑音が混じっている。彼女はヘッドホンを外して、小さく息を吐く。窓の外には、灰色がかった街の景色が広がっている。雨も風も、やりたい放題に空に落書きを施している。そのおかげで、さっきからこの電車は止まってしまっているのだ。

彼女は水玉模様のハンカチを頭に巻き、魚の骨のイラストがプリントしてあるTシャツ、破れだらけのジーンズを身にまとい、ヒッピーが好みそうな赤いビーズ細工を首から下げ、小麦色の健康そのものの肌をしている。傍らには大きな旅行鞆、そして萎れたアサガオの植木鉢が置かれている。車内アナウンスが遅延情報をまくし立てる中、過ぎた夏の記憶が彼女の周りに沈殿し、点滅を繰り返している。彼女は目を閉じてみる。そうしていれば、何かが見えて来るような気がしたので。

第一章 キャンプ場でオーロラを見た

(1)

「信じられないような光景でしたよ！」

ヤマダはそう言って、蕎麦粉の袋を開けた。

「俺、一晩中空を見上げてたんです。やたらと星のよく見える、冷たい湧水みたいに透き通った空だったんですよ。俺、テントの横に坐り込んで、ただただ煙草をふかしながら、まんじりともせずに夜を明かしたんです。」

ヤマダはボウルに移した蕎麦粉を水で溶かし、更にそこに卵を入れて掻き混ぜながら喋っている。彼は今朝起きた時からずっと喋り詰めに喋っているのである。

「何にも考えてなかったんすよ。もしその時の俺の頭の中に小石の一つでも投げ込んでみれば、枯れた井戸と同じくらい小気味よい音がしたと思いますよ！俺は虚空に煙草の煙をプカリプカリと浮かべて、ぼんやりしてたんです。とても慎ましく、ね——。」

僕は無言でヤマダを見やる。日焼けサロンの広告にでも出て来そうな、間の抜けた奴である。一心不乱に、不器用な手つきで、蕎麦粉を掻き混ぜ続けている。そして僕は違う方向に視線を向け、緑色の小立と、レモン色の朝の光に満ち満ちた谷合の風景を見やる。心地よい冷たい空気が周りを取り巻いている。真夏の太陽が猛威を振り出す前の、束の間の幸せな時間である。山の中腹に在るキャンプ場の調理場にて、我々は朝食前のひと時を過ごしているのである。

「そうしている内、ふと俺は、あっちの方角の空が……ちよつと待って下さい」彼はボウルを置き、ポケットからコンパスを取り出す。「ええっと、西です。西の方の空が、薄らと光っているように見えたんです。あれ、雷かな……。最初、俺はそんな風に考えていました。そうしたら、みるみる内にその光が空全体に広がって行ったんです。その様子、どう言ったらいいですかね……。コーヒーにクリームを注いだ直後、カップの中はあんな風になっている筈です。それか、水差しの中に二、三滴、水彩絵の具を垂らした時みたいなの……」

彼はコンパスをしまい、またぞろ蕎麦粉を掻き混ぜ始めた。

「その光は風に煽られたカーテンみたいに伸び縮みを繰り返しながら、空と地上の両方に向かってピンク色やオレンジ色の光線を発し始めたんです！」

一体、何だこれは！俺は腰を抜かしちゃいました。実際に、その時の俺の腰は見事に抜けちまつたと思いますよ。ねえ、その光、何だったと思います？」

僕は何も答えなかった。ヤマダは微かに声を震わせながら、高らかに言い放った。

「俺は確信しましたよ。『あれはオーロラだ！』って」

僕は何も言わなかった。

数秒間の静寂の後、ヤマダは作業の手を止めて振り向いた。僕が余りにも頑なに沈黙を守っているため、不満に思っただけ。

「トンボさん、どうしたんすか。黙り込んでしまった」とヤマダ。彼は僕が大きなトンボ眼鏡のサングラスをかけているので、僕の事を『トンボさん』と呼ぶのである。「何か言いた

い事だの聞きたい事だのが有るんなら、どんどん言つて下さいよ」

「とにかく第一に、ツバを飛ばしながら喋りまくるな。朝飯の準備中だろう」僕は機嫌悪くそう答える。

「ああ、すいません！」ヤマダは慌てて口に手を当てる。「――で、何か他には？」

「一晚中表にいて、蚊に刺され無かったのか？」

「ええっと・・・・・・どうでしょう」ヤマダは首を傾げる。「分かりません」

そんな風に平然と首を傾げていられるのだから、刺されていないに違いない――全くもって、幸せな野郎だ。僕はズボンの裾をめくり、自分の脚に触れた。脹脛は熱を帯びて凸凹と盛り上がっていた。テントの中で蚊取り線香を焚きしめた筈なのに、この有様である。

「それでお前、結局一睡もしなかったのか？」と僕。

「いえ、明け方になってちよつとだけ眠りました。オーロラは日が昇り始める頃に、掻き消すみたいに消えちまったんです。消えた途端に、睡魔が押し寄せてきて・・・・・・」

そう言つてヤマダはコンロに火を点け、フライパンを置いた。

「だからそれ、オーロラじゃあないって」僕は脹脛を思い切り引つ掻き回しながら言った。「常識で考えてみる。ここは北極でも北欧でも有りやしない、西日本の片田舎だ。こんな所でオーロラが見える訳無いだろう」

「なんでそんな事、断言出来るんですか」彼はフライパンにバターを引く手を止め、不満げな表情で振り向く。「この目で見たんです」

「お前の目は信用出来無いな」と僕。

「酷いなあ、ああ酷い酷い、俺には信用が無いんですね」歌うようにそう呟きながら、ヤマダはフライパンの上に片手をかざして温度を推し量っている。もう一方の手にはパンケーキの種の入ったボウルを持っており、それを流し込むタイミングを虎視眈々と窺っているのである。「トンボさん、脚ばかり掻いてないで、コーヒ―沸かして下さいよ。俺はパンケーキ焼いてんですから」

「分かった分かった」僕は脹脛を平手で打ち、立ち上がる。「その前にお前、虫刺されの薬何処だか知らないか」

「さあ、俺は持つてませんよ」ヤマダは素っ気なく答える。

仕方が無い、今度は鞆の中を引つ掻き回す。確かに持つて来た筈だ、落ちて着いて探せ。

「いやあ、それにしても、荘観だったなあ！」

烈しく油の撥ねる音がして、香ばしい、不思議と郷愁をそそるような匂いが流れて来た。ヤマダが種を流し込んだのである。フライパンに種を流し込む一瞬というものは、立派なパラダイム転換の瞬間だな、と僕は思った。ここで世界が一転する訳である、流動していた物体は個体となり、煙が立ち上る。革命だ！そんな阿呆なアジ演説を心の中で繰り広げつつ、僕はヤマダの戯言を右から左へ、左から右へと聞き流していた。

それにしてもこいつは、頭がどうかなくなつてしまったのではないか。目を覚ました僕がテントから出るなり、待ち構えていたかのように目を輝かせ、それからずっと何かに取りつかれたかのようなオーロラ談義である。付き合っていられない。きつとこいつの脳味噌は北極みたいに成っちまって、ペンギンだのアザラシだのが辺りをヨチヨチ闊歩しているのだろうな、僕はそう思った。

「トンボさんも、もしあれを見ていれば、そんな風に俺を苛めたりしない筈ですよ」フラ

イパンの上に屈み込んで、ヤマダが不満そうな表情でそう呟いた。
「ほほう、残念だね」僕はそう答え、虫刺されの薬を黙々と探し続けた。

(2)

僕とヤマダは大学の同じ学科に属し、古びた狭苦しい研究室で鼻っ面をつき合わせて漫然と日々を送っている。紙魚の屍骸と埃と日向臭い古本の臭いに埋もれて、焦りながらも呑気に生きているのである。将来の展望も無く、過去に蓄積して来たものも無く、況や現在の有様と来たら目も当てられない。だからと言ってどうしようも無いので、別段どうもしていいのである。それが我々の生き様であった。

そんなどうしようもない二人が何故、真夏の気が狂いそうなほど暑い時分に辺鄙な片田舎のキャンプ場までのこのこ出かけて来たのか——その契機と成ったのは、夏休み前の研究室での世間話であった。その時、研究室には三人の人間がいた。一人は言うまでも無く僕。一人はこれまた言うまでも無くヤマダ。そしてもう一人は、いつも僕とヤマダの阿呆らしい世間話を冷たい顔付きで聞き流している、陰気な女子学生であった。

彼女はいつも葬式帰りのような地味な服を着、黒縁眼鏡をかけ、むすっとした顔付きで十年一日のごとく黙々と本を読み勉学に勤しんでいる、暗い娘である。天津甘栗が好物らしく、一時間のうちに二、三袋は軽く空けてしまうのであるが、その食欲たるや「これはもはや好物と言うよりは寧ろ中毒と言うべきなのでは」とすら思えて来る程だった。因みにヤマダと同学年、同い年である。しかし、昨年語学の授業を全部落として留年してしまったヤマダは、今では彼女の事を「先輩」と呼んでいるのであった。

さて、僕とヤマダはその時お互いの家族について話らない雑談をしていたのであるが、いつの間にか話が余りにも下卑た下らない方向へと転がって行ってしまった。ふと我に返って横を見ると、黙々と勉学に勤しんでいる彼女がいた。彼女の冷たい顔付きを見ていると何だか居た堪れない気分になって来て、兩人とも口をつぐんでしまったのである。そして鉄のように重たい沈黙が部屋を満たし、時間が過ぎる程にその重たさは増して行き、危うく窒息するかと思われた。とうとう堪えかねたヤマダが彼女に「ねえところで、先輩の家族ってどんな感じなんすか」と問いかけ、沈黙の空気を破ったのである。

するとこの栗好きの娘は、無愛想な表情でいたものの本当はそこまで機嫌が悪くなかったであろう、さほど嫌がらずにポツリポツリと話をしてくれた。その折に、彼女の姉が寒村の山寺で尼僧をしているという話が飛び出して来たのである。

そんな事は初めて聞いたので、僕もヤマダも吃驚してしまい、同時にこの件に関して大いなる興味を抱いたのである。是非ともそのお寺に参拝してみたい（そしてお姉さんに会ってみたい）、僕とヤマダはそのように言った。行けばいいんじゃないんですか、私は案内しませんけど——彼女は素っ気無く答えた。

しかし僕とヤマダはすっかり盛り上がり、行ってみよう、これから夏休みに入る事だし、是非行ってみよう、などと語り合った訳である。

さて夏休みに入り、そんな約束を交わした事などすっかり忘却し、記憶の断片を宇宙の果てまで放り投げてしまった僕なのであるが、八月も半ばを過ぎたある日、唐突にヤマダから「ねえトンボさん、そろそろ行ってみませんか」と電話が入ったのである。まさか本

当に行く気だったとは、と吃驚したもののだが、僕も特にやる事も無いままに日々を過ごしていたので（本当は、やるべき事はいくらでも在ったのだが、如何せん「やる気」という重要事項がアイスクリームのように融解してしまっていた。余りに夏が暑過ぎたのであった）、それじゃあ一つ行ってみるか、と腰を上げたのであった。

(3)

我々は万全を期して早朝に出発したので、昼前には目的地の最寄り駅まで到達する事が出来た。しかし、その降り立った駅が果たして本当に「目的地の最寄り」だったのか、思わず疑わしく思えて来た。我々は喜び勇んでバスに乗り換えようとしたが、ふと時刻表を見てみれば、我々が乗るべきバスの運行状態は一時間半に一本、しかも前のバスが出たのは今からおよそ十分前、という哀しい状況だったのである。

「田舎じゃ、こんな事は驚くに値しないよ。何しろ俺の地元では、平日は一日に三本、休日是一日に一本しか来ないバスが走っていたくらいだよ」僕は不貞腐れたようにベンチに座り込んだヤマダに、そう言った。「一時間半に一本も出るんなら上出来だ」

とは言え、それからの一時間二十分の待ち時間は地獄のようであった。我々はひたすらトランプをやって時間を潰したのだが、白昼駅前で登山用具一式を背負ったまま、この上なく不機嫌な顔でインディアン・ポーカーをやっている二人組、というのは、路行く人々にさぞ奇異な印象を与えたことであろう。

バスの乗客は大方予想した通り、いやそれ以上に少なかった。そして閑散としているのは車内だけではなく、窓の外の景色も走行距離に比例して寂しさを増して行き、その寂しさがピークに達したかと思われる辺りで我々の降りるべき停留所に到着した。砂埃を立ててバスは走り去り、僕とヤマダは果てしなく広がる田園地帯の真ん中に残り残された。ぐるりと見渡すと、緑色一色の田んぼと白っぽい乾いた畑、そして屏風のような山脈、人家は山裾に沿って僅かに点在しているばかりであった。

「いやあ、自然の豊かさ、つてやつですね！」ヤマダは深呼吸をしながら言った。

「あんなのもあるけどな」と僕は、ある山の中腹に突き刺さっている巨大な高速道路の高架橋を指差して言った。何て無粋でごつごつとした建造物だろう、と思いつながら。

「しかし、ここからどう行けばいいんでしょう、キャンプ場まで」とヤマダ。

「知らないよ、俺は」と僕。「地図を見なけりゃ」

「勿論地図も見ますけど、一応現地の人に道を確かめておいた方がいいかもしれないっすね」そしてヤマダは辺りを見回した。丁度近くの畑に、ニワトリのように地べたを這いずりながら草を刈っている婆さんがいた。「丁度いい、あの婆ちゃんに聞いてみましようよ」

しかし、婆さんは何も教えてくれなかった。我々がどんな猫撫で声で話し掛けようが、深く刻まれた皺の狭間で濁った光を放っている、二つの黄色い眼球でぎろりと我々を一瞥した切り、黙々と草刈を続けるだけであつた。「すいませんお婆ちゃん、ちよっとお伺いしますが一」

婆さんは腰を直角に折り、ニワトリのように首を細かく動かしながらそこら中を歩き回っている。何事かぶつぶつと呟き続けているようだが、齒の抜け落ちた口のせいで全く聞

き取れない。ヤマダはついに匙を投げた。その時、彼女の亭主であろうか、一人の爺さんが耕運機を押しながら畑のへりを歩いて来た。一応、会話は出来た。しかし、キャンプ場など知らないと言う。そして何故だか、爺さんは突然に戦争の話を始めようとするのであった。わしや×××におったんじやあ(×××は聞き取れなかった)。戦闘は殆ど無かったんじやが毎日毎日行軍でな、しかも足い踏み入れるのは、沼地ばあじやった。どろどろにぬかるんだ地べた脚を取られとったら、生い茂った木々の先からヒルがぼとぼと落ちてきてのお、おお、ヒルがの、ハリののように細くなって服と肌の隙間にもぐりこむんじや。それで血を吸って饅頭みたいに膨れ上がって、ぼとりと落ちて死によるんじや、血の吸い過ぎでな、死によってな、饅頭みたいに膨れてな。ありやあ堪らんかった、あんたら若い人は、ヒルにたかられた事なんぞありやあせんじやろうかの・・・。

(4)

結局、途中何度か道に迷いながらも、我々は自力で目指すキャンプ場の在る山までたどり着いた。我々は高速道路の高架橋の下をくぐりながら、眼前に聳えている山々のうち、その山頂から中腹までが階段状に不自然に削られており、ロッジだの、バンガローだの、展望台だのが乱立しているのが見られる、実に哀れな様子のはげ山を見据えていた。

そのはげ山の麓まで歩いて行くと、木立ちに紛れるようにして「→キャンプ場へ／登山道入り口」と書かれた小さな立て札が立っていた。ここだな。ええ、ここっすね。我々は静かに頷いた。それにしても、もっと大きな立て札を立てておけばいいものを。

登山道の入り口の横には、地元の人が営業しているらしき小さな食堂が在った。「食事処」という看板が掲げられていなければ、ただの納屋か、農機具の倉庫かと見紛えてしまうような、素っ気ない小屋である。店の脇で誇らし気に風に翻っているのぼりには、ポツプ体の文字で「**自然食品 ゆうき野さい**」と大書きされていた。ここで何か昼飯を食ってから登る事にしよう、ええ、そうしよう、と、我々はその店の暖簾をくぐった。

八畳ばかりの狭い空間に、荒々しく倒した巨木をぎっくり切り分けて作ったような木製のカウンター、椅子、テーブルが置かれている。如何にも山の麓にある店に似つかわしい調度品にも思えるが、恐らくは田舎というものに美しくも奇妙な幻想を抱いてやって来る都会人の客達のために設えた趣向なのだろう、と、田舎育ちの嫌らしい僕などは思ってしまうのである。

カウンターの向うに、ガタイの良い初老の男が棒杭のように突っ立っている。彼の顔と手は痛々しいほど日に焼けており、その大きな頭には垢で汚れたタオルが巻きつけられていた。我々の姿を見止めると、彼は顔を上げ「いらっしやいませ」と嗶声で言った。店の隅では、エド・ウッドの映画に出て来るタコの化け物のような格好で、痩せこけた老人が一人倒れていた。「ああその人ねえ、飲み過ぎただけじゃけ、死んどんじやねえから気にせんといて下さい」と言い、歯茎を剥き出しにして笑った。

品書きを見てみれば、郷土料理らしき聞いた事も無い食べ物の名前がずらりと並んでおり、当てずっぽうで注文するよりかは親仁に任せておいた方が良さだろう、そう思い尋ねると、

「今だと、ランチ・セットがお勧めです」

ではそれで、と僕。俺もそれで、とヤマダが付け加える。

親仁は手際よく里芋を洗い、その皮をむき、細切れにした蒟蒻、人参などと一緒に油で炒め始めた。そして僕らに向かつて、

「すいやせん、ちよつとそのタケ、摘んで下さい」

何の事か分からずポカンとしていると、親仁は「ホラその、ソース瓶の後ろに生えているタケですよ」と言つて、カウンターの一角を指し示した。

ヤマダが瓶をどけてみると、そこにはナメコのような細いヌルヌルとした茸が数本生えていた。突然出現した薄気味の悪い茸に戸惑う我々を前に、親仁は笑つて「汚うはありませんし、毒茸でもありませんけえ」などと言う。彼の菌茎の前では、我々は無力である。結局ヤマダが腹を決め、上からお絞りを被せて摘み取り、親仁に差し出した。親仁はと言うと、それを何の抵抗もなく受け取るのである（時を経て、彼の手の指先から冬虫夏草のように茸が生えて来るのでは——僕はそんな事を想像し、気分が悪くなった）。

親仁はその茸をさつと湯搔くと大鍋に入れ、その上から炒めたばかりの芋やら蒟蒻やらをどさどさと入れ、そこに濃厚そうな味噌を加えて煮込み始めた。ヤマダの小麦色の横顔が群青色に変色してゆく様子が、サングラス越しに見てもよく分かった。返す手で魚を焼き始めた親仁の目を盗むようにして、ヤマダが僕の耳元で囁いた。「大丈夫なんすか、あのキノコ」

「こういう趣向なんだよきつと」と僕。「わざわざ食用のキノコを植えてるんだよ」

「カウンターにですか？」

「そうだ。これ木材なんだから、茸も生やせるだろうよ」僕はコツコツとカウンターを小突いた。「新鮮な食材を求める客に、疑似キノコ狩りを楽しんでもらおうという趣向だろうよ……」

「大丈夫ですよ」聞こえていたようで、親仁が菌茎をむき出しながら言つた。「ちゃんと食べますけん」

「ところで親仁さん、その」と僕は、親仁が網の上で焼いているでぷりと肥った魚を指差して尋ねた。「その魚、何て言う魚なんですか」

「何じゃあ、お兄さん、鮎見た事ありやせんのですか？」

「鮎——」僕は、その肥満した魚を驚愕の眼差しで見つめた。鮎どころか、ナマズの化け物にしか見えない。「いや、おじさん、俺もクニではよく鮎釣りに行つてましたけど、こんな大ぶりの鮎は見た事が無くて……」

「ははは、そうですかい。この辺の鮎は栄養満点の苔を喰つとるせいかな、よう肥えとるけえなあ」最早肥えているだとかいらないだとか、そう言う次元の話では無いように思えるのであるが。

「鮎ってこういうもんなんすか？」ヤマダが小声で尋ねてきた。この男は今までに鮎を見た事も食べた事も無いに違いない。

「さて、お酒は飲まれます？それとも、もうゴハンもんを出しましょうか」

「酒ください！」

さして強くない癖に酒豪を気取っているヤマダが嬉々として答えた。

「大丈夫か、俺達はこれから山登るんだぞ」

「全然大丈夫つすよ。むしろ、酒が入つてた方が力も出ますよ」

「そうそう、景気づけに一杯、ねえ」親仁が扇動する。こうなつてはもう仕方が無い、そういう風にアジられれば僕もなかなか拒否し辛いのである、と言うのも僕もかなり好きな方なのである。

「それでは一杯だけ」と言いつつ、最終的には空になったボトルが一本、などという結果に至る訳だな、僕はそう思いながら、親仁に向けて人差し指を立てて見せた。

「ええ地酒がありましてなあ、この近所でとれた米え使つて作つた……えれえ口当たりがよくて、するする飲めてしまふんですけど結構強いけえ、へへ、程々に」ニヤニヤと笑いながらグラス二つと酒瓶を取り出した親仁は、まるで悪魔ベルゼブブのように見えた。

得体の知れない茸汁、ナマズのような鮎の塩焼き、いずれも我々を大いに戸惑わせた割には存外にまともな味であつた。茸はなめこよりもやや淡泊でほんのり甘く、里芋とよく合つた。鮎の方はそのサイズ故に大味であつたものの、「栄養満点の苔」とやらがギツシリ詰まっていたハラワタのほろ苦い美味さは申し分無かつた。とは言え、僕もヤマダも空つ腹のところへ酒をするすると飲んだので早々に出来上がつてしまつており、何を食つても旨く思えてしまう心持であつたのだが。

あらかた食い終えたところで、親仁が井を二つカウンターのの上に置いて言つた。「冷やし茶漬けです」

刻み海苔をふりかけたゴハンの上に、冷たいだし汁が並々と注がれていた。これは涼し気で夏にぴったりだ、と僕とヤマダは喜び勇んで箸を取つたのであるが、ふと井の中を今一度覗き込んで見たところ、だし汁の中を何か小さい生物が数匹泳ぎ回っていた。

「親仁さん、おつゆの中を何かが泳いでいますけれど……」井の中を指差しながら、恐る恐るそう尋ねてみた。

「それがこの店の名物ですけえ」親仁が誇らし氣に言つた。「サンシヨウウオの稚魚です」
「サンシヨウウオつて……」我々はまたしても仰天した。「あのサンシヨウウオですか！」

「そうです。今さっき、この店の横を流れとる清流で捕つて来たんですよ。イキがよろしいですよ」

半信半疑のまま、僕は眼を凝らして井の中を観察する。半透明で、ほのかに緑色のそれは井の中を縦横無尽に泳いでいる。サンシヨウウオの稚魚など見た事も無かつたので、僕にはそれが本物なのか偽物なのか、分る筈も無かつた。まして鮎すら見た事の無かつたヤマダにとつては――。

「しかし、問題にならないんですか？こんなものを捕つて来ちゃつて。天然記念物指定だとか、条例だとか、色々有りそうに思ふんですけど」と僕。

「まあそこは、ねえ」親仁は片目をつぶつて笑つた。男のウイנקは実に不気味なものである。

「これはこのまま食べればいいんすか」遵法精神のカケラも無さそうなヤマダが口を挟んで来た。

「ええ、生きているうちに食べて下さい。シラスの踊り喰いみたいなもんですよ」

結局僕とヤマダは、微かに山椒の香りがする（ようにも思える）その茶漬けを美味しく頂いたのである。それにしてもサンシヨウウオの子供たちを生きたまま飲み込んでしまつ

た訳だが、このまま彼等が我々の胃袋の中でしぶとく生き続け、成長し続け、やがてあの立派な頭を持つ巨大な生物になってしまったら・・・と思うと恐ろしくなった。そんな阿呆らしい想像をしてしまうのも、酔っ払っているからであらう。

店を出る時には、親仁は漬物の胡瓜を僕とヤマダに一本ずつくれた。

「奈良漬です。山登つとったら、汗かいて塩分が足りのうなるから、これを齧り齧り歩くとええですよ、塩分補給、ばっちりですけえ」と言うのは、親仁の弁。「この辺りには、昔からそういう風習があるんです。漬物齧りながら山歩き、っちゅう。」

こうして我々は酒臭い胡瓜を携え、店を後にしたのである。

(5)

それからしばらくは順調に歩いていたのだが、突然地べたと空がそれぞれ違う向きに三十度ばかり傾き、僕は「ああ、矢つ張りまずかったか」と後悔しながら前後左右に出鱈目なタップを踏んだ。今思い返すと、暖簾をくぐった時、エド・ウッドのタコのように成り果てていた老人を見た段階で警戒しておけばよかったのである。あの店で出される酒は侮れぬ一品だったのである。そこへ来てこんな奈良漬を齧り、血中アルコール濃度上昇に拍車をかけているのであるから、もう僕は本格的に駄目になりつつある訳だ。ふと横を見ると、ヤマダの姿が目に入った。その有様は言わずもがなである。

とにかくそれからの小一時間は話にならない。我々は高歌放吟しながら登山道を進んで行ったのだが、まっすぐ歩く事すら覚束無いのに、正しいルートを進めるはずも無い。いつの間にか我々は進むべき道から大きく外れ、登っていた筈がいつの間にか下っていた。しかし、自分が上昇しているのか下降しているのか、そんな事は酔いの廻った頭にとつては些末な問題に過ぎないのである。結局我々はまたぞろ山の麓に戻ってしまい、そのまま虚脱して地べたに坐り込んでしまったのである。

そんな情けない我々を救ったのは、そこへ通りかかった一人の樵であった。彼は昼間から泥酔して倒れ伏している二人組を奇異に思ったのであろう、「あんたら大丈夫かね」と声をかけて来た。

僕は回らぬ舌で「道に迷った、キャンプ場に行きたい」と言うような事を相当に苦勞しながら述べ立てた。その傍らでは、真つ赤な眼をしたヤマダが大きく頷いていた。

「そんならな、五合目までなら連れてってやるよ」

どうやって?——聞いてみると、ゴンドラを使用するとの事である。

ゴンドラは、山歩きに慣れていないモヤシ人間どもを安楽に上げ下げするべく設置され、それ以外にもキャンプ場で使う物資を運んだり、キャンプ場を出た廃棄物を下ろしたりするのにも役立つっているそうだ。その文明の利器に乗せて、我々を五合目まで運び上げてくれるとの事である。

それは有難い、話を聞いた僕とヤマダは大いに喜んだのであるが、いざそのゴンドラを目にすると酔いが覚めるかとすら思った。錆びついた細いロープに、凸凹に歪んだ箱が辛うじてぶら下がっている。物を載せて動かせば悲惨な事が起こりそうな、そんな機械であった。兎に角、人命を支えるにはこのロープは余りに錆びつき過ぎている、そう思った。

「あの、これ、人が乗っても大丈夫なんすか」心なしか震える声で、我々はそう尋ねた。

「何言よんじゃ、あんたらの何十倍も重たい荷物でも、これで軽々運んどるで」樵は愉快そうに笑った。

そして我々は腹を決める暇も無いままゴンドラに乘せられ、恐ろしくゆっくりとした速度で運ばれ始めたのである。ゴンドラからは美しい田園風景が俯瞰出来た。周りに聳える険しい山々、点在する昔造りの家々、稲が色づく前の若々しい田、そうした景色を台無しにしている高速道路の高架橋――。眺めていると、頭蓋骨の中身が一層激しく回転し出したように思えた。ヤマダは雷のような音を立てて嘔吐し、僕もそれに倣った。折角の茸も鮎もサンショウウオも奈良漬も、不可抗力で我々の中から出て行ってしまった。暴れ出した胃袋と格闘している時、切り紙細工のような花卉を持つ花が、山の斜面にぼつりぼつりと咲いているのが見えた。あれは彼岸花だろうか、いや、こんな真夏に彼岸花など咲くものか、僕は口の中に充滿している酒臭く酸っぱい臭いに顔をしかめながら、朦朧とした意識で漠然とそんな事を考えていた。花は赤く山は緑で空は何処までも青、しかしサンングラス越しに見えたそれらは陰気な灰色に変色していた。またしてもヤマダが雷のように嘶いた。僕もそれに続き、眼下に広がる美しい風景を汚したのであった。

(6)

「さすがに、もう今夜は酒はいいですよね」

ヤマダがそう言い、僕は重々しく頷いた。「もう十分だ」

ゴンドラを降りた我々は無事キャンプ場に到着し、「だれのものでもない、たいせつなみんなの山!」と書かれた看板(何と空虚なスローガンだろう!)の掲げられた管理所で借りたテントを手際よく張った。ゴンドラに乗っている間に胃袋がすっかり空になったお陰で、アルコールの呪縛から辛うじて逃れられたようであった。

僕とヤマダは腰に手を当てて、張り終えたテントの前に佇んでみる。涼しい風が頬を撫ぜて行く。

「なかなか、いい感じだな」僕はちよとした満足感に浸りながら頷いた。

「ねえ、いい感じっすね」とヤマダは答えた。

(7)

宵の口になると蚊の襲来が激しさを増して来たので、まだ早い時間ではあったものの、我々はカンテラを持ってテントに潜り込んだ。

特にする事も無いので、寝転がって漫然と世間話をしていたのだが、そうしていると微妙に酒が恋しくなってきた。ほんの数時間前に起きた悲劇から、我々は何一つ学べていない訳である。しかも都合の悪い事に、鞆の中には安ウキスキーの瓶とポーク・ジャーキーが入っているのである。

「やっぱり飲むか」と僕。「その、酒の量を減らしておけば、帰りの荷物も幾分軽くなるかな」

「そうっすね」ヤマダはそう言って腰を上げた。「じゃあ、割る用の水汲んで来ます。」

「それからお前、テントの中でふかすな。煙たいから」僕は彼の通った跡にたなびいてい

る紫煙にむせ返りながら言った。

「まあ、蚊取り線香みたいなもんだと思つて下さい」そう言つて、ヤマダは外へ出て行つた。

山の上で過ごす夜は、ただただ静かに更けて行くものである。その静寂の空気の中で、テントの隅に転がっているラジオが夜のニュースをぶつぶつと呟いていた。我が国が先月打ち上げた火星探査機が、原因不明の故障により機能停止したまま、消息を絶つたのだそう。億単位の金を注ぎ込んだ挙句の結果が、宇宙を漂う粗大ゴミを一つ増やしただけに終わったという醜態に、各方面から激しい批判が寄せられているとの事。

しかし僕には、億単位の金などどうでも良い事に思えた。それは、「億単位の金」などというものが具体的に想像出来ない、という事もある。が、何よりも僕は消息を絶つた探査機の行方が気になったのである。今頃その機械は宇宙の何処ら辺を漂っているのだろう。機械も寒さを感じたり、愚痴をこぼしたくなるような気分陥つたりするのだろうか——いや、彼（彼女）はきっと我々とは全く違つた、我々には想像のつかないような感慨に耽るのだろう、僕はそう思つた。

「水汲んで来ました」ヤマダが透き通つたペットボトルを掲げてテントの中に入つて来た。

「さ、飲みますか」

(8)

「ちよつと俺、外で煙草吸つて来ます」

随分と出来上がっているように見受けられるヤマダが、唐突に腰を上げた。

「おい、蚊に刺されるぞ」僕は面喰つて言つた。「酒を飲んだ後で蚊の群れの中に飛び込むなんて、自殺行為だ」

「大丈夫ですつて」ヤマダは呂律の回らぬ口調でそう言う。「蚊取り線香、一つ借りて行きますよ」

そして彼は蚊取り線香を携えて、本当にテントの外に出てしまったのである。彼はテントの脇に座り込み、モクモクと煙草をふかし始める。煙草の煙と蚊取り線香の煙、二本の煙が空に立ち昇つて行くのが微かに見えた。

余りにも星が降り過ぎる夜であつた。僕は乳酸とアルコールによつて体中が途方も無く重たく痺れている事に気が付いた。そうだ、もうそろそろ休息が必要だ。そこで、眠りの世界へ自分を先導しようと試みたが、なかなか上手く出来なかつた。身体はこんなにも重たくなり、そして痺れてもいるのに、何故だか頭だけが冴えているのである。しかし、どうしようも無い、この薄暗いテントの中でただただ横たわっているしか道は無い。下手に焦つて、あのモコモコとした毛皮の羊を数えなどしたら、暑苦しさが増して余計眠れなくなる事であろう。

ヤマダはまだ外に座り込んだまま、微動だにしない。その影がテントに大きく映つており、甚だ不気味である。いつも落ち着きのない彼が、微動だにせず、空ばかり見ている。甚だ不気味だ。僕は背筋の寒くなるような感覚を覚えすらすらするのである——大袈裟に言え

ば。
カンテラの灯りが揺れ、名前のわからぬ虫達が草の陰に隠れて絶唱している。ずたずた

になった山の上、疑似的な大自然に抱かれて夜を明かす訳である。このテント、打ち上げられたまま行方不明になってしまった火星探知機みたいだ。一体、彼（彼女）は今頃、宇宙の何処ら辺を漂っているのだろう――？

全く俺はこのはげ山の上で何をやっているのだろう、そんな疑問が頭を過る。僕はその問をさして深く考えず、すぐに放り出す。何故ならばそんな事を考え出すと、どうしようも無くなるからである。代わりに僕は別の事を考える。しかし何を考えようが最終的には何の解答も出て来ず、僕は重たく痺れた体を引きずったまま宙ぶらりんになるだけである。そして宙ぶらりんになったまま、無為そのものの時間が過ぎて行き、その内に何の前触れも無く意識が途切れる。

(9)

「そりやあもう、今ここで見せてあげたかった位です、その光を！ 空にシートや何かを被せて、あのオーロラを包み取って保存しておきたかったすよ。この飽き飽きするような朝の光とは、同じ光だと言っても大違いでもんっすよ」

僕が全く何も聞いていない、聞こうとしてもしていない事も気にせずに、ヤマダは空虚な演説を延々と続けた。謂われない非難を浴びた朝の光は山の緑色を孕み、出鱈目でいて緻密な乱反射を繰り返している。

僕はズボンを捲り上げ、膨張した脛に軟膏をべたべたと塗りたくった。脛は熱を帯びており、軟膏の冷たい肌触りが爽快だった。

「いやもう、あんなのは初めてです。世界の終りかと思いましたよ……」

ヤマダは焼き上がったパンケーキを皿に移した。そして誇らしげにその皿を掲げ「どうですトンボさん、俺の手際の良さ！ヘミングウェイかと見紛うぐらい――」僕は彼を無視したまま、鞆の中を探って林檎ジャムを探している。

「――何を探してるんすか」と、少し哀愁を含んだ声でヤマダが尋ねる。

「あったあった」と僕は林檎ジャムの瓶を鞆の底から引きずり出した。「じゃ、食うか。コーヒ―はそのポットに入ってるから適当に飲みな」

「はい、了解です」

ヤマダはパンケーキの乗った皿をテーブルの上に置いた。そして首の関節をこ気味良い音を立てて鳴らし、大きく欠伸をしつつ伸びをした。本当に落着きの無い野郎だ、僕は彼の一連の動作を見てそう思いながら、自分のカップにコーヒ―を注いだ。如何にもインスタントらしい安物の香り、しかしどうにかコーヒ―としての面目は保っている香りが立ち上った。

「一体なんだったんすかね、あの光は」焼き立てのパンケーキを前に、ヤマダは夢見る乙女のように他愛も無く物思いに耽っている。

「だから、オーロラなんだろう？」僕はいい加減にウンザリしながら、そう答えた。

「そうっす、そうなんです――。いやあ、それにしても、あの空に見えたんすよね、オーロラが。そう、丁度あの辺りに――」そう言いながらヤマダは、目印の付けようもないだっ広い空を見上げる。「――いや、もうどの辺りか分かりません、残念だな」そして、パンケーキにジャムを塗り始める。

「お前なあ、あんまり空ばかり一生懸命見てたら、しまいに気が狂っちゃまうぞ」僕はコーヒーを啜り上げる合間にそう言った。

「いやもう、狂ってるのかもしれないけどね、とつくに」

そう言ってヤマダはジャム塗れのナイフを置き、パンケーキを食べ始めた。

#ジムハッピー#

ひんやりとした得体の知れない心地よさがわたしの頬に張りついていた。その心地よさがわたしのまどろみを引つ張り続け、わたしは覚醒した世界と夢の中を行きつ戻りつ、ふらふらと所在無げに息をしていたのだが、都市特有の湿気を含んだ重たい空気がしつこくまとわりついて離れようとしたため、とうとう目が覚めてしまった。わたしの赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛は、顔や首筋にべったりと張りつき、お気に入りのツギハギだらけの服も通気性に関しては絶望的で、鬱陶しいことこの上なかった。わたしは体を起こし、給水タンクにもたれて座った。さっきまでわたしが頬をくっつけていた、打ちっぱなしのコンクリートの床の上で、わたしは体育座りをして、まっすぐ前方を見やっていた。その視線の先には、一人の不思議なにんげんの姿がある。あれは何という名前の食器なのだろうか、レストランなどで時々見かける、魔法のランプに似た形状の、カレーのルーやサラダのドレッシングなどが入って出て来る銀色の金属食器——そのイラストがプリントされたTシャツ（あきらかにサイズが大き過ぎる、だぶだぶだ）を着て、頭には寝ぐせが目立ち、そして靴や靴下で足を包むこともせず、ハダシ。彼は真つ白なカンバスの傍に立ち、ここ屋上から見える街の景観を、木炭を用いてうつし取ろうと思案している。いや、思案などしていかないのかもしれない。少なくとも、思案しているようには見えない。だいたいこの男、いつもぼんやりと何かを眺めているだけ、そして何かを眺めている時に彼の中でどんな感慨が渦巻いているのかまったく予想もつかないという、本当にわけのわからないやつで、ほとほと困ってしまうのだ。もっともわたしは、そんなことで困ることなど止めてしまったのだが。

「どうよ、調子は」

額に張りついた赤茶色の髪の毛をはがしてから、わたしはそんな言葉を彼に投げた。しかしその声は、わたしの中から上手に出てはくれなかった。弱弱しい咳のように、微かな音を立てただけ。それでも彼は聞きとってくれたようで、わたしに背を向けたまま、左手を空に向かって挙げて見せた。その有さまは、怪しげなセラピストか誰かが実演してみせる、いんちきなアスレチックのポーズのようだった。ああコイツはだめだなあ、わたしはつぶやく、胸中にて、そっと。わたしたちの頭の上に、大きなクジラのような雲が浮かんでいる。

一体どういう風の吹き回しでエカキの真似ごとなんて始めたのか、それは謎だ。だいたい、彼は小説書きだったはずだ。とは言え、その「ショーセツカキ」という形容すらも、いい加減な疑わしいものなのだけれど。何故ならば、彼は数年前に小説を一本書いたつきり、何も作りだしてはいなかったから。

その、彼が数年前に書いたという小説——野心的なカツラ職人と、愛鳥家の株屋との精神的な交流を淡々と描いた小品——は、率直に言って、なかなか良い作品だった。わたしはあまり他人をほめたりしないタチなのだけれど、あの小説を読み終えた時には思わず「ちよっといいね、これ」なんて彼に言ってしまったものだ。でも彼はいつもの調子で、何を考えているのやらサッパリわからない顔のまま「うん」と言った切り、むしやむしやとホ

ーレン草サラダを食べているだけだったけれど。

それ以来彼は小説を書いていない。何度か「また書きなよ」とそれとなく勧めてはみたのだけれど、のれんに腕押し、彼は聞いているのか聞いていないのか判別としない顔つきで「うん、うん」と頷くだけだった。そして昨日久しぶりに会った時には、彼はいつの間にか小説書きを廃して、絵描きになっていたというわけだ。だが、彼はまだ一枚の絵も描いていない。

さて、昨日のこと、わたしはお昼ごはんを食べた後、歯磨きをしている最中にふと「あのショーセツカキのところへ遊びに行こう」と思い立った。口をゆすいだ後、くしゃくしゃの髪の毛に櫛を入れ、入れてもなおくしゃくしゃのままなことを確認して、それから家を出た。わたしの住んでいる場所と、彼の住んでいる場所とはちょっと離れていて、その上わたしは焦ることもなくのんびりと歩みを進めて行ったので、到着する頃にはもう日が傾きかけていた。ドアを開けると、微かにビールのにおいがして、そして、ゴムの木の鉢——彼の殺風景な部屋を、すこしだけ味のあるものになっている観葉植物——がわたしを出迎えてくれた。ゴムの葉はつややかに光沢を放っていた。きっと彼はわたしが来る前に、ビールをしみこませた布切れを使い、その大きな葉っぱを磨き上げていたのだろう。

別に何か目的があつて来たわけでもないの、わたしはフローリングの床にぼんやりと座りこみ、蛍光灯に照らされて光るゴムの葉をただただ眺めていたのだが、ふと視線を下に落とすと、床に散らばったクレパスやスケッチ・ブック、チューブ絵の具などが目に入った。

「いつからエカキになったの」わたしは群青色のチューブ絵の具を拾い上げながら、そう尋ねた（「群青色」という言葉なんて、久しぶりに目にした気がする）。

「最近」彼はいつも簡潔な返答をする。

へえ、わたしは返事ともただの呼吸ともつかない声を洩らす。と言っても、まだ何も描いてないけど、と彼は呟き、山吹色のチューブ絵の具を拾い上げる。そしてそれを、わたしの方に投げてよこす。スナップも効かさずに、棒くいのように伸びた右手を申し訳程度に振って、彼はチューブ絵の具を投げてよこした。そんなもの投げてよこされても、と、わたしは手のひらの上に並んだ二本のチューブ——群青色と、山吹色——を見やる。

彼はその後に、同じようなフォームでトマトも投げてよこした。倦怠の夜も更けてきた頃、彼は突然思いついたように「何か食べる？」と尋ねてきた。別にいいよ、とわたしは言ったのだけれど、彼は背の低い冷蔵庫から小ぶりのトマトをひとつ取り出して、わたしに投げてよこしたのだ。そして彼の方は萎びかけたセロリを一本取り出し、葉っぱが茂っているのとは逆の端をかじり始めた。冷蔵庫の中は、すこし元氣のない野菜がいっぱい詰まっているようだった。

わたしはトマトに前歯を突き立てる。青臭さのない、ハウス栽培のトマト。分厚めの皮を貫通して、しんと冷え切った果肉まで歯が届くと、すこしだけ沁みた。彼はぼりぼりと小気味よい音を立てながら、あつという間にセロリを一本かじり終え、今度は黄色いピーマンに手を伸ばす。深夜、倦怠の空気が沈殿した部屋、わたしたちふたりが発する間拔けな音——安物の生野菜をかじり、咀嚼する音——が、何かの冗談のように響いていた。わたしはトマトを食べ終え、ため息をひとつ吐く。彼は緑色のピーマンをかじっている。

そのピーマンのほろ苦さが、微かに残り続けているようだった。わたしは赤茶けてくし

やくしやの髪の毛を束ね直した。彼はその傍らで、ぎこちなく眠りに就こうとしていたが、結局、彼は朝までまんじりともせず、覚めに覚めていた。夜が白み始めるよりもすこし前の時間に、彼はのっそりと起き出して部屋の隅に行き、小型テレビの電源をつけた。消音モードにして、じらじらと光を放つ平べったい画面を凝視していた。二つのひざ小僧の間に顔を埋めて、相も変わらず何を考えているのか分らない風情で。何も考えていなかったのかもしれない。ただ、何かを感じ取ろうとはしているようだった。わたしはその背中をずっと眺め続けていた。所在無かった。

朝につきものの、太陽を浴びる前の冷たい空気が、わたしの肌の上にうかんだ汗を乾かしてゆく。そのせいで痺れるような寒さにおそわれて、わたしは体に毛布を一層つよく巻きつけた。彼は黙りこくってテレビを眺めていた。テレビも黙りこくっていた。

夜が白み始めるまで、彼はずっとそうしていた。カーテンがほのかな光を受けて白く染まり始めると、彼はようやくと重たい腰を上げ、「屋上に絵を描きに行く」と宣言した。寝耳に水だった。「わたしも行きたい」「いいよ」

今まで眺めていたテレビを消し、それをどけて、その下に置いてあった真っ白いカンバスを小脇に抱えると、彼はそそくさと部屋を出て行こうとした。Tシャツの背にプリントされた、カレーのルーを入れる器のイラスト——銀色に輝く、名前のわからない金属食器のイラストが、薄暗い闇の中に浮かんていた。猫背の彼のシルエットが、壁に大きく映った。わたしも急いで毛布を払いのけ、彼の後を追った。

その時、部屋の隅に溜まっている紙屑の山が目に入った。来た時には気づかなかった。ほんの数行書いただけで中断している、原稿用紙の束だった。彼はその束の上にカンバスを置き、その上にさらにテレビを置いていたのだった。テレビとカンバスが取り払われてむき出しになったその紙屑の山は、白っぽい朝の光にさらされていた。わたしはその横を通り過ぎて部屋を出て、後ろ手にドアを閉めた。

ひんやりとした得体の知れない心地よさが、わたしの頬に張りついていていた。わたしは絵を描こうとしてカンバスの傍らに立った彼の後姿を眺めながら、いつしか眠ってしまったようだった。わたしが目が覚めた今も、カンバスは真っ白なままだった。

わたしは空を見上げる。大きなクジラのような雲があるばかりだった。視線を戻すと、真っ白いカンバスがあるばかりだった。頬には、無機質なコンクリートの体温がまだ残っていた。

彼は振り返り、わたしの方に歩いて来た。わたしと目が合うと、彼は肩をすくめて言った。

「ちょっと俺、出かけて来るよ」

何処に行くの？と聞こうとして、やめた。次に、いつ戻るの？と尋ねようとして、やめた。そんなこと、彼自身が教えてほしいくらいだろう。

彼はポケットを探り、部屋の鍵を取り出した。そしてそれを、わたしの方に投げてよこす。スナップも効かさずに、棒くいのように伸びた右手を申し訳程度に振って、彼は鍵を投げてよこした。そして言った。

「冷蔵庫の野菜、食べちゃっていいよ」

ありがたいけど、きつともう全部萎びちゃってるよ。わたしは率直に答えた。かも知れ

ない、と彼は言った。わたしは手のひらの上に乗っている鍵を見た。パンくずがついていた。きつと、ポケットの中に一緒に入っていた、木炭を消すためのパンのかけらがついたのである。わたしはパンくずを払った。パンくずはほんのすこしだけ空中で瞬いて、それから見えなくなった。わたしの背後でドアの閉まる音がした。それに続いて、階下へ降りてゆく彼の足音が聞こえた。その音もいつしか聞こえなくなり、わたしと、真っ白なカンバスが一枚、屋上に取り残された。

何処に行くの？いつ戻るの？問わずじまいの問いが、都市の上空にわだかまっている。わたしの背には大きな給水タンク、そしてわたしの下には打ちっぱなしのコンクリート。高層ビルの屋上から、わたしは朝の都市を俯瞰している。薄鼠色のような、あるいは薄茶色のような、不穏な色合い。あれをどうやったらカンバスの上に写し取れるのかしらん――わたしはその方法を知らない。建物の隙間を縫って伸びてゆく高架橋の上を、黄色い電車が走ってゆく。あの電車に、彼が乗っているような気がした。乗っていないような気もした。その電車がどの駅から来て、どの駅へと走ってゆくのかも分らない。とにかく、知らないこと、分らないことだらけなのだ。そう言えば、魔法のランプに形が似ている銀色の金属食器は、いったい何という名前なのだろう。

第二章 火

一

一輪の赤い花であった。敦子はその花を、境内の真中で見つけた。

こんな処に曼珠沙華が生えている——庭箒を動かす手を止めて、敦子はそう独りごちた。彼女はその花弁を眺めながら、来るべき秋に思いを馳せ、山を転がり落ちて来る涼風に吹かれていたのだった。

それから一週間も経たぬうちに赤い花は驚くべき速さで周囲へ広がり、いちめんに咲き乱れた。それは、咲き「乱れる」という形容が、これ以上ない程ふさわしい情景であった。境内は真っ赤な花でいっぱいになった。来るべき秋への思いは戸惑いへと変質し、敦子は庭箒を握りしめたまま立ち尽くしていたのだった。

この地方に長々と居座っていた台風がようやくと立ち退き、久ぶりに空が晴れ渡った日、川原に奇妙な草が生え始めた。その草は見る見るうちに背丈を伸ばし、やがて曼珠沙華にそっくりな真っ赤な花をつけた。しかし本物の曼珠沙華は球根によって生えるので勝手に自生したり数を増やしたりはしないであろうこと、そして件の花は彼岸過ぎになっても依然として花を咲かせ続けていたこと、更にその花の背丈が彼岸花の二、三倍もある翁ものであったことなどから、別の種類の植物であると考えられた。しかし、それが何の花なのかは誰も知らなかった。見れば見るほど、曼珠沙華にしか見えなかった。彼岸を過ぎてなお咲き誇っている彼岸花は薄気味悪く、まるで川岸が燃え上がっているかのようにも見えた。

それまで川原には背の低い雑草がひよろひよろと生えているばかりで、実にものさびしい景色が広がっているだけだった。唯一目を引くものと言えば、茶羅端橋という橋の近くに生えている、村人たちが「ダラバナの木」「ダラバナさま」と呼んでいる一本の古木だけであった。

「ダラバナの木」は高齢のためか、病気にかかったせいか、枝や葉はとうに壊死してしまい、その中身もほとんど空洞になりつつあるようだったが、幹だけは辛うじて大地に根を張り昂然と聳えていた。枝葉を失くし幹だけになっても生き長らえていることは得体の知れぬ植物の力を感じさせるものであり、それは「ダラバナの木」が畏怖される一つの要因であった。また、その幹には深く刻まれた皺が人の顔のような模様を作っている箇所があり、村人たちはそれをこの木のトレードマークとして捉えていたのだと言う。さらに、模様のうちで口の部分に当たる処は洞になっていて、風の強い日などはその洞に吹き込んだ空気が変な音を立て、気狂いの笑い声のように聞こえたのだそうだ。

村人たちの中には、その「ダラバナの木」が根を張っている辺りから真っ赤な花が生え始めた、と言う者もあった。真っ赤な花は「ダラバナの木」の根元をぐるりと取り巻いて咲き乱れていた。さらに空洞になっている木の内部で生えたものもあるようで、それらは成長を続けてしまいには「顔」の「口」に当たる洞から外に飛び出して花を咲かせていた。「口」の洞から真っ赤な花をつけた植物が突き出ている様子は、まるで「ダラバナの木」

が笑いながら血を吐いているようにも見え、不気味なことこの上なかった。

真っ赤な花はあつと言う間に生息範囲を拡大し、川原中に咲き乱れるようになった。殺風景な川原の風景は一変してしまった。そのうち川原だけに留まらず、集落の中でもその真っ赤な花が見られるようになった。

「お早うございます」背後で声がして振り返ると、毎朝欠かさずに参拝している加茂田の爺さんが、腰をほぼ直角に折ったままの状態でのそのそと歩いて来た。

「お早うございます」敦子は一礼した。加茂田のじいさんは敦子の足元に生えている真っ赤な花を一瞥するなり、「おやまあ、お寺さんにも生えよったか」と叫んだ。

「そうなんですよ」と敦子は言った。「昨日までは、確かに生えていなかったんですけど――」

「こりゃあよくない花じゃけ、抜いたほうがええですよ」加茂田の爺さんは自分の目の前にすくと立っている、薄手のＴシャツと細身のジーンズに身を包んだ、剃髪していることを除けばそこら辺にいる女子学生にしか見えないような若い尼僧を見上げて言った。

「わしの畑にもこれが生えよってな、たちまちそこら中に広がりよっておかげで土の中の栄養は全部そいつに取られよるみたいで、作物が痩せりやあせんか不安なんですよ。まあ草枯らし撒いたり、刈ったりしとるんですけど、すぐにまた生えてくるけえ、困つとるんですわ」

そして老人はぴんと背筋を伸ばし、境内を見回してから言う。

「それ、今にこの境内一帯がマツカツカな花で埋め尽されてしまひよりまずぞ。キレイなお花畑ならええけど、こう気味の悪い花ばあ生えるんじゃあ、埒あかんです」

加茂田の爺さんの預言は正しかった。三日もしないうちに、寺の境内は曼珠沙華にそっくりの真っ赤な花でいっぱいになってしまった。困ったことになってしまった――敦子は庭箒を手にしたまま、眼前に広がる情景を前に途方に暮れた。赤い色が滲みるような心地がして、目が痛かった。

二

山間の小さな村だった。ありとあらゆるものから忘れられてしまった場所であった。地図の上からも、市や県の行政機関からも、かつて此処で生まれ育ちそして出て行った人間たちからも、まるで窓の結露を拭うように、無人駅の待合室に古びたビニル傘を置き去るようになって忘れ去られた。限界集落、という呼称でもって形容されるのが常だった。今ではそこに生きているのは年老いた農民たちばかりで、子どもも若者もいない。やがて、そう遠くない将来には解体し、消滅してしまうであろう共同体だった。

戦後間も無くの頃、この村の傍に線路を通し、大きな駅を作る計画があった。しかしそれは結局実現しなかった。当時村で力を有していた酪農家たちが「線路を敷いて電車を走らすなど、もっての他だ。電車の音に驚いて、牛が乳を出さなくなる」と主張し、駅建設にこぞって大反対したのである。結局線路はこの地域を大きく迂回して通された。

そして高度成長期の時代に突入し、新たに駅が建設された村の中には、交通網の発達の恩恵を被って発展し、町になり、やがて合併しあって市になるものさえあった。その経済

発展の波は、丁度線路と同じようにこの村を迂回して通り過ぎて行った。

時が経ち、村は過疎化の波に押し流された——今度の波は、この村を迂回することなくやって来たのである。若者たちはこの異様なほど何もなく、何をするのも困難な村を捨てて都市へ出て行き、それきり戻って来なかった。言うまでもなく、新たに村にやって来る人もいなかった。

その頃には、駅建設に反対した酪農家たちはもう引退していたり、或いは他の地域に出て行ったりしていて、村にはいつの間にか一頭の牛もいなくなっていた。時の流れはその歩みの速度を緩めようとせず、牛の次には子どもがいなくなり、そしてもうすぐ人間自体がいなくなろうとしていた。最後には何が残るのか、果たして何が残るといえるのか、誰にも分からなかった。

しかし敦子は、もし線路がこの村に通されていたとしても、それはそれで良い事尽くめという訳にはいかなかっただろう、と思っている。もしもこの村に駅が作られ、それに伴って都市整備事業なども行われていたならば、利便性や経済効果と引き換えに、山が削られたり田畑が潰されたり、村を取り巻いている緑色の風景がずたずたに踏みじられていたであろうことは想像に難くなかった。確かにこの村は何からも見捨てられてしまった、だが、いや、だからこそ、この緑色の風景は残ったのだ。それで良かったではないか、敦子はそう思っていた。

——とは言えその緑色の風景にしても、全てが無事に残されている訳では無かった。

例えば、敦子の寺がある山の、村を挟んで反対側に聳えている山の一角には巨大な穴が開けられ、交通量の極端に少ない無用の高速道路の高架橋が突き刺さっている。

そのまた隣に在る山は、その山頂から中腹にかけて見るも無残な大傷が口を開いている。九十年代の終わり頃、観光事業、地域の活性化、という錦の旗の下、御立派なキャンプ場が造営されたのである。木々は切り倒され、土は削り取られた挙句、「**だれのものでもない、たいせつなみんなの山**」というスローガンの書かれた看板が立てられた。何故「だれのものでもない、たいせつなみんなの山」を切り開こうという気になったのか、敦子には全く理解出来無かった。そして利用客はおかしな程少なく、経営が黒字になったことは一度も無い。高速道路にしてもキャンプ場にしても、議会と癒着している土建業者を潤すためだけに作られたのだろう、と敦子は思う。

結局どちらへ転ぼうが何をしようが、残念な結果というもののしか待っていてくれやしないのだろう、村の人々はそう言う風に考えていた。そして彼らは雪折れしない柳のように、静かに日々を生きていたのであった。

そんな村の人々の信仰を集めている山寺を一人で守っている尼僧が敦子であった。

元々、この寺の住職は敦子の祖父が勤めていた。彼は気難しく変わり者の僧侶で、弟子もとらず跡取りを見つけないこともなく、たった一人でこの寺を守り続けていた。

六年前に祖父が死んだ時、誰もがこの寺は廃寺になると思った。だが、当時高校三年だった敦子が突然に「お祖父さんの寺は、私が継ぎます」と言い出したので、彼女の家族、親戚、彼女の友人たち、近所の人たち、寺の数少ない檀家一同は仰天した。そして本当に彼女は高校を卒業すると山へ修行に行き、長かった髪の毛をばっさりと切って戻って来た

のだった。

一体彼女がなぜそんな発心をしたのか、彼女を取り巻く人間たちはあれこれ思い巡らせてみたものの、何も分からなかった。中には、「昔、敦子さんはよくないことをしたので、その罪滅ぼしのために出家したのだろう。手ひどく振った男が自殺したとか、間違いで出来たこともおろしたりだとか、そんなことがあったのだろう」と言うような出鱈目な憶測をしたり顔で吹聴して回る輩もいたが、敦子は気にも留めなかった。敦子が寺を継いだことで村の人たちや檀家は喜んでいたし、彼らの中にはそんな風評を信じる者などいなかったからである。

結局、彼女は祖父の影響で仏道に入ることを志したのだろう、と誰もが思うようになり、敦子自身もそう考えるようになった。ただ、腹の底を空っぽにして自分と対話してみれば、それもまた陳腐な後付けの理由にしか過ぎないように思えて来るのだった。

実際のところ、敦子は祖父のことを余りよく覚えていないのである。敦子が祖父の事を思う時、おぼろげな輪郭を伴って彼女の中に浮き上がってくるイメージは、彼女が親族や檀家の人たちから聞かされた話の断片によって構成された虚像に過ぎず、それを取り払うと、最早何も残ってはいないのだった。その事實は、彼女の心に微妙な陰影を作っていたのだが、どうしようもないことであつた。

これに対し、彼女の妹——たった一人の、彼女の姉妹である——は子供時代のことを克明に覚えていて、祖父の寺で遊んだこと、色づいた木の葉を拾って来て祖父と一緒に境内で焚き火をした思い出などをしっかりと刻みつけていたのだった。妹がそうした思い出話をする度、敦子は相槌を打ちながらも自分がその頃のことを臆げにしか覚えていないことに冷や汗をかくのだった（しかもその臆げな記憶すらも、後年になってから無意識理に作られたものであるかも知れないのだ）。

敦子は自分よりも寧ろ妹の方が、祖父と寺に対する思い入れが強いに違いないと思っていた。しかし寺を継いだのは敦子であり、妹は大学に進むため遠い街へ出て行ってしまった。不思議なものだ、と敦子は思うのだった。

三

この村に在る唯一の喫茶店「であ・ばうむ」には、今日も常連の老人たちが集っていた。

「であ・ばうむ」のマスターは、六田正三氏という村の名物男である。彼は昔馴染みの親友が老後に故郷でうどん屋を開店し、これが美味いと評判を呼んで県外からも客が来るようになった、という話を聞き、負けてはいられないとばかりに喫茶店を開いたのである。

店舗は改築工事を施した自宅、店名は現在ドイツに住んでいる彼の息子が考案した。ドイツ語で「木」という意味である。（因みに村の人々はこれを略し、「ばむ」と呼んでいる。）結局六田氏の店は、親友のうどん屋ほど繁盛することは出来ないもののだが、野良仕事の間際に村の老人たちが立ち寄る集会所としてそれなりの賑わいを見せていた。（この村においては、例えそれがどんなに小規模なものであつたとしても、「賑わい」というものが発生することは奇跡に近い現象なのである。）

本日「であ・ばうむ」に立ち寄り、六田氏の淹れたコーヒーを飲むべく待っているのは、村のご意見番を自称している自治会長と、南瓜を淡々と作り続けて一世紀近く生きている

寡黙な安田老人だった。二人は野良仕事を一休みし、この喫茶店に世間話をしに来たのである。

「なあ、正ちゃんなあ、その花じゃけど」自治会長が、テーブルの上に置いてある花瓶を指差して言った。

「それ、あれよなあ。村中に咲いとる、例の花よなあ」

「そうじゃ、店の前に生えとるんを切つて来て活けたんじゃが——」コーヒー豆を挽きながら、六田氏が答える。

「花を活けるんはええけど、よりにもよつてこんな花を活けんでもええのに」自治会長は、眉間を思い切り歪めてみせる。「こんなもの、わざわざ花瓶に挿して飾らんでもええじやろ。普段からそこら中に在つて、嫌つちゅうぐらいに見慣れとる花なんじゃから。だいたい、この店の周りにも生え茂つとろが。花瓶に挿して眺めんでも、窓の外に顔を向けりや、見られるわあ。わしゃあ、もうこの花にはウンザリし切とつて、喫茶店に来てまでこんなものを眺めさせられるなあ、真つ平じゃて。」

「やつぱりそうなんかあ」情けない声でそう言い、六田氏は肩を落とした。コーヒーミルから芳しい匂いが漂つて来る。「実はカモちゃんにも言われたんよ、同じような文句」

「そりやあカモちゃんは嫌がるじやろうて」と自治会長。「カモちゃんの芋畑、あの花が生い茂りよつてワヤになったんじやと。どうにかこうにか収穫はしてみたそうじゃけど、花がすっかり土ん中の栄養を横取りしよつたらしくて、どれもこれも痩せこけた、ゴンボミたいな芋ばあで、しまいにや涙が出て来た言うとつたで」

「そりやあ気の毒じやのう」と六田氏。

「しかしなあこの花、どうしようもねえで。抜いても抜いてもまた何時の間にか生い茂つとるんじや。草カラスを撒いても、全然効かんし——」と自治会長。

「どうしてこんな花が生えよんじやろ」と安田老人。

「氣候の変化、とか言うもんじゃねえかな。最近暑うなつたり寒うなつたり、おかしな天氣が続いとろが。」と自治会長。

「氣候の変化、なあ——」と、安田老人は煙草の煙を天井に向かって吹き上げた。「——とにかく、ここんとこ、変なことばかりじやなあ」

そして老人たちは自然に黙り込む。ようやくと豆を挽き終えた六田氏が、コーヒーを運んで来る。そして、そのほろ苦い飲み物を啜り上げる音が店内に響き渡つてゆく。

しばしの沈黙の後で老人たちは、先月死んでしまった久田雄三氏——三人の共通の友人であつた——についての話をぼそぼそ語り合い始めた。

「明後日が四十九日の法要じゃな」と、自治会長。

「ああ、お寺であるんじやろう」老眼鏡をいじりながら六田氏が答える。

「もう四十九日も経つたんか」自治会長は、深いため息とともにそう言った。

それから六田老人と自治会長は、チェスの駒をゆつくりと動かしていくような要領で、彼らの中に残存している久田氏の印象を交互に挙げていくのだつた。ええ奴じやつたな。ああ、ええ奴じやつた。覚えとるか、あいつがヒョイヒョイと山を登つて行く時の、あの後ろ姿。覚えとらあ、そりやあ若い内はわしらだつてあんな風に山の道を歩けとつたが、雄ちゃんは幾つになつても軽々と、な——。そう、軽々と山道を登りよつた。わしらより

ずっと体が強かったわな。おうよ。体の強い、まじめ一徹の男じゃった。ただなあ、ただ真面目一徹っちゅうてもな、詰まらんカタブツというわけじゃあねかった。そうよなあ、面白いところもあつたんじゃ。意外と熱い男じゃったんじゃ、あいつは。そうそう、意外になあ。あいつ、若い頃は祭りが好きでなあ。そうじゃ、あいつは本当に祭り好きじゃった。いつもはくそ真面目なのに、祭りになると飲めねえ酒を食らうわ、女の子に声をかけるわ・・・・・。祭りの時の雄ちゃんの武勇伝はいくらでもあつたで。ああ、もう殆ど忘れてしまったがな。何にしろ、あの頃あ樂しかったな。ああ、楽しかったで。・・・・・それにしても、まさか正ちゃんよりも先に雄ちゃんが死ぬたあ思わなんだ。失礼じゃな、滅多な事を言うもんじゃねえ、縁起が悪い、わしゃあ百まで生きるんじゃ。百までなあ・・・・・。

「なあ」安田老人が口を開いた。六田老人と自治会長は会話をやめ、彼の方を向いた。

「わしなあ、やつぱりどうも、解せんのにじゃけど・・・・・」

「何が解せんのにじゃ」と六田老人は言い、再び老眼鏡を掛けた。

「――雄ちゃんの死に方の事か」自治会長が、押し潰したような低い声で言った。

安田老人は沈黙した。自治会長はやや声を荒げて言った。「またお前え、雄ちゃんは自殺したとか言い出すつもりか」

安田老人はまだ沈黙している。六田老人は不安げな顔つきを浮かべ、恐る恐る二人の顔に目を遣った。

「大概にせえよ」自治会長。「適当なことを言うな。雄ちゃんが迷惑するじゃろうが。田舎の人間はいつもそうじゃ、勝手にどぎつい話でつち上げて、面白おかしく吹聴して、恥ずかしいと思わんのかい。お前え、雄ちゃんの何がわかつとる言うんじゃ」

「お前えこそ何がわかつとる言うんじゃ」

安田老人が突然に恫喝し、自治会長と六田老人は思わず息を呑んだ。安田老人は黄色く濁った目玉に鈍い光を宿しながら、ひとつひとつの言葉をテーブルに並べるように発音しながら自治会長に問いかけた。

「なんで雄ちゃんが死んだか覚えとるか。」

今度は自治会長が沈黙する番だった。

「覚えとるか」と聞いとるんじゃ」安田老人が再び恫喝した。

「イッポンシメジにあつた」

「ほうじゃ」安田老人が、頬の肉を震わせながら頷いた。「で、雄ちゃんはどんな男として村の人氣者じゃった？」

自治会長は静かな声で答える。「村一番の、キノコ採りの名人じゃ」

「ほうじゃろ」安田老人の弛んだ頬肉が揺れる。「なあ、雄ちゃんはキノコ採りの名人じゃつたろうが。あの山の中へ生え取るキノコ、雄ちゃんは知らんもんがなかったで。さつきお前えらも言うつつたが、雄ちゃんはしよっちゅう山道をヒョイ、ヒョイと歩き回つとつた。雄ちゃんは山道をヒョイ、ヒョイと歩き回つては、籠いっぱいキノコを採つて帰つて来たもんじゃで。それに、ほれ、いつだったかな、加茂田の家の女房が食中毒で死にかけた時、医者がなかなか到着せんで困つたことがあつたろう。その時雄ちゃんは『これあ毒茸喰いよつたな』といち早く見抜いて、応急処置をしてやつたろが。それで助かつたんぞ、加茂田の女房は。お前えら、忘れとるわけじゃねかろうが・・・・・。」時に言葉を

探して立ち止まりながらも、安田老人は淡々と語り続けた。彼がこんなに長々と喋ることなど、滅多にないことだった。自治会長と六田老人は黙ってそれを聴いていた。

安田老人は煙草に火をつけ、煙を吐き出して言った。「おかしいじやろうが、どう考えても。なんで名人がイッポンシメジなんか食っちまったんじや。シメジと間違えてもしたんか？」

「縦に裂けるから、あれはよう食用と間違えられるからなあ」と六田老人。

「間違えよるんは素人じやろ、雄ちゃんは玄人ぞ」安田老人は煙草を置いた。「雄ちゃんが間違えてイッポンシメジ食べよったはずが無かろうが」彼は返す手でコーヒーカップを取り上げた。「雄ちゃんは分かっとつて食べたんじや、イッポンシメジだな」

安田老人は一気にコーヒーを飲み干した。そして空のコップを押しのけて「正ちゃん、お代わり」

「でも、どうしてじゃ——」自治会長。

「知らん」そう言つて安田老人は、今度はお冷を一息に飲み干した。「正ちゃん、お冷もお代わり」

「まあ、本当のところは、雄ちゃん自身にしか分からんことじやろう」六田老人が湯気立つコーヒーカップを運んで来ながら言った。「それでもう、今となっちゃ、誰にも分からず仕舞じゃ」

そして三人は黙り込んだ。自治会長と安田老人はコーヒーを啜り始める。六田老人は水差しをテーブルに置くとカウンターの向こうに引っ込み、新聞を読み始めた。そのまま彼等は不安という名の縄梯子を自分の内に垂らして深いところへ降りて行き、自問自答を始めるのだった。

——とりあえず、久田老人が死んだのは全くの偶然であり、ひよつとすると死んだのが自分になっていたのかも知れない。そして決して遠くない将来、自分たちにもその日が来る事だろう。それを静かに待つより仕方が無い、それが生きるということなのか。生きるということとは、死ぬのを待つことなのだろうか。

いやそれどころか、ひよつとして——自分はずっと前に、すでに死んでいるのかもしれないのだ。コーヒーを飲みながら物思いに耽っていると、生きていることと死んでいることの違いも、よく分からなくなってくる気がする。わしらはもうずっと前に死んでしまったのかもしれない。雄ちゃんはそのことに、いち早く気付いただけなのかもしれない。それでは、気づかされたわしらは、一体どうすればいいんじやろうか——。そうした問い考えたところで、このお冷を飲み干したら何食わぬ顔で野良に戻り、そしてまた一日が終わる、それ以上の何かを思い描くことも出来ず仕舞いだった。

・・・・・雄ちゃんはええ奴じやったなあ。ああ、ええ奴じやった。キノコのことなら何でも知つとつたな。ああ、どんなキノコの事も知つとつたし、何処にキノコが生えるんかも完璧にわかつとつた。女房が助かった時に、加茂田は「命の恩人じや」言うて雄ちゃんの足に縋りつきおつたわ。そうじやったなあ。全部、もう昔のことじやなあ。そうじゃ、昔のことじやけん・・・・・。

茜色に色づいた心地よい秋の空気に惑わされ、書きものの机に頬杖をついてまどろんでいた敦子は、突然びくりと身体を震わせて跳ね起きると、飛び退くようにして後ろを振り返った。しかし、振り返った視線の先、彼女の背後にある障子には、特に何の影も映っていなかった。

障子を開け放つと、真っ赤に染まった境内——ほんの数週間前までは、その様子はまるで違和感を実体化させたような不可解なものに思われたが、今ではもはや見慣れた風景となっていた——が見えるだけであり、縁側を歩き去って行く何者かがいるわけでもなかった。

敦子はため息をつき、額にうつすらと浮かんだ玉のような汗を拭った。この寺に来るようになってから四年、こういうことは幾度となく彼女の身に起こっていた。

境内に面した縁側を、子どもたちが一列になって通ってゆく——敦子はそんな幻を何度も「感じ取って」いた。「見」たり、「聴い」たりするのではなく、自分の奥の深いところ、よく分からない部分で、彼女はその幻影を「感じ取って」いたのだった。あの子どもたちは一体何処から来て何処へゆくのだろうか、彼女はそんなことを考えていた。限界集落、と称される山合いの小さな村には、実体のある本物の子どもはもはや一人もいない。ただ、体も持たないで歩いて行く子どもたちの幻だけが、時おり現れるのだった。

何を恐れているのだ私は、落ち着くんだ、何も怖くないじゃないか、敦子はまだ激しく波打っていて、その動きを沈静させようとしない心臓の上に手を当てて、大きく息を吐いた。こういうことはもう幾度となく体験したではないか。彼女は自分にそう言い聞かせ、再び湧き出て来た冷たい汗を拭った。眼前には幾千幾万という数の真っ赤な花卉が、気でも触れたかのような仰々しさでもってその色彩を誇示しているのだった。

敦子は書き物机に戻った。彼女は妹への手紙を書き始めようとしたまま、居眠っていたのである。

妹に手紙を書くのは久しぶりのこと。私はもつとマメに手紙を書くべきなのだ、敦子がかねがねそう思っている。しかし、彼女真っ白な便箋を前にすると、それまでは具体性を伴って存在していたはずの言いたい事、書きたい事のすべてが突然もつれ合って高速回転を始め、ちやうど目の前の便箋と同じような真っ白な色に染まり、最早つい先刻まで自分の頭の中に何があったのか、まったく分からなくなってしまふのだった。それでも自分を叱咤し、薄暗い部屋で電灯のスイッチを探すようにして何とか文章を綴ってはみるのだが、綴れば綴るほど不安が募ってゆく。まるで無茶苦茶に絡み合ったハリガネみたいだ——敦子は書いたばかりの自分の文章を読み返して、絶望的な気分になる。内容に関しても、意味のない紋切り型の文句が並んでいるばかりで、これでは何も書いていないのと同じことだ。敦子は筆を置き、青々とした頭を抱える。

結局、敦子は一本の手紙を書くのに数週間もかかってしまうのである。そうして書き上げた手紙には彼女が本当に書きたかったことは何一つ書かれておらず、かしどうしようもないままに、忸怩たる思いで郵便局へ向かうのだ。情けない、本当に情けない——敦子のため息を吐くのだが、仮に彼女が遅筆でなかったとしたら、まるで新聞配達かと思うくらい、毎日のように手紙を出してしまうであろうことは想像に難くなく、そんなことになれば妹は姉を大層鬱陶しく思うだろう。妹に忌み嫌われるのはまっぴらだ。あの子も忙し

いことだし、今くらいのペースで手紙を出すのが一番よいのかもしれない、敦子はそう思い直し、自分を励ますのだった。

よし、頑張るとするか。いきなり書き始めても例によって途中で詰まるだろうし、ゆつくり下書きを書くことから始めよう。敦子は真っ白い便箋をどけて、ワラ半紙の切れはしを取り出した。

さて、何を書くんだったかな……。そうだ、今年の夏には、妹の大学の友人たち二人がこの寺に参詣しに来たのだった。その時の出来事を書けば、妹はきっと喜んで読んでくれることだろう。

彼等が寺に来たのは、八月の半ばのことである。一人は巨大なトンボ眼鏡のサングラスを掛けていた。もう一人は、健康的に日焼けした肌を持つ遊び人風の男であった。二人とも少々軽薄な印象を与える青年であつたものの、悪い人間では無いようであつた。

「いつも妹がご迷惑をおかけしております」敦子は二人に冷たいドクダミ茶を進めながら、深々と頭を下げた。

「いえいえ、我々の方こそ、佳子さんの邪魔ばかりしてしまつていて」トンボ眼鏡の青年が、タオルで首筋の汗を拭いながらそう言った。

「ええ、本当に申し訳ないです」遊び人風の青年も同調する。

「それにしても、なかなか風情のあるお寺ですね」一気にドクダミ茶を飲み干して、トンボ眼鏡の青年はぐるりと周囲を見回した。「お姉さんの話を佳子さんから伺った時には正直、びっくり致しましたよ。ねえ、お寺で、尼さんをなさっているとは——」

「皆さん、奇異な事のように思われるようで」と敦子が笑うと、トンボ眼鏡の青年は、「そんな、奇異な事なんて飛んでもない」と、明らかに凶星を突かれた時の人間の様子でそう答え、「しかしまあ、たいへん興味を持ったというのも事実でして、是非そのお寺に参拝してみたい、と思う次第です。」

「本当は佳子さんに案内してもらいたかったですけど、『行きたいんなら、自分で調べるなりして行つて下さい』と、取りつく島もなくて——」と遊び人風の青年が苦笑した。

「あの子はこのお寺に来るどころか、最近では実家に帰つて来る事すら滅多にありませんから」敦子は笑つて答えたものである。「ところで、いつからここにお越しになつていらっしゃるんですか」

「ええ昨日の昼頃つきまして。昨夜は、※※山のキャンプ場で一泊したんです」とトンボ眼鏡。

「左様ですか。いかがでしたか、キャンプ場は」

「いやあ、蚊にやられてしまつて……。」「と言いながら、トンボ眼鏡は思い出したように脰脛をぼりぼりと掻きむしつた。

「そのキャンプ場ですね、夜更けにね、妙な光を見たんですよ」遊び人が突然身を乗り出して来た。

「雷みたいなものじゃないかと思うんですけれどね」と、トンボ眼鏡。

「いいや雷じゃあ無かつたつすよ。」やや憤慨したような面持ちで、遊び人が口を挟む。「しいて言えば、そうですね、オーロラみたいないな——」

「オーロラなんか見たこと無いくせに、よくも似てるなんて言えるな」ウンザリだという

ような口ぶりで、トンボ眼鏡が言った。

「とにかくへんな光だったんですよ。お姉さん、一体何だと思っています」

「さあ何でしょうか——私にもちよつと分かりかねます——」敦子は心底困って、そう答えたものだ——目の前に座っている色男から、唐突に「お姉さん」と呼ばれたことで、求道者らしくもなく心乱しながら。（彼女は後からそのことを恥じたものである）

それにしても、北極からも南極からも遠く離れたこんな場所からも、オーロラというのは見えるものなのだろうか。敦子は書きもの机に頬杖をつき、ぼんやりとそんな事を考えてみる。

さてと。——参詣しに来た、二人の学生さんのこと……。敦子はワラ半紙に、まずはそう書き留めた。

それから……。毎回のことなのだが、妹の食生活について一言書いておかねば。

敦子の妹は極端に食が細い。昔からとにかく物を食べない子で、高校時代に軽い拒食症になって以来その傾向は益々酷くなるばかりだった。しかし栗だけは大好物で、常備薬のように持ち歩いて、暇さえあれば齧っているのだった。「研究室にいる時は、しょっちゅう天津甘栗を召し上がっていますよ。勉強するか栗を食べているかどっちかです。よほどお好きなんですねぇ」と、例の二人組も証言していたものだ。

——秋は貴女の好きな栗のおいしい季節ですね。でも、栗ばかり食べてはいけませんよ。栄養のバランスを考えなければいけません……。いけない。小言ばかり言っている、小うるさいお婆さんのようになってしまった。もつと建設的な意見も書かないと。

——栗の他にも、秋が旬の食べ物たくさんあります。美味しくて健康にもいいものが多いです。柿。お芋。マツタケ（……。はちよつとお高いかな）。諸々の山菜。サンマ（……。尼僧である私が、生ぐさいものを勧めていいものかしら？）。

色々と逡巡しながら言葉を探していたのだが、一向に何も見つからず、その内ふつふつと沸き上がって来た奇妙な胸騒ぎに邪魔されて、敦子は筆を置いた。立ち上がり、もう一度廊下に出てみたが、やはり何の影も見えない。敦子は廊下に佇み、肌寒くなった空気を頬に感じていた。

敦子は自分の奥底に沈殿している得体の知れぬ不安を、妹に打ち明けたという思いに駆られることがしばしばあった。時にその考えは狂おしいまでに彼女を貫いた。境内を覆い尽くしている真つ赤な花々を眺めているうち、まるで彼女の中にまで花が育ちつつあるように感じた時——深夜に目が覚めて、巨大な静けさに押し潰されそうしていると気付いた時——そして、まったく平穩無事に一日が終わってふとガラス戸に映った自分の顔を目にした時——そんな日常の端々に、敦子は声としては表わせない叫びを上げたい衝動、それを妹に聞き取ってほしいという欲望を抑えるのに苦労するのだった。そして敦子は自分の修行者としての至らなさ、そして姉としての不甲斐なさを心から恥じるのであった。そして結局、彼女は思いを込めない手紙を書くに留まるのだった。

大きく息を吐いてから、敦子は本堂に掃除に行く。手紙はまた、興が乗ったら書く事にしよう。どのみち今日はもう、一字だって書けやしないだろう。明日は、久田老人の四十九日の法要なのだ。

五

秋も深まり、空気の心地良さが肌寒さへと変貌し始めた頃、久しぶりに村祭りをやらなにかという話が「であ・ばうむ」の常連客を中心に持ち上がった。大方正ちゃんが思いついて自治会長が乗り気になったんじゃないろう、村の人々はそう噂し合ったものである。しかしその魅力的な計画は、判で押したような日々を送る老人達の心をじわりじわりと揺さぶり、着実に支持者を増やしつつあった。

元々この村は、毎年秋に収穫祭を催していたのである。しかし今から四十数年前、祭りの最中に子供が川に落ちて死んだのをきっかけに止めてしまったのだ（その当時はこの裏寂しい山間の村にも、まだ子供がいたのである）。

丁度、「非合理で迷信深い、旧態然とした行事を戦後の新しき時代においてやり続けることは全くの *Nonsense* なのではないか」というような批判が村の自治会からも出ていた時期であった。そこへ来て人死にが出てしまった、しかも死んだのが子供であったのだ。最早、どうしても止めざるを得なくなったのである。

それから四十数年の時を経た現在――、村人たちは再び祭りに目を向けたのだ。負の記憶の断片が漠然と喚起されもしたものの、それは久々に味わう高揚感に掻き消されてしまった。祭りを甦らせることが出来れば、失われた日々までが戻って来るような、村も自分たち自身も一緒に蘇えられるような、そんな淡い期待すら心の何処かに息衝いているのだ。老人達は村の方々で真つ赤な花に埋もれながら立ち話をし、来るべき日に備えて動き始めるのであった。

そんなある日のこと、地元大学の農学部生たちが村を訪れた。彼らは自治会長の依頼を受け、例の花を調査しに来たのである。

真つ赤な花に埋もれたまま朽ち果てようとしている村の有様を見て、調査団の面々は戸惑いを隠せずにいた。学問一筋に生きて来たという風情の、はげ頭の准教授までが「いやあ、ちよっとこういうのは、見た事ありませんね・・・」と言ったきり、黙りこんでしまった。「酷えな、地獄みたい」思わずそう呟いた学生もいた。それを聞き付けた自治会長は、「血の池地獄のようでしょうが」と品の無い声で混ぜ返した。

研究者達は村の中をゆつくりと巡りながら写真を撮影し、花を採取し、その周辺の土を小瓶に詰めるなどして、黙々と調査活動が続けた。河原、畑、人家の庭、道端、ありとあらゆる場所で彼等は作業に当たっていた。珍奇な植物に出くわして学者としての血が騒いでいるせいなのだろうか、彼等は自治会長が期待していた以上の、むしろ逆にウンザリしてしまう程の熱心さを見せたものである。

そして彼等は最後に、山の麓にある廃校を訪れた。無人になってしまっからもう半世紀が経とうとしているこの小学校の跡地には、村の中でも一番酷く花が生い茂っているという話であった。

一同は花に埋もれた廃校の前に、しばし立ち尽くした。百年も千年も前から、この学校は廃校だったのでないか、そんな思いがふつふつと沸き上がって来るのであった。「立入禁止」と書かれた立札と有刺鉄線で囲まれている、まるで古い陶器に残された傷のように慎ましいその空間を、生きている子ども達が走り回り、辺り一面に黄色い歓声がこだました、そんな情景が、幻影でなしに本当に在ったのであろうか。

倒壊しかけている老朽した講堂の中は赤い花で一杯だった。校庭には、台風による大雨の影響で山から崩れ落ちて来た土砂が積もっていて、そこにも花が茂っていた。学生の一人在その土砂の上によじ登って花を摘み、土を採集していた。と、その彼が突然、手を挙げてこう言った。

「ちよつとすいません、ここに・・・・・・何か、白っぽいものが出て来たんですが」それは一見したところでは、ニワトリの骨のようであつた。しかし明らかにニワトリの骨とは違う何かであつた。自治会長は、これによく似たものを子供の頃に見たことがあつた。

自治会長がまだ十歳の時、村はずれに住むオハツという気狂いの娘が、墮胎した子供を畑の裏に捨てるといふ事件が起きた。遺棄された子供を巡査が探し出して回収した時、村中の人間が見物に押し掛けていた。その群集の中に、幼き日の自治会長も居たわけである。巡査の泥だらけの手が、土の中からニワトリの骨のようなものを拾い上げる様子が、彼の目にしっかりと焼き付いた。焼き付けようとは思わなくても、焼き付いたのである。

その時の記憶が、意識の底からずるずると這い出して来た。自治会長は真つ赤な花を押しながら言った。「水子の骨じゃで、これは」

自治会長の予想は正しかった。警察が立ち入り、村は一時騒然となったが、そんな事件もすぐに退屈な日々の生活に押し流され、いつの間にか老人の茶飲み話に上る程度の出来事になってしまった。

「もう骨の腐食が進んどつて、なかなか捜査が難しいそうじゃな」加茂田老人がコーヒーをすすりながら言った。

「最近は何エヌエー鑑定が進んどるっちゅう話じゃが」皿を洗いながら、六田老人が口を挟む。

「外のもんが捨てて行つたんじやろうがな。多分、永久に犯人はわからんで」と、安田老人。

「迷惑な話じゃで」自治会長は唾を吐き捨てるようにしてそう言い、冷えて酸味の強くなつたコーヒーを一気に流し込んだ。

敦子は自治会長に請われ、水子供養に赴いた。廃校の校庭の隅、こんもりと盛り上がった土砂の山を前に、敦子は観音経を一身に読誦した。背を伸ばし続けている真つ赤な花々に取り囲まれて、まるで炎の中に一人佇んでいるみたいだ、と彼女は思った。水子が一瞬の間に燃やした生命の炎が、まだそこかしこに残留しているのかもしれない、とも思えた。

寺に戻った後も、敦子は生まれなかった子どもの事を考え続けていた。やがて釣瓶落としのように日が暮れて、静かな夜が訪れたが、その巨大な静けさに息苦しさを覚え、押しつぶされるような心地がして、敦子はなかなか眠れないでいた。とうとう彼女は起き上り、本堂に行つてもう一度観音経を読むことにした。足の裏に冷たい感触を覚えながら、敦子

はゆつくりと廊下を歩いて行く。境内に咲き誇る花々の、もはや深紅という形容では言い表せないまでに深まってしまった紅色が、美しい青銅色の月に照らされていた。

×××××

ドラバナの木が倒れたのも、丁度その頃のことだった。

木の内部は腐食が進んで空洞になっており、真っ赤な花がぎつしりと詰まっていた。幹の中で生長を続けた花が、ドラバナの木をへし折ってしまったのだろうと人々は結論付けた。もうドラバナさまの笑い声を聞くことも二度と無いんじゃないなあ——と老人達は晩秋の空気の中で静かなる感傷に浸るのであった。

六

祭りの再現は難航した。どんな絵が出来上がるのか分からぬままに、夥しい数のジグゾー・パズルのピースを掻き回しているかのような有様であった。村人達は野良仕事を終えた後で「であ・ばうむ」に集い、皆で密造酒を飲み交わしながら、記憶の断片を掘り起こして繋ぎ合せようと悪戦苦闘していた。今となっては、まるで性質の悪い冗談のように思える話だが、最後の祭りが行われた時には、老人達は血氣盛んな若者達だったのである。その頃に生み落とされた幸せな思い出の数々は、彼等の脳髓の奥底にしまいこまれ、変質し変色し、時の重みに耐えかねて湾曲し、終いには散逸してしまっているのだった。

一日目はなあ、干し若布で作った旗を持って村の中歩きよるんよなあ。そうじゃ、お宮の裏に生えとる木の枝を採って来てな、それに干し若布を結わえて歩くんじゃ。歩く時に、お神輿は担ぐんかな。待たれえ、神輿なんぞ担ぎやあせんかったで。何を言よんな、お宮の拝殿の横に神輿が置いてあろうが。ありやあ担がずに、そのまま置いといて拝みようつたが。そうじゃつたかの。ちよつとええか、さつき若布がどうこう、旗がどうこう言うとつたけどなあ、わしの小さい頃は旗じやのうて笹を持って歩きよつたんじやが。笹あ？そうじゃ笹じや。祭りの前に、自治会の連中で笹を採りに行きよつたらうがなあ、会長。さあどうだったかの。わしも若布の旗を持ちよつた氣がするんじやけんどなあ、磯臭くてかなわんかった氣が。それから、村ん中を練り歩くんは二日目の朝じゃろう。何言いよるんか一日目の昼じゃろうがなあ、正ちゃん。いやあ、もう覚えとらんのお。……。

一方、笛の吹き手を見つけ出すべく奔走している自治会長も、己の絶えまぬ奮闘が徒労に終わるのではないかという恐怖感に捕らわれ始めていた。この村の祭りには、鳥の声にも似た横笛の音が欠かせぬものであったのだが、当時その笛を吹いていた人物達は今では一人残らず死んでしまっているものであった。(現在は老人であるところの村人たちが二十代や三十代であった当時、笛の吹き手たちはすでに七十を越えていたのである)。

今年百三歳になる前代の自治会長が、曲を覚えていられるかもしれない——そんな話を聞きつけて、自治会長は秘伝の横笛を手に(それは村外れにある神社の拝殿の中で、半世紀分の埃を被って眠り続けていた)彼の家へ赴いた。

巨大な肉塊のような前代会長は、両肩の間に頭をめり込ませつつ座椅子にもたれかかり、

確かに一度見よう見まねで笛を吹かせてもらったことがある、しかし今でもそれが出来るかどうかは定かではない、何しろ私は昨日うどんを食べたのか卵粥を食べたのか、どっちだったのか思い出せぬような体たらくなのに、五十年も六十年も前に聴いた音曲を思い出せと言うのは酷な話だ——と言うようなことを、荒い息遣いで、相当に長い時間をかけて語り終えた。

それが単なる謙遜でなかったことは、程なくして明らかになった。前代会長がその焼き鱈子によく似た唇を笛に押し当てた時、笛から漏れ出して来たのは喘息の咳のような音、空気が軋んでいるかのような音で、そこから旋律らしき断片を拾い集めることはあまりに骨の折れる作業であるように思われた。自治会長はその苦しい音色を聞きながら、どうやってこの演奏を切り上げさせて退散すればいいか、そればかりを考えていた。

「いやあ、なかなか難しいもんです」そう言って、自治会長は頭を掻いた。

「ご苦勞様です」敦子は微笑んだ。

「無事に出来りやあええんですが、どうもねえ……。私らの記憶は雲よりも掴みどころのない有様ですけんなあ」自治会長は手桶を置き場に戻し、曲がった腰を叩いた。彼は休日になると寺にやってきて、先祖の墓に参拝するのであった。「まあ、楽しみにしててください……。それじゃあ私は帰りますんで。これから市の乾物屋にかけあって、でえれえ量の干し若布を送ってもらう算段をしますわ」

×××××

敦子は静かに目を開いた。夜更けの冷気が彼女の周りに沈殿していた。ゆっくりと上体を起こし、大きく息を吐く。虫の音が聞こえて来る。彼女は立ち上がり、部屋を出た。

障子を開けると、強烈な赤い色彩が彼女の眼を射抜いた。境内が火の海になっていた。その炎は音を立てることもなく、静かに、それでいて激しく燃え盛っていた。その向こう、山から見渡せる風景——刈入れの終わった田園と、そこに点在する集落にも火は広がり、静かに燃え続けていた。その情景を眺め続ける敦子の目の前を、子どもたちの行列が横切って行った。

子どもたちはめいめいの手に松明を持っていた。彼等はそれを高く掲げ、音も無く通り過ぎて行くのだった。松明は仄かな光を放ち、子どもたちは項垂れたまま、一步一步足を踏み出す。その速度はともゆっくりしたものだったが、次の瞬間には取り返しもつかぬほど遠くに行ってしまうようにも感ぜられた。

あの子どもたちの中には——と敦子は、揺らめきながら遠ざかってゆく彼等の後ろ姿を見送りながら、心の中で考え続けていた——四十数年前、祭りの最中に川に落ちて死んだと言う不運な少年や、この世に生まれ出でてすぐに土の中へ還ってしまった水子も、列を成して歩みを進めているのだろうか——。追いかけても、彼女の足は冷たい床に根を下ろしたように固まっていて、声は押し潰れた咽頭の奥でかき消えてしまった。辛うじて敦子は右手を挙げ、彼女の視線の先、夜の闇の中に溶解しようとしている残像に向って差し伸べた。と、その時、最後尾を歩く子どもが振り返った。その子には、顔というのが無かった。

虫の声だけが聞こえていた。

顔を失くし、体も持たない子どもたちは、何処へともなく消えて行つた。

敦子は夜更けの冷気に包まれて、その場に佇んでいた。

炎は、静寂の中で燃え続けていた。

七

村人たちの待ち望んでいた祭りは、澄み渡るような秋空が広がる晴れの日に行われた。

もうそろそろ、冬の忙しない足音が聞こえようかという時候だった。透明な青色と、強烈な深紅のコントラストが目眩しかった。

「一時はどうなることかと思いましたが、まあこうして無事に祭りが取り仕切れるようになりまして」自治会長は昼間から酒で赤く染まった顔で嬉しそうに言った。「ええ、本当によかったです」と敦子も微笑んだ。彼女は今日は山を下り、法衣の上からハッピを羽織って祭りに参加していた。酒を飲まない者には甘酒が振舞われたので、敦子はその仄かに生姜の香りのする熱い飲み物の入った紙コップで手を温めながら、揃いのハッピを着て動きまわる老人達を眺めていた。誰もがあらん限りの笑顔を浮かべ、浮かれた所作でおどけて見せ、久々にこの寒村に活気を呼び戻そうと躍起になっていた。まるでお芝居の最後の場面を見ているようだ、と敦子は感じた。

取り合えずの見切り発車であった。祭りに関する寄り合いでの議論が混乱を極め、最早どうにも収拾が付かないのではないかと誰もが思い始めた頃、自治会長の「ええ加減にせんと、冬が来よるで」という鶴の一声により、寄り合いの議題は、正確な祭りを再現する事から、それなりの妥協点を見つける事へと転換したのである。それは前進でもあり敗北でもあった、どちらかと言えば敗北そのものであった――。しかし、仕方が無かった。そして村人たちにとって、仕方が無いことを仕方が無いと言って受け入れることなど造作も無かった（何しろ、彼等はずっとそうやって生きて来たのだから）。こうして、とうとう祭りの開催にこぎ着けたのであった。

まず一日目は、干し若布で作った旗を掲げ持った村人たちの行列が、集落中を練り歩く――結局、数週間に及ぶ激論の末、そのような形式に落ち着いたわけである。

揃いのハッピに身を包み、磯臭く日向臭い旗を右に左に振り回しながら、老人達は歩き続ける。普段から野良で一日中働いているせいか、彼等の足腰は予想以上に強靱であり、敦子は油断していると置いて行かれそうになった。それにしても目につくのは干し若布で作った旗であるが、海から遠く離れたこの山合いの村で、なぜ海藻でもって旗を作る伝統が生まれたのか、敦子は知る由もなかった。取り合えず、晴れでよかった。もし雨が降れば、たちまち干し若布は本来の姿を取り戻し、悲惨な事になるだろう――敦子はそう思った。

行列を先導しているのは一台の軽トラで、その荷台に大黒様のごとく鎮座しているのが前代自治会長であった。彼は眼前に設置された拡声器に向って笛を吹き鳴らし、音はやや変調しながら村中に響き渡った。その笛の音に合わせて村人たちは手を打ち鳴らし、歌った。てんでばらばらの音の波が、破滅的なステレオ効果を発揮しながら互いにぶつかり合い、混ざりあい、溶け合っていた。前代会長は元々赤みのさしていた顔を更に赤く染め上

げて、一心不乱に笛を吹いていた。腹の底で眠り続けていた何者かが頭をもたげ、彼の肺臓を突き上げてでもいるのだろうか、その呼気の最後の一片までを絞り出させようとしてもしているのだろうか。夢見るような表情を浮かべ、前代会長は笛を吹き続けた。そしてその後ろ、同じような表情をした老人達が、ぞろぞろとつき従って行くのだった。

夕刻になると、村人たちは河原に集まった。河原には一面に赤い花が咲き乱れていたが、一角だけ地面の見えている場所があった。それは「ダラバナの木」が生えていた場所であった。先日、村人達が総出でやって来て、伐採作業を行ったのである。

「まあ、またすぐに生えて来るじやろうが、今夜一晩持てばええんじや。『焚火』が終わるまで持てばええんじや。」と自治会長は言った。「花が生い茂ったたら、火い焚くことも出来やせんからのう」

そう言つて彼は持参したドラム缶を置き、近くに転がっていた流木や伐採されて積み上げられていた花をその中に詰め込んだ。

「祭り一日目の締めくくりはな、こうやって焚き火をするんじや。煙が天に昇るとな、神さんとわしらの間に道が出来るわけじや。」

六田老人がドラム缶の中に灯油を注ぎ、仕上げにマッチを放り込んだ。たちまち火の手が上がり、薄暗い宵の口の風景をぼんやりと照らし出した。

「じゃあみんな、これ食いよれ」

自治会長がサンショウウオの干物を取り出し、細かく千切つて皆に配つて回つた。加茂田老人はそのかけらを焼酎に漬け込み、「これで無病息災じや」と言つて満足げに何度も頷いていた。

「ハタ、入れられ、ハタ」

誰かが言つて、一同はめいめい手にしていた干し若布の旗をドラム缶の中に突っ込んだ。敦子も自分の旗を火の中に放り込んだ。ぱつと小さな火花が散らばり、熱い空気が彼女の手の甲にまわりついた。

その後敦子は安田老人と一緒に佇んで、ドラム缶からこぼれだす火が川風になびく様子を眺めていた。それは煌々と光を放ちながらうねり、一瞬たりとも同じ形に留まる瞬間がなかった。

「昔はな、この火の中へ使い古した案山子を立てて燃やしたような覚えがあるなあ」安田老人が言った。

「それから昔はな、この火をかがり火にしてな、子どもたちに持たせたんよ。そう、この土手の上をな、稚児行列がかがり火を持つて行進したもんじやあ」

加茂田老人に焼酎を分けてもらったせいとか、普段は寡黙な安田老人は雄弁に語り続ける。「これは子どもらには酷な作業じやったよ。宵の口になって、もうお眠になつてしもつた子もおりやあ、燃え盛る火に怖じ気づいて泣き出しよる子もおつた。そりやあ危ないでえ、子どもに火を持たすんじやからな。しかしこりやあ、せにやならん儀式じやゆうて、皆引つ叩いてでも子どもにかがり火を持たせて、この土手の上を歩かせたもんじや。なあ、敦子さんが生まれるずっと前はな、そう言う事をしottaんじや。知つottaかい？」

「いえ、存じておりませんでした——」と敦子は言い、じつと火を見つめていた。

「ほうか——ほうじやろうな。ずっと前じやもんな、あんたが生まれるずっと前じやもん

な」そう言つて安田老人は口をつぐみ、遠慮がちな音を立てて焼酎を啜つた。再び、辺りを静寂が覆つた。

本来なら、旗を燃やした後、火の回りをぐるぐると歩き回りながら歌を歌うという儀式を行うはずだった——敦子はそれについて、自治会長から事前に説明を受けていた。しかし、旗が火中に没して灰となり、川から吹いてくる風によつて空に巻き上げられてからも随分経つというのに、誰も足を踏み出さず、歌を口にすることもなく、火をひしと取り囲んで押し黙つたまま立ち尽くしていたのだつた。誰も歌わず、誰も動かなかつた。余りに大きすぎた時間の流れに巻き込まれて、ことばも声もとくに振り落とされてしまったのかも知れない——しかし、「歌」は確かにそこに現出していた。今まさに村人たちは歌を歌っているのだろう、それは音の無い歌だ。音の無い歌が、火を燃やし、花となつて咲き誇っているように敦子は感じた。

日が落ちた後の薄暗い空に向かって、乾いた空気を食みながら炎が立ち上つて行つた。あらゆる事物の輪郭が薄暗い闇の中に崩れかけていて、揺らめく火の影を反映していた。それらを取り巻くようにして、真紅の花々が花弁を燃えたぎらせている。土手の上を幾つもの小さな灯が進んでゆくのが微かに見えた。村中に咲き乱れた花が一斉に炎を吐き、山も空も人も焦がしてしまった。何十年も、いや何百年も何千年も蓄積していた形のない岩漿が、朽ち果てようとしている世界の傷口から一気に噴き出し、そこら中で瞬いているかのようにあつた。燃え上がる、燃え尽きようとしている、と敦子は心の中で呟いていた。

安田老人が、足元に落ちていた数本の赤い花にふと目をとめた。彼はそれをまとめて拾い上げ、その花弁を灯油の入ったポリタンクの中に突っ込み、返す手でドラム缶の中に入れた。たちまち花に火が移り、安田老人はまるでそれを松明のように掲げてみせた。彼の顔は揺らめきながら燃えている火に柔らかく照らし出されて、宵闇の中へのっぺらぼうのように白く浮かび上がった。

その様子を見ていた村人たちが、一人、また一人と安田老人の真似をして花を拾い上げ、火を灯した。火は仄かな光を放ちながら燃えて、彼等の影を揺らした。

老人たちは互いの顔を照らし合いながら、静かに立っていた。青白く宵闇に浮かび上がった彼等は、まるで顔がなくなっているかのように見えた。

川から冷たい風が吹いて来て、敦子は思わず身体をふるわせた。

燃え盛る炎が、ドラム缶の中から溢れ出しそうになった。

それを囲んで、手に花を持った老人たちが押し黙つたまま佇んでいた。

白く浮かんだ顔の輪郭が、闇に溶け込んでいった。

#ジムノペディ#

「それにしても驚いたなあ、佳子さんのお姉さんには——」

中華料理屋のテーブルに頬杖をつき、そのうち運ばれて来るであろう回鍋肉を待ちながら、僕はヤマダに話し掛ける。

「やっぱり、流石尼さんだな。ちゃんと剃髪して、法衣を着て——」

ヤマダは微動だにしない。彼は口元に冷やし中華の麺を運んだところで機能停止しているのである。箸から垂れ下がる黄色い食べ物が虚しく揺らめいている。

「しかし、佳子さんには似てなかったなあ。姉妹だと言うのに。雰囲気も、性格も——」

この店の店員である赤茶けた髪の毛の女の子は、詰まらなそうな顔つきでテレビを眺めている。ヤマダは相変わらず、冷やし中華を食べ掛けたまま動きを止めている。こういう雰囲気の時間は、割とよくあることなので、僕は気にせずに話続ける。早く回鍋肉が来ないかな、と頭の片隅の隅の方で考えながら。

第三章 さよならハガキ職人

TTTTT

わたしはその少年を「ハガキ職人」と呼んでいた。彼はわたしの傍らで、せつせとハガキを書いていたものだ。

不安定な天気の日が続く冬のことだった。わたしたちは虚脱しきっていた。霜に焼かれた雑草が弱弱しく生い茂っている、くすんだ色の土手の斜面に腰かけて、そこから目に映るものを何をするでもなく眺めていたのだ。さまざまな高さのビルディングや、色々な色で彩られた屋根の連なりによって組み立てられた街、ほんとうはカラフルな風景なのに曇天のせいで灰色一色に染まってしまった街を、うねうねと曲がりくねりながら流れる川が分断していた。川はひねくれた曲線を描きながら、そのまま空も分断し、風も分断し、しまいにわたしたちまでを分断して、なにもかも四散してしまうのかもしれない。しかし、少なくとも眼に映る限りでは、均衡は保たれているようだった。

ハガキ職人はつたない文字を並べて、ハガキを書き続けていた。あんなにたくさんのハガキを書いていたというのに、彼はちつとも字が上達しないのだった。

今日はオーロラが見えました。

彼はちびた二B鉛筆を握りしめ、大きくて不ぞろいな文字をブッキラボウに書き連ねている。書き終えると、彼は満足気に——と同時に、限りなく不満気に——その紙片を眺め回してから、わたしの手の中に押しこんでくるのだった。

「この嘘つき」とわたしは言った。

「嘘なんてつかないよ」彼は毛糸の帽子を目深にかぶり直し、膝を抱えて背中を丸める。彼はいつも、おかしくなるほど平凡な動作を、おかしくなるほどどこちなく行うのだ。

「どこに出てるのやら」わたしは空を見上げる。垂れこめた雲の一角が、今にも泣き出しそうな顔つきで風に流されていた。

「そう簡単には見えやしないね」膝に顔を埋めたままで、ハガキ職人はそう言った。

今日も厄日か。わたしは大きく息を吐き、その真っ白なかたまりを空中に浮かべてみる。鉄橋を渡りゆく電車の足音が、しんと冷え切った空気をかすかに震わせていた。ともかく冬を越さないかどうかにもならないね。でも一体何をして季節をやり過ぎすべきなんだろう。アリは地下に貯めこんだご馳走に舌鼓打ちながらダンパに興じ、キリギリスは弦の切れたバイオリンを片手に野垂れ死ぬ、それじゃ、わたしたちは何をすればいいのかな。口には出さずにそう尋ねたら、ハガキ職人は昂然と頭を上げ、ポケットからちびた二B鉛筆を取り出して、またぞろハガキを書き始めた。

わたしはもう一つ、綿菓子のような吐息を空中に浮かべてみる。その向うに、灰色に煙った街が見える。わたしの赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛が、川面から吹いてくる風に巻き上げられる。まるで首筋に氷を押し当てられたような風の冷たさに、思わず身震いをする。今日はオーロラが

見えました、か。このうそつきめ。

〒〒〒〒

何もすることがないわりには、何かしなければいけないことはいくらかもあるのだった。わたしは客の少ない中華料理屋で給仕のバイトをしたり、電話越しに聞こえてくる親の小言に適当に相槌をうったり、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛に櫛を入れて、無理やりに梳いてみたりするのだった（それでもやっぱり、わたしの髪はくしゃくしゃのままだった）。

客の少ない中華料理屋のバイトは、さしてしんどいものではなかった。くしゃくしゃの髪の毛を無造作に束ね、どうしようもなく垢抜けないチェック柄の桃色のエプロンをつけて、お昼どきに常連客の大学生たち相手に油まみれの定食を出し、後はのんびりとテレビを見ているだけだった。

それにしても、あの男子大学生といういきものは、どうやってあんなにがつがつと、信じられない量の食べ物を平らげてしまうのだろう。特に、週に必ず一回はやって来る、トンボ眼鏡のサングラスをかけた人と、こんがりと日焼けした遊び人風の青年の二人組は、胃ぶくろがどうかなっているのかとおもうような食欲だ。どうでもいい話をえんえんとしながら、餃子でビールを一本空けて、大盛りの中華丼をぺろりとたいらげ、肉とキャベツの味噌炒めを追加して、あげくの果てにもう一皿餃子を食べる。彼らは胃袋を甘やかしているのか、それとも痛めつけているのだろうか。

「よくまあ、そんなに食べられますね」

給仕たるもの、すこしは愛想よく接客をしなければ、と思ってはなしかけてみたのだが、なんだか妙な悪意のある言葉になってしまった。しかし、トンボ眼鏡の人と遊び人はおかしげに笑いながら、

「ひどい言い草だなあ、赤茶毛さん」などというばかり。それどころか、さらに杏仁豆腐を追加したりする始末。

彼らはわたしのことを『赤茶毛さん』と呼ぶ。わたしの、赤茶けてくしゃくしゃな髪の毛にちなんでひねり出された渾名だ。（わたしはこの渾名を、わりと気に入っている。）

食欲の権化のような兄さんたちを置き去りにして、わたしはカウンター席に寄りかかってテレビを見ている。「観ている」のではなく「見ている」。見たいもの、知りたいこと、何も無い。ただ、賑やかな音を耳にしていた方が、よりしずかな気分でいられる気がするのだ。ねえ、赤茶毛さん、追加でトリの唐揚げね、などと誰かが叫んでいる。聞こえないふりをして、わたしは頬杖をついたまま、午後の眠気に柔らく包まれている。

たまにバイトをさぼって、わたしはふいと街へ出てしまう。さぼった処で問題はないのだ、客足の少ない時間帯を選びさえすれば。しかし街へ出たところで、何か面白いことがあるわけでもない。むしろ、ただでさえ面白味のない我が日常が余計退屈なものになるぐらいだ。欲しいものも特にないいし、やりたい遊びも特にないい。というところ、「何て詰らない奴」などと言われるかも知れないが——しばしば実際に言われたこともある——、わたしに言わせれば、退屈することの素晴らしさも知らずに生きている人間の方が、余程詰らない奴だ。

わたしの時間の潰し方と言えば――まずは、客の少ない路面電車に乗ってみること。古びたアルミの弁当箱のような、小ぢんまりとした電車に乗って、大通りを呑気な速度で走るのだ。あの奇妙にノスタルジックな、独特のリズムで揺られていると、とつくに忘れてしまった諸々の重要時とも思いつけるような気がして――あくまで、気がするだけなのだが――なかなか気分のいいものなのだ。

それから環状線に乗って、スモッグ色の空の下をぐるぐると回り続けること。高架橋から俯瞰できるこの街は、せせこましく汚れていて、わりと乙なものだ。黙々と仕事をこなす郵便配達夫のように、ひたすら街を回り続ける環状線はわたしのお気に入りだ。先日、わたしの数少ない友達の中の一人が、その列車に乗って街を出て行ってしまった。彼は画家だった。しかし彼はこの街にいて、結局一枚の絵も描き上げることができなかった。そして彼はある朝ふと思いつち、列車に乗って街を出て行ってしまったのだった。環状線の線路は閉じた円環のように見えるけれども、何所か遠くの場所に通じる道とも繋がっていたのだなと、わたしは彼がいなくなってから初めて気づいたのだった。

そしてもう一つが、土手の斜面に腰かけて、特に何を考えるでもなく呼吸だけして過ごすこと。霜に焼かれた雑草が弱弱しく生い茂っている、くすんだ色の土手の斜面に腰かけて、そこから目に映るものを何をするでもなく眺めてみるのだ。さまざまな高さのビルディングや、色々な色で彩られた屋根の連なりによつて組み立てられた街、ほんとうはカラフルな風景なのに曇天のせいで灰色一色に染まってしまった街を、うねうねと曲がりくねりながら流れる川が分断していた。川はひねくれた曲線を描きながら、そのまま空も分断し、風も分断し、しまいにわたしまでを分断して、なにもかも四散してしまうのかもしれない。しかし、少なくとも眼に映る限りでは、均衡は保たれているようだった。そして、そんな風にわたしが土手から風景を観察していると、決まって出会う奇妙な少年が一人いて、それが例の「ハガキ職人」だったのだ。

ハガキ職人も土手を気に入っていたようで、わたしと同じようにしょっちゅう足を運んでいるようだった。彼はズボンが汚れるのも厭わずに斜面に座りこみ、せつせとハガキを書いていたのだった。

TTTTT

「何やってるの？」

わたしは最初、そんな風に彼に話しかけた。

「おねえさんの方こそ、何やってるの？」黙々とハガキを書きながら、彼は無愛想な声で答えた。

「特に何にもしていない」わたしはそう答えた。「で、そっちは？」

「ハガキ書いている」彼はそう答えた。わたしは満足してうなずいた。いい回答だ。

わたしが断りなく、勝手に横に座りこんでも、ハガキ職人はすこしも気にする素ぶりを見せなかった。彼はハガキを書く邪魔さえされなければ、誰が自分の隣にいても、一向に気にしないようだった。わたしはぼかんと空を眺め、そして彼は黙々とハガキを書き、そして地球は回る。めいめいが、めいめいの仕事に励むのだ。

やがてハガキ職人は、頼みもしていないのにわたしにハガキを押しつけてきて、その文面を読ませるようになった。ハガキに書いてあることは、いつもでたらめなほら話、うそっぱちばかり

だった。

今日ぼくは大きなくじらをつかまえました。くじらはボブという名前です。ボブの口の端からは、四年前に倒したという大王イカの足がはみ出しています。四年った今も飲みこみ切れていないほど、その大王イカは巨大なのです。

エンパイア・ステイトビルのでっぺんに腰かけて、このハガキを書いています。書き終わったら、飛び降りてしまうつもりです。心配は無用です。ちゃんと大きくてかつこいパラシュートを背負っていますから。パラシュートは、ぼくの好きな蛇の目の模様です。

空から怪獣が降ってきて、街をめちゃめちゃにこわしてしまいました。それは、雪が降っている日みたいにしずかな夜のことでした。

わたしは苦笑いする。つくならもつとましな嘘をつけばいいのに。

「嘘なんかついてない」と、ハガキ職人は躍起になって言い張る。こんな文面じゃ、誰もだませないってば。「別に、誰かをだますためにハガキを書いてるわけじゃない」と彼はぶぜんとした顔つきで言った。

それは本当のようだった。彼はけして嘘つきではなかった——より正確な言い方をすれば、人をだますための嘘はけしてつかなかったのだった。

〒〒〒〒

ハガキ職人の身の上について、詳しいことはほとんど知らない。親が仕事で外国にいるので、一人暮らしをしているということ。あまり学校には行っていないらしいこと。暇さえあればハガキを書いていること。わかっていることと言えば、それぐらいのものだ。

こと、年齢に関してはまったく予想もつかない。彼は時にはひどく老成しているようにも見え、またある時にはひどく幼くも見えた。当人に聞く気にもならなかった。「坊や、いくつ？」なんて質問は、とてもする気にはなれないものだ。

ハガキ職人は、わたしの知るかぎりでは二種類のバイトをしていた。一つは新聞配達、もう一つは街頭でのビラ配りだ。

あれはいつだったろうか——。東の空が白んでゆく時間に、わたしは二日酔いの頭をでるかぎり揺らさぬよう慎重な足どりで、なんとも陰気な朝の住宅街を歩いていた。住宅街には同じ形をした家々がえんえんと立ち並んでいる。わたしの踏みしめている街路の急な傾斜が、足にこたえた。顔の上に落ちかかってくる、自分の赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛がうっとうしいのだが、それを払うのすらもおっくうだった。なんとも陰気な朝だ、とわたしは痛む頭の中でつぶやいていた。

やはり飲み慣れないお酒など飲むのではなかった。わたしは、トンボ眼鏡の人と遊び人——前にも述べたとおり、わたしが働いている中華料理屋の常連客だ——と一緒に、調子に乗って飲

みすぎてしまったのだった。

しずかな夜だった。トンボ眼鏡の人と遊び人は、追加注文のトリの唐揚げをさかんにビールを飲みながら無駄話していて、わたしはシフトの時間が終わったので帰ろうと身支度をしているところだった。その時、トンボ眼鏡の人がわたしに声をかけた。「ねえ、赤茶毛さん。もう仕事は終わり？」

「はい」

「帰るの？」

「はい」

「帰ったあとに予定はあるの？」

「なんにもありません」わたしはばか正直な人間らしい。

「じゃあ、一緒に飲もうぜ」遊び人がコップをかかげながら言った。「おごるよ」

わたしは少々面食らったが、この二人は警戒すべきにんげんではないように思えるし、一緒にお酒を飲んでも大丈夫だろう——そう思って、彼らのテーブルに着いた。ところが、その判断は甘かったのだ。確かに、二人はわたしの推測通りの人畜無害なひとびとだったので、警戒する必要はなかった。しかし、お酒の方はというと、十分に警戒すべきだったのだ。

わたしは結局閉店時間まで飲みつづけてしまい、すっかりでき上がってしまった。終電はわたしたちを置き去りにしたまま、真夜中の街の中にとけこんで行ってしまった。仕方ない、始発が来るまでカラオケにでも行つて時間をつぶそう、とトンボ眼鏡さんがうれしそうに言った。遊び人もそれに賛成した。わたしもくしゃくしゃの髪の毛をさらにくしゃくしゃに掻きまわしながら、二人のあとについて行った。

さて、どういうわけかわたしは深夜カラオケにゆくと、何とも言えないやり切れない気分になってしまう。盛り上がっていた気分がふと途切れた一瞬になだれこんでくる、おもたい空気のよくな疲労感、倦怠感。一体どんな人が出演しているのだろうか、モニターに映っている安っぽいビデオクリップ。そして、不安定な音程で歌われる、一昔前のはやり歌——家で古いCDを引っぱり出してきて聞いた時にわき上がって来る感慨とはまったく異なる、へんな種類のノスタルジィを喚起されて、わたしは思わず水くさいオレンジジュースを一気に飲み干してしまうのだ。

そんな寂漠感に押しつぶされてしまったのだろうか、わたしは歌いながら眠りこんでしまった。次に目が覚めた時には、ものがなくも悲惨な痛みが、わたしの頭蓋骨の中に住みついてしまっていた。しまった飲みすぎた、わたしは途方に暮れた。

痛みは律儀なリズムを保ったまま、わたしの頭の中で息づいていた。もしかするとわたしの頭は、お寺の鐘つき堂に鐘の代わりにぶら下げられて、小坊主さんに打ち鳴らされているのではないか。痛みをかくぐり、頭の中に映像が浮かんでくる。夕暮れ時、山に帰ろうと羽ばたくカラスタちを横目に、小坊主さんはわたしの頭を打ち鳴らす、くぐもった鐘の音が村に響いてゆく——。そんなわけでわたしは白みかけた空の下、もうすぐ朝が来るというのに、夕暮れ時のまぼろしを見ながら帰途についたのだ。

わたしは危なっかしい足どりで先を急いだ。先を急いだものの、早くは歩けない。急な傾斜のある街路を、わたしはゆつくりと歩いてゆく。視界の両側に、同じ形をした家がえんえんと連なっている。おまけに、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛が、顔の上に落ちかかってくる。なんともし陰気な朝だ、とわたしは痛む頭の中でつぶやいていた。

その時、新聞配達の少年がわたしの方に向って走って来るのが見えた。彼は仕事の真つ最中だ。やたらと大きないかごのついた自転車を押しながら——そのかごの中には新聞の束が入っている——、少年は街を走り抜けてゆくのだった。それを見て、わたしは「ああ、朝だ」と思った。こみ上げて来るお酒のにおいの中に埋没しながらも、わたしは朝の予感を感じていた。「ASA!」という言葉が、割れかけたわたしの頭の中に浮かび上がり、点滅をくり返している。その直後、こっちに向って来る少年の輪郭をしつかりとわたしの目が捉えた時、その「ASA!」という文字が「HAGAKI!!」という文字に変形し、さらにはげしく瞬いた。その新聞配達の少年は、他ならぬあのハガキ職人だった。

わたしは頭を揺らさぬよう気をつけながら、慎重に手を挙げて、ためらいがちに左右に振った。ハガキ職人は顔を上げて、わたしの姿を認めた。そして一瞬、ぼかんとした顔つきを見せ、すぐにいつもの仏頂面になり、ブッキラボウな会釈を返してきた。「顔色悪い」

「最低の気分」とわたしは答え、顔の上に落ちかかっていた髪の毛をようやくと払いのけた。そして、「新聞配達してるの？」自分の声が頭蓋骨の中で反響しないよう、なるたけ小さな声でそう尋ねた。

「うん。最近始めた」

「どう？」

「うん、忙しい」ハガキ職人はそう言い残し、わたしの横をすり抜けて行つた。相変わらず、無愛想なやつ、とわたしは胸中でつぶやいた（声には出していないはずなのに、何故だか頭蓋骨の中で反響したように思えた）。

ふと足元を見ると、紙切れのようなものが二、三枚落ちていた。彼が落として行つたものだろう。拾い上げると、案の定ハガキだった。

昔ながらの蒸気船の中で、このハガキを書いています。船室には南国のフルーツが山のように積んであって、毎日お腹いっぱい食べています。水夫さんたちとも友達になりました。いい人たちばかりです。蒸気のせいでみんなススだらけになり、お互いの顔を見ては大笑いしています。

わたしは呆れて、すこしの間頭の痛みも忘れてしまった。

ひよつとしてハガキ職人は、これを新聞といつしよに郵便受けに投げこんでいるのではないだろうか——。わたしは彼のでたらめな近況報告を読みながら、そんなことを考えていた。

それから何日かして、わたしは土手でハガキ職人と出会った。彼はいつも通り、草の葉についた露でズボンが濡れるのも厭わずに座りこみ、せっせとハガキを書いていた。

「新聞配達、どんな調子なのさ」わたしはそう尋ねた。

「くびになった」

「なんでまた」

「苦情が来た」と彼はこともなげに言った。「へんなものが一緒に配られてて、迷惑だつてさ」わたしは肩をすくめた。ハガキ職人は涼しい顔でハガキを書き続けていた。

新聞配達をくびになったハガキ職人がその次にありついた仕事は、ドラッグに関係のあるアルバイトだった。

と言っても、自宅でこっそり大麻を育てて売りさばいたり、LSDを染みこませた新聞紙を隠し持って高飛びしたりといった、そんな仕事ではない。彼の得た仕事というのは、「全品五十パーセントオフ」だの「ポイント還元セール」だのとポスターカラーの文字で大書きされたカンバンを二枚、からだの前と後ろにぶら下げて薬屋の前をうろうろする、いわゆるところの「サンドイッチマン」というやつだった。ハガキ職人は、とてもかわいらしい——率直にいうと、ものすごくまぬけな——三角帽子を頭にかぶり、自分の背たけよりも大きいのではないかと思われるようなカンバン二枚にはさまれて、無愛想に突っ立っているのだった。さらに彼は店長から、ロイヤルゼリー入りのドリンクだの、新発売のめがねクリーナーだの、店の売りさばきたい商品の効能を大声で宣伝して回るように言われていたのだが、これには彼はまじめに取り組んでいないようだった。口の中でもこもごと、誰にも聞きとれないような声（自分にすら聞こえないくらいの声）で宣伝文句をつぶやきながら、ハガキ職人はカンバンにはさまれて立ち往生しているのだった。

彼のサンドイッチマン姿を見た時、その出で立ちがあまりに滑稽だったので、わたしは思わず笑ってしまったものだ（そして自分でも驚いた。わたしは滅多に笑わない人間なのだ）。もうすぐ冬がやって来そうなある日のことだった。誰もがコートやジャケットのえりを立て、水揚げされてから三日ぐらいった魚のような顔つきで街を行き交っていた。わたしもその中にまぎれこんで、たぶん陰気な顔つきをして、足早に歩いていった。急に冷えこんできた空気に手の先を焼かれ、ひどく痺れてしまった。わたしはスクランブル交差点に通りがかった。その時通りの向こうに、明らかにこの風景から浮いてしまっている一人の少年を発見した。質感をともしなわれない空気の中、彼の佇まいは何とも奇妙なものに思えた。それがハガキ職人だったのだ。

「人を指差して笑うのはよしなよ」とハガキ職人はふくれっ面で言った。

「別にばかにしてるわけじゃない、むしろ誉めてるくらい」わたしはこみ上げて来る笑いのせいで、すこし酔っぱらったようになりながら言った。「こっけい万歳！まじめくさったものなんか、くそくらえ」

「とりあえずこれあげるから、早くどっか行つてよ」そう言つて、ハガキ職人はわたしに一枚の紙片をくれた。彼はそれと同じような紙片の束を左手に握りしめていた。きっとビラか、店で使える期間限定のサービス券か何かだろう、そう思つて見てみると、

今日は「さかさまジャングル」に行きました。このジャングルを通過する時には、みんな逆立ち歩きをしなければならぬ決まりなので、この名で呼ばれているのです。分け入ってゆくと、ぼくたち人間だけでなく、途中で出会った小猿やチーターまでが逆立ちで歩いていたので、びっくりしました。

お馴染みのへたくそな文字が並んでいた。

どうもこれは営業活動と関係なく配布しているハガキのようだった。またクビにされなければいいけれど、とわたしは思った。

「ま、がんばつて」とわたしは言った。

ハガキ職人は小さく頷き、またそろもごもと商品の宣伝文句を口の中で呟きながらその辺り

をねり歩き始めた。まるで、二枚の大きなハガキにサンドイッチされているみたいだ、とわたしはその後ろ姿を見て思った。

ふと足元を見ると、何枚ものハガキが投げ捨てられていた。わたしはいたたまれない気分になる前にきびすを返し、雑踏の中に我が身をとかしこんでしまった。

＝＝＝＝＝

何ということもなく、また一年が終わろうとしていた。いつものことだった。あの「時間」という不気味な生き物は、わたしをいたずらに追い立てて、からかいながら並走し、いつの間にか追い越して、そして「べっかんこ」をしながら遠ざかって行ってしまう。ざるで砂を掬い上げるように、穴のあいた瓶にレモンのジュースを詰めるように、わたしは所在ないままで毎日を生きていた。わたしは思い出したように路面電車に乗ったり、環状線に乗ったりして時間をつぶした。それは気がめいるだけの遊びだったが、「常に動き続けている」という点において、なんだか意義深いことをしているような、そんな気になったのだ。

そんな折、わたしはトンボ眼鏡さんに一冊の文庫本をもらった。それは時代の潮流に押し流され、また、とてつもなく大きな力に突き動かされて没落してゆく、誇り高くも哀れな一族の歴史を丹念に描いた、非常に分厚い小説だった。その本はカバーも取れ、表紙も破れ、ぼろぼろになつていたものの、得体のしれない威厳を保ち続けていた。

トンボ眼鏡さんはその本を中華料理屋に置き忘れていた。次に彼が店に来た時、わたしはその本を「この前忘れて行きましたよ」と渡そうとしたのだが、「ああ、それもう読んじやったから、あげるよ」と言われてしまった。そんなわけで、わたしはその本を手に入れたのだった。これはなかなか乙な暇つぶしになると、わたしは嬉しくなったものだ。

ところが、この本がちっとも読み進められない。バイトで手が空いた時、環状線に乗って街をぐるぐる回っている時、路面電車に揺られている時、土手に腰かけて風に吹かれている時、わたしがいつもは何をするでもなくぼんやりと過ごしている時間にその本を読もうと試みたのだが、うまくいかなかった。わたしの中に入って来たはずの活字は、すぐにぼろぼろとこぼれ出し、結局は流麗な文章の上をむなしく目が滑ってゆくだけで、わたしは開いたページの上に立ち往生してしまうのだった。一冊の本も読めないうちに今年も終わってしまうのか、そう思うとやりきれない気分になった。

世間はクリスマスを前に浮足立っている。ビル街の一角にはぎにぎしいツリーが立ち、派手なイルミネーションが都市の輪郭をふちどりつつあった。誰もが楽しげなふりをする、肌寒い季節がやって来た。そんなある夜、わたしは路傍に倒れているハガキ職人と出会ったのだった。

＝＝＝＝＝

ハガキ職人は本拠地のドラッグストアからすこしばかり離れた、ビルとビルの間の細い通路に倒れていた。そんなややこしいところに倒れているから、わたしが通りかかるまで誰にも気づかれず、見すごされたままになっていたのだろう。それに一見したところでは彼の寝姿は、路上生活者が睡眠をとっているだけのようにも見えたのだ。

わたしにしたって、よくも気づけたものだと思う。虫が知らせた、としか言いようがない。わたしはバイトからの帰り道、くしゃくしゃの髪の毛を夜の空気で冷やししながら足早に歩いていた。わたしの周りには、着ぶくれした幸せそうな顔のにんげんたちがひしめいていた。たいいていの不幸せは「なかったこと」にされ、のっぺりとした毎日のくりかえしが続いてゆくだけのように見えた。そしてわたしはその隙間にもぐりこみ、何するでもなく命を燃やしているより仕方がないのだろう、そんな気分になせられる夜だった。

その時、何か不吉な胸騒ぎがして、わたしは思わず足を止めた。後ろからやって来たカップルに肩がぶつかり、その二人は忌々しげな視線でわたしを見やって通り過ぎて行ったのだが、わたしはそんなことに構ってはいられなかった。すぐ脇の、ビルとビルの間の隙間に何かが転がっているのが見えたのだ。不審に思って目を凝らすと、それは人間で、しかもわたしのよく見知っている人間だったのだ。わたしが見誤らぬように、ご丁寧にもカンバンを二枚もぶらさげていた。

――脊椎の周りの神が一斉に逆立つのを感じた。街の喧噪もざわめきも、はるか彼方に遠ざかって、わたしは真空の世界の真真中に立ちつくしているかのような気分になった。他ならぬハガキ職人が、そこに横たわっていたのだった。

ハガキ職人はぶかぶかのサンタクロースの衣装に身をつつみ、頭には布で作ったトナカイの角をつけ、極彩色のポップ体で『クリスマス特別セール！』と大書きされたカンバンを背負い、ビルとビルの間に倒れ伏していた。それはかなしくなるくらいに滑稽な姿だった。そしてそんな彼の周りには、大量のハガキが散乱していた。ハガキに埋もれるようにして、彼は倒れ伏していたのだ。その様子はまるで、笑えないブラック・ジョークをわたしに投げかけてでもいるかのように見えた。

クリスマスケーキを買うなら、「チャボおばさん」のやっているケーキ屋の名物、ヘリウム・ケーキがおすすめです。ケーキの中にたっぷりヘリウムガスが入っていて、食べると空を飛べるのです。「チャボおばさん」は、このヘリウム・ケーキの名人なのです。

わたしはつんのめるようにして彼に駆け寄った。悪寒のせいだろうか、彼の体は不規則にぶるぶると痙攣していた。その手は氷のようにつめたくて、真っ青な唇からもれ出している吐息はやけどしそうなほどに熱かった。

「何やってるの、こんなところで！」彼の肩を揺さぶりながら、わたしはそう叫んだ。そんな風に大声を出したのは、何年ぶりのことだろうか。彼は壊れた人形のようにぐにぐにやぐにやと四肢を揺らし、わたしはくらげとでも格闘しているかのような気分になった。

「寝てる」と彼は答えた。「すごく頭痛いから、あんまり揺さぶらんといて」

「熱は――」わたしは彼の額に掌を押し当てた。

「手袋とらなきゃ分かんないだろ」息も絶え絶えに、彼はそう言った。わたしは手袋を放り捨て、素手で彼の額に触れた――それはまるで、たまごを落とす直前のフライパンのようだった。

「めちゃくちゃに熱いよ」とわたしは言った。「とにかくこんなところで伸びてちゃいけない、早く帰って寝なさい、あんた家どこよ！」

ハガキ職人は口の中で何ごともごごとつぶやいている。埒が明かないので、わたしは彼を担ぎ上げて立たせ、「連れて帰ってやるから、案内しなさい」と言った。

「ごめん」とハガキ職人は言って、わたしの首筋に顔を押しつけて来る。熱風のような吐息が、わたしの頬にかかった。そのうちに、空から何か白くて小さなものが落ちかかってきて、わたしの赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛のそこかしこに引っかかった。雪が降ってきたのだった。

＝＝＝＝＝

ハガキ職人の部屋は、高層マンションの一角にある 2LDK だった。(率直に言って、わたしの住まいよりもずっとよさそうな部屋だった)。よく片づけられた清潔な部屋だったが、言い方を変えれば殺風景で、生活のいいというものが極端に希薄だった。テーブルの上に転がっているハガキと色ペンだけが、辛うじて彼のおいをとどめていた。

わたしがハガキ職人を担ぎこんだ時には、部屋の中には誰もいなかった。「両親は？」「今よそにいる」とハガキ職人は咳の合間に答えた。

とりあえず、わたしはハガキ職人を布団に寝かせ、ストーブをたいた。かじかんだ手をストーブの上にかざしていると、痺れのような痛みが肩の上に残っていることに気づいた。水で冷やしたタオルを彼の額に乗せた後、一応親に連絡させた方がいいだろう、と思い、彼に電話機を渡すと、

「別に連絡なんてしなくていいよ」と、しずかな声でいう。

「なんで」

「親は日本にいないよ。シスコにいるんだよ」

わたしが不思議そうな顔つきで黙っていると、彼は火照った顔でこつちを見ながら言った。「シスコだよ、サンフランシスコ」

なるほど、サンフランシスコか。わたしは分かったような顔をして頷いた。と言っても、わたしはサンフランシスコに行ったことはないし、そこがどんな場所なのかもよく知らない。とにかくその時わたしは初めて、ハガキ職人の親御さんはサンフランシスコで仕事をしており、彼は一人日本に取り残されて一人暮らしをしていたのだ、と知った。

＝＝＝＝＝

翌日わたしはバイトを休み、彼につき添って病院に行った。

A 型だね、でっぷりと肥った初老の医者はその言ってタミフルを処方した。どこでうつされたんだろう、誰がうつしやがった、青白さを通りこして真っ白くなった顔で、彼はぶつぶつと独りごとをもらしていた。お姉さんにうつさないよう気をつけな、そう言って医者はハガキ職人の顔にマスクをかけた。お姉さん……わたしは思わず噴き出しそうになった。

「牛肉でも食べる？」帰り道、わたしはハガキ職人にそう尋ねた。

「食欲ない」あきらかにサイズの大きすぎるマスクの向うから、彼はそう答えた。

部屋に戻ってから、わたしは小さな土鍋で卵のお粥を作って彼に食べさせた。彼は神質な顔つきでチリレンゲを口に差し入れ、「独特の味だね」と控えめな感想を述べた。なぜお米と卵としようゆだけで味が独特になってしまうのか、わたしにも分からない。

けれども、彼は食欲ない、食欲ない、独特だね、などとりかえしつつも、そのお粥をぺろり

とたいらげてしまった。あまつさえ、おかわりを要求した——それも、碗ではなく、お鍋で。
「あとはタミフル飲んで、ゆっくり休みな」わたしは伸びをひとつして、鍋を洗いに台所へ向かった。

「年末なのに」とハガキ職人。「うっとうしいことになった」いつも通りの無愛想な口調だが、どこことなく憂いを帯びた声だった。大方、正月にむけて年賀ハガキを書きまくるつもりでもいたのだろう。

TTTTT

それから一、二週間くらいに渡って、わたしはハガキ職人の部屋を折にふれて訪れた。バイト帰りにぶらりと立ち寄って様子を見たり、あるいは、彼から「しんどくてご飯の準備ができないから、お粥作りに来て、あの独特のお粥」と要請されて足を運んだり——。思ったよりも彼の風邪は長引いていて、おくびにも出さないけれど彼が心細がっていることは火を見るよりも明らかだった。それにしても、ひとの作ったお粥を「独特」と称するのは、ばかにしているのか、賞賛しているのか、判然としないから困る（かつて、彼のサンドイッチマン姿を笑ったことへの意趣返しなのだろうか）。

やや意外に感じたのは、彼が自宅によく音楽を聴いているということだった。彼の枕元にはレンタルショップで借りてきたらしいCDが山と積んであり、彼のパソコンからはわたしの聞いたことのない不思議な歌がこぼれ出しているのだった。

「ジェファーンソン・エアプレイン、ヴェルヴェト・アンダーグラウンド、シド・バレット、キング・クリムゾン……」わたしはCDの山に手をのばし、わたしにとっては未知のバンドの名前を読み上げてみる。

「全部、六〇七十年代の音楽だよ」布団にくるまったままのハガキ職人は、そう返答する。

「そんな昔の音楽聴いているの」

「たかだか三十年か四十年前の話じゃん」そう言って彼は寝返りを打つ。

たかだか——確かに、「たかだか」なのかもしれない、宇宙の歴史と対比させてみれば。

わたしは首をねじり、パソコンのスピーカーから流れて来る曲に耳をそばだててみる。奇妙な具合に歪んだギターに導かれるようにして、まるで海の底で録音したかのように深いエコーのかかった声が歌い始める。この曲を聴くのは、もう何度目かになるはずだ。初めて耳にした時は「ぶきみな歌」というくらいの印象しかなかったのだが、だんだんとわたしはその「ぶきみな歌」に身体を蝕まれつつあるのだった。口当たりの良い食べものよりも、ある種の不味さを孕んでいる嗜好品の方が中毒性がある。そういうものだ。

「これ、いいね」とわたしは言った。

『「Corn Flake Blues」』彼は即答した。『「The Rice Fields」』というバンドのデビュー曲。ビルボードで十二位だよ」

「へえ」

「六十七年にイギリスでデビューしたサイケデリックロックのバンドだよ。後期ビートルズに影響を受けて、音作りなんかはわりとポップなんだけど、ファースト・アルバムには十分超える

長尺の曲なんかも入ってて、プログレの走りみたいな雰囲気があるよね。アルバム三枚出して解散しちゃったんだけど、もっと活動しておけば歴史に残るバンドになったかもしれない」

「サイケデリック？プログレって何？」わたしは首を傾げる。——彼がこんなに長いセンテンスをしゃべったことに、ひそかに驚きながら。実際わたしはひどく驚いたものだ、彼がそんなに雄弁に話すのを、初めて聞いたので。

「そういう種類の音楽があるんだよ」彼はせきこみながら起き上り、CDの山を物色し始めた。「聴けば分る」

わたしはその後ろ姿を見やる——彼がめったにないセッキョク性を見せていることに、ひそかに驚きながら。本当は、安静に寝ておきなさいと注意すべきだったのだろうが、わたしはそうしなかった。そして、火照った顔でCDを物色する彼を、黙って眺めていた。

お粥を食べ終えたハガキ職人とわたしは、けだるい午後をぼんやりとした気分ですごしたものだ。ハガキ職人はすこし体力が回復すると、仰向けになってハガキを手に取り、執筆を再開した。

今日の空はひどいオレンジ色です。コップですくえば、オレンジジュースが飲めることでしょう。

わたしはそんな彼を「大人しく寝てな」とたしなめながら——本気でたしなめているわけではない、わたしだって子供の頃に風邪をひいた時には、病床で本を読んだり絵を描いたりして遊ぶのが常だった——部屋を流れるロックンロールに耳を傾けていた。

だって広い世界の隅にぼつねんと腰をおろして、わたしたちは摩訶不思議な音楽を聴いている。この時間の流れの中では、黙りこむのも、言葉を交わすのも、ほとんど同じようなことだ。それはほんとうにしずかな午後だった。騒々しいロックンロールほど、しずかな音楽はない。わたしはぼんやりとした気分のままで本を読み、彼は横たわったままハガキを書き、二人して歪んだギターと騒々しいシンバルのお喋りに耳をそばだてている。

「大人しく寝てな」

「おう」

わたしは本を閉じ、立ち上がる。ハガキ職人に飲ませるジュースを作るため、りんごをすりにゆくのだ。ハガキ職人はペンを置き、上気した顔でため息をついて枕に顔をうずめる。わたしがりんごをすりおろす音が、ロックンロールのリズムとまざり合ってアンサンブルを奏でている。

ハガキ職人は一日に一回、シスコに住む親宛てに近況報告のメールを送るのを日課としていた。この習慣は別に彼が好きで続けているわけではなく、親によって義務つけられた儀礼なのだそうだ。まったくこの子の親は、放任主義なのか、それともわが子を気にかけているのか、よく分からない人たちだ、とわたしは思った。ハガキ職人はその面倒くさい作業を、恐ろしく手際よく、短時間でこなしていた。寝床にパソコンを持ちこみ、ものの五分もしないうちに見事なメールを一本書き上げるのだ。ちょうど風邪薬を決まった時間に規則正しく服用するように、かれはその仕事をきつちりと済ませるのだった。「ハガキ職人」が「メール職人」になっている、とわたしは思ったものだ。

彼は肩をすくめた。「正月、帰らないんだとき」そしてパソコンを枕元に置き、首元に毛布を引き寄せた。

わたしも肩をすくめ、彼が食べ散らかしたお粥の鍋を台所へ運んだ。

TTTTT

わたしは The Rice Fields の CD——『Corn Flake Blues』が入っているシングル集と、ハガキ職人が一番好きだという三枚目のアルバムを借りて来た。

シングル集のジャケットには、デビュー当時のスナップ・ショットなのだろう、胡散臭い愛想笑を浮かべたマッシュルーム・カットの若者たち五人が映っていた。何となく、その時の彼らには爬虫類のような雰囲気があった。

三枚目のアルバムのジャケットに映っている彼らは、髪も髭も伸ばし放題で、まるで別人のような面構えになっていた。今度は爬虫類というよりは、類人猿の雰囲気だった。

わたしは CD をセットし、再生ボタンを押す。とたんに、古めかしいサイケ・ポップが流れ始める。こうして、うすら寒い隙間風に満ちていたわたしの部屋は、奇妙なエフェクトのかかったボーカルと、懐かしい歪み方をしているギターの音によって、いくらか賑やかになった。

ぼくはきみを待っているのさ

あごひげも伸ばし放題

待ちくたびれて 焦がれるあまり

空に向かって逆立っている

きみは問題をかかえている

きみは治療薬を探している

ぼくはギターを投げ出して

その問題をときほぐしている

コーンフレークの皿の中で

きみと追いかけてっこをしたい

きみを上手く捕まえられたら

ぼくは何をもらえるのかな

コーンフレークの皿の中で

ぼくはずっと ぐるぐる回るよ

きみはぼくの腕をすり抜け

ケムリにかわって消えてしまった

The Rice Fields についてウィキペディアで調べてみたけれど、目ぼしい記事は載っていないかった。メンバーの消息も、あまりはつきりとしたことは分からなかった。リーダーだった元メンバー（担当楽器はオルガンだ）の非公式ファンサイトを見つけたが、それも一九九八年で更新が止まっていた。それによれば、何でも彼は七〇年代をセッション・ミュージシャンとして過ごし、八〇年代中ごろに「復帰作」としてソロ・アルバムを一枚出したのだという。九十年代初頭には、自分以外のメンバーを一新して The Rice Fields を再結成し、ライブアルバムを出したそうだし、しかし今現在はどこにいるかは分からないし、そのソロ・アルバムも再結成アルバムも、とつくに廃盤になっていることだろう。彼は自分の過去の作品を、今でも聴き直してみることがあるのだろうか。それともさっぱり忘れ去って、淡々と日々を過ごしているのだろうか。

『Corn Flake Blue』は、彼らの最初のシングルで、一番ヒットした曲だそう。ハガキ職人はチャートの十二位をとったと言っているけれど、わたしが調べたところでは四十位止まりとなっていた。歌詞の中に「葉」という単語が出てくるところから、ドラッグ・ソングだと一般的に思われているふしがあるそう。

コーンフレークの皿の中で

きみと追いかけてつこをしたい

きみを上手く捕まえられたら

ぼくは何をもらえるのかな

コーンフレークの皿の中で

ぼくはずっと ぐるぐる回るよ

きみはぼくの腕をすり抜け

ケムリにかわって消えてしまった

なんだか、ハガキ職人がハガキに書きそうな文言だな——わたしは歌詞カードを眺めながら、そんなことを思う。彼はこの歌を聴きながら、もしくは頭の中で口ずさみながら、黙々とハガキを書いたりするのだろうか。

TTTTT

やがて、なにともなかったかのように年が暮れ、そして年が明けた。わたしにとっては大晦日もお正月も、ただのありふれた冬の日、という印象しかなかった。わたしは年越しソバを食べることもなく布団に入り、除夜の鐘は眠りの中で聞いた。そしてわたしの知らない場所で初日の出が見られ、目を覚ました時には新しい年になっていた。わたしは首をかしげたものだ。昨日とないにも変わらない今日が来ただけのように思えて仕方がなかった。ところが「新年」という得体の知れない何者かが生活の中に潜りこんできて、意味もなく落ち着かないような、わけのわからない気分させるのだ。困ったものだ、とわたしは肩をすくめる。

さて、「新年」の挨拶にでも行ってやるか。わたしは赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛を無造作に

束ねると、ベージュ色のカーディガンを羽織って表へ出た。

「あけましておめでとう」

ドアがわずかに開く。チェーン・ロックの向うに、いくらか顔色のよくなったハガキ職人が立っていた。

「おめでとう」

「体調は？」

「だいぶまし」相変わらずのブッキラボウな口調で、彼はそう言った。

「おめでとう」

「ありがとう」ハガキ職人は首をひっこめ、チェーンを外した。「入ってよ」

玄関に足を踏み入れると、トマトケチャップのにおいが漂って来た。

「もう昼ご飯食べた？」

「まだ」

「じゃあ、ちようどいい」

ハガキ職人はPCを起動し、『Corn Flake Blues』を再生する。おなじみの、乾いたギターが絡み合うイントロが流れ始める。実をいうとわたしは最近この曲を何十回となく聴いていて、正直な話そろそろ飽き始めていたところなのだが、せつかくの彼の好意を無下に断るのも何なので、大人しくそれに耳を傾けていた。深いエコーのかかったボーカルが第一声を発すると、彼は満足げな顔つきをして台所に向かった。

そして、「久しぶりに自炊してみた」と言いながら、ハガキ職人は湯気立つ皿を二枚持つて戻ってきた。

「ナポリタン」皿の上でソーセージといっしょにのたくっている真っ赤なスパゲッティを見て、わたしはそう言った。

「食べてみなよ」そう言って彼は、どっかりと腰を下ろす。お粥のお礼、というわけなのだろうか――わたしはフォークを手に取り、こんもりとした麵の山の中腹に突き刺した。

そしてわたしたちは差向いで、古めかしくも懐かしいロックンロールを聴きながら、ナポリタンをすすりこんだ。年越しソバも食べずに年明けスパか、と思うと、おかしくなった。

くだんのナポリタンは、すこしばかりトマトケチャップの量が多すぎる点をのぞいては、まあ美味しいと言えるできた。わたしは唇のはしについた赤いソースを指先でぬぐいながら、そこはかとな懐かしさと哀しさの入り混じった奇妙な気分になっていた。ナポリタンほどノスタルジックな食べものは他にないと思う。

「どう？」と、口の周りを真っ赤にしてハガキ職人は問う。

「独特ねえ」ここぞとばかりにわたしはこのセリフを使ってみたものの、今思い返せば悪ふざけが過ぎたかもしれない。

食べ終えて、わたしがぼんやりとテレビを見ていると、ハガキ職人はテーブルの上に山と積まれたハガキの山から一枚を抜き取り、「年賀状だよ」と言ってわたしに手渡した。

あけましておめでとう。本年もよろしく。赤道直下、南太平洋の孤島にて。

追伸、ここでは水のかわりにヤシ酒を飲みます。

わたしは周りを見回したが、そこにはヤシの木一本生えていない 2LDK の部屋があるだけだった。

「それから、これ」と言って、さらに彼はコンビニの袋を差し出してくる。中を見てみれば、「500」や「100」や「10」などとマジックペンで書いてある牛乳瓶の蓋、コーラの瓶の蓋、ペットボトルの蓋がぎっしりと詰まっていた。

「これは？」

「お年玉」彼はこともなげに言った。

家に帰ってから数えてみると、それは全部で二万五千三十六円分(?) あった。ウイルス性の倦怠感にまどわりつかれながら、布団の中で空き瓶の蓋に一生懸命数字を書いているハガキ職人の姿を想像して、わたしはなんとも奇妙な気分到了陥ったのだった。

~~~~~

そんなこんなで、わたしたちはそれぞれの日常に回帰したのだった。正月休みを終えて営業を再開した中華料理屋にて、わたしは冬休み明けの呆けた大学生たちのために脂っこい皿を運んでいた。ハガキ職人はまた以前のように、大きなカンバンにはさまれながら街頭に立つようになった。そしてわたしたちは時たま、呆けた顔つきで、土手の上で出会うのだった。

不安定な天気の日が続く冬のことだった。わたしたちは虚脱しきっていた。霜に焼かれた雑草が弱弱しく生い茂っている、くすんだ色の土手の斜面に腰かけて、そこから目に映るものを何をするでもなく眺めていたのだ。さまざまな高さのビルディングや、色々々な色で彩られた屋根の連なりによって組み立てられた街、ほんとうはカラフルな風景なのに曇天のせいで灰色一色に染まってしまった街を、うねうねと曲がりくねりながら流れる川が分断していた。川はひねくれた曲線を描きながら、そのまま空も分断し、風も分断し、しまいにわたしたちまでを分断して、なにもかも四散してしまうのかもしれない。しかし、少なくとも眼に映る限りでは、均衡は保たれているようだった。

「寒いねえ」わたしは両手をこすり合わせ、息を吹きかける。

「たいしたことないよ」そう言って、ハガキ職人は大きくしゃみをした。

~~~~~

「ねえさんは友だちとかっている？」

ある時、ハガキ職人がそんな質問を投げかけて来たのを覚えている。

「ま、あんたとかね」わたしはそう答えた。

「からかうのはやめ」素っ気ない声で、ハガキ職人はそう言い返す。

「からかってなんかないよ」わたしは苦笑いをした。本心だった。

川の水面から吹いてくる風が、わたしたちの顔をなぜて行った。朝の水道水のように、それは冷たかった。

「わたしにはあんまり友だちがいないのさ。おまけに、昔いちばん仲のよかった友だちはこの街を出て行ってしまったよ」わたしは伸びをしながら、そう言った。

「どんな人だったの」

「彼はエカキだったね」

「彼？」とハガキ職人は、ハガキを書く手を止めて問い返す。「男の人の？」

「うん。訳の分からない男だった」とわたし。「一枚の絵も描いていないけど、絵描きを名乗っていたよ」

そう、彼はエカキだったが、一枚の絵も描かなかった。描かなかったというより、描けなかった、と言った方が正しいだろう。

もともと彼は小説書きで、すばらしい短編小説——野心的なカツラ職人と、愛鳥家の株屋との精神的な交流を淡々と描いた、叙情的な物語——をものにしたこともある。今となつては、それが彼にとって幸せなことだったのか、そうではなかったのか、誰にも分からない。というのも、その作品を同人誌に発表した後は、彼は一編の小説も書き上げられぬまま何年間もすごしたのだ。そしてとうとう、彼は小説執筆を断念し、画家に転身した。散文に見切りをつけ、絵筆によって何かをなしとげようと一念発起したのだ。しかし、結果的には状況は何一つ変わらなかった。原稿用紙の前でうなだれる日々が、カンバスの前でうなだれる日々になっただけだった。

ある朝、彼はぶらりと部屋を出て、そのまま帰って来なかった。魔法のランプのような食器のイラストがプリントされたお気に入りのTシャツを着て、彼はどこかに行ってしまった。彼の住んでいたアパートの屋上には、一枚のカンバスが残されていた。それは早朝の街をスケッチしようとした彼が運び上げたものだった。カンバスは、真っ白いまま置き去られていた。彼がどこに行っただのか、知る人はいない。

「その人とぼくはよく似ている」話し終えたわたしが口をつぐむと、ハガキ職人はそうつぶやいた。

「そう？あんたは、書く（描く）ことには不自由していないようにだけど」

「描けもしない絵を描こうとして何もできないのも、どこにも届きやしないハガキを書き続けているのも、同じようなもんだよ」そう言って彼は黙りこんだ。

「ま、たしかにそうなのかもね」とわたしは言い、空中に白い息のかたまりを浮かべた。

書けもしない絵を描こうとして何もできないのも、どこにも届きやしないハガキを書き続けているのも、同じようなもんだ——か。言わせてもらえば、わたしだってそれと似たようなものだ——胸中にて、そつとつぶやいてみる。結局のところみんなそうなんだと思う。そんな不毛な営みの数々が、ネジのはずれた歯車のように、噛み合ったり、噛み合わなかったりしながら回転し続けている、そうやってこの地球は今日も回っているのだらうと思う。わたしは曇天模様の空の下に広がる街を俯瞰してみる。そうしていると何だかこの街が、真っ白いカンバスや、ほら話が走り書きされたハガキに埋もれている情景が見えて来るような気がした。

〒〒〒〒

このうすら寒い街にも、春の予感が漂い始めた。それは生き物として喜ぶべきことなのに、わ

たしはなぜか寂寥とした思いばかりがお腹の中にわき上がって来るのを感じていた。なぜなのだろう、このみじめったらしくて陰鬱な冬が終わるというのに、やけにもの悲しい気分になってしまふのは。そんな気分の中ですごしていたある日のこと、ハガキ職人がとつぜん「明日、街を出る」と言い出したのだった。

「転校するから、引越すんだ」と彼は言った。「だから、今日でお別れだよ」

「そう」あまりにとつぜんすぎて、わたしは戸惑いを覚える余裕すらなかった。

ハガキ職人は、必要事項は伝え終えたという顔つきで口を閉じ、わたしもまた黙りこんだまま膝を抱えていた。この素っ気ない少年が遠くに行ってしまうという事実を、わたしはまだよく理解できずにいた。かつて友だちのエカキが去って行ってしまったように、この少年もいなくなってしまうのか――？ 一体、それはどういうことなのだろう。この倦怠と茫洋の日々から、ハガキ職人が忽然と姿を消す。わたしがそれがどのようなでき事なのか、まったく理解できなかったのだ。

「サンフランシスコにゆくのか？」ずいぶん時間がたってから、わたしはそんな質問をした。

「あいにくそうじゃないんだ」ハガキ職人は簡潔に答えた。

「じゃあ、どこ？」

「どこだろうと、退屈な場所だと思うよ」

「ふうん」とわたしは頷いた。それ以上聞いても、仕方がなさそうだった。

そしまたわたしたちは黙りこんだ。耳をすませば、街の喧噪、列車の足音、風の忍び笑う声、そんなあれこれが聞こえて来るものだと思っていた。しかし耳をすませばすますほど、そうした音の断片はあつけなく遠ざかって行き、つかみどころなく四散してしまうのだった。四散してしまえば、わたしたちは静けさの中に取り残され、自分の息づかいに耳を傾けているより仕方がないのだった。しばらくたってから、ハガキ職人が立ち上がった。

「引越しの準備をしに帰らなくちゃならない」ハガキ職人はそう言って、ズボンについた草の切れはしと露を払いのけた。「さよなら」

「お別れの記念に、ハガキをちょうだい」わたしは川の水面を眺めながら言った。

「ごめん。今日はハガキ、持って来なかった」ハガキ職人はそう言った。そういうものだよね、とわたしは胸の中でそっと呟く。いつだって、ここぞという時に何かが欠けてしまうようになっていくのだ。

「じゃあ転居先から送ってちょうだいよ」

「さあ、気が向いたらね」ハガキ職人は素っ気なく答える。

「きつとよ」

「気が向けばね」

ハガキ職人は土手の上を歩き始める。わたしはその後ろ姿に向かって声を投げた。

「さよなら、ハガキ職人」

彼は怪訝そうな顔でふり返った。

「何それ」

「あなたのあだ名」わたしはそう言った。心の中では彼のことをずっとそう呼んで来たのだが、面と向かってその名で呼びかけるのは初めてのことだった。

「そりやどうも」とんちんかんな返事をして、彼は手を小さく振って見せた。そして踵を返すと

また歩き出し、わたしの視界から徐々に遠ざかって行った。

そんなわけで、ハガキ職人は行ってしまった。

すべては唐突に始まり、そして唐突に終わってしまう、のろまわたしにはどうすることもできないままに、この得体のしれない世界は動き続けている。どうすることもできないのだ、わたしは川の水面から吹いて来る風に髪の毛を遊ばせながら、そんなことを感じていた。赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛は空中でばらけ、翻った。あまりにも平凡な早春の午後が、そこに残されているだけだった。

さて、とわたしは呟く。環状線に乗って、ぐるぐるしにゆくか。それとも路面電車に乗って、時間をつぶそうか。選択肢を決めかねて、わたしは土手に座りこんだまま、ほの明るい空を見ているのだった。

＝＝＝＝＝

「春めいてきましたねえ」

遊び人が、トンボ眼鏡さんにそう話しかけているのが聞こえた。スポーツ新聞を読んでいるトンボさんは適当にうなずいて見せながら、「ああ、春だね」と返事する。わたしはお冷（という名の、なまぬるい水）のコップを二つたずさえて、彼らのテーブルに歩み寄った。

「春が来ましたね」遊び人が、今度はわたしに話しかけてきた。

「そうですね」と、わたしは答えた。「来なけりゃいいのに」

「そういうわけにもいかないんだよね」スポーツ新聞に目を落としたまま、トンボ眼鏡さんが言った。

その通りだな、わたしはお冷のコップを彼らの前に置きながら、胸の中で思った。そういうわけにも、いかないんだ。

「注文いいかな」と遊び人が言った。

「どうぞ」

「じゃ、八宝菜定食ひとつ！」

「僕は坦々麵セットの、おかずがイカリングの方ね」トンボ眼鏡さんは乱雑に新聞をおりたたみ、カバンに押しこんだ。「で、大盛りね」

「ライスですか？ 麵ですか？」

「両方にしたら何円増し？」

「三百円増しです」

「じゃ、ライスの方のみ大盛りね」

「あ、じゃあ俺もライス大盛りで」と遊び人が口をはさんだ。

ほんとうによく食べる人たちだ、とわたしは顔は無表情のまま、しかし心の中で笑いながら、厨房に注文を伝えた。

そしてわたしはカウンター席に腰かけ、イヤホンに耳に突っこむ。最近わたしはまたぞろ *The Rice Fields* にはまっているのだ。わたしの中に沈殿していた音のカケラが発酵でもしたのだろうか、その音楽は前に聴いていた時よりもずっと素敵に聞こえた。

ぼくはきみを待っているのさ

あごひげも伸ばし放題

待ちくたびれて 焦がれるあまり

空に向かって逆立っている……

「赤茶毛さん、なに聴いてるの？」遊び人がそう尋ねる。

「昔の歌」わたしはそう答えた。

＝＝＝＝＝

そして春が来た。

ハガキ職人とは音信不通だ。彼は「まだ」ハガキをよこして来ない。最初から出していないのかもしれないし、出したものの届きそこねているのかもしれない。いずれにせよ、確かめるすべもないのだ。彼の転居先は聞きそびれてしまったし、わたしの方から行動を起こすことはできない。

それなのに、わたしは驚くぐらい楽天的な気持ちでいる。いつかきつと、彼は何らかの形でわたしに便りを与えるだろう、そんな風に本気で信じているのだ。あのでたらめなホラ吹き少年を信用するなんて、わたしもよほど変わっている、と自分でもおかしくなってしまう。

生あたたかい天気の日が続く春先のことだった。わたしは一人ぼつねんと土手に座りこんでいた。息を吹き返した雑草が喜び勇んで生い茂っている、みどり色の土手の斜面に腰かけて、そこから目に映るものを何をするでもなく眺めていたのだ。さまざまな高さのビルディングや、色々な色で彩られた屋根の連なりによって組み立てられた街、うさんくさいような青空の下に広がるカラフルな街を、うねうねと曲がりくねりながら流れる川が分断していた。川はひねくれた曲線を描きながら、そのまま空も分断し、風も分断し、しまいにわたしまでを分断して、なにもかも四散してしまうのかもしれない。しかし、少なくとも眼に映る限りでは、均衡は保たれているようだった。その摩訶不思議な均衡の上で、わたしはまんじりともせず土手に座りこんでいた。そうしているうち、この土手から見渡せる空の一角にオーロラが見えるのを、他に何をするでもなく待っている自分に気がついたのだった。

#ジムノペディ#

朝の光が昼の日差しに変わりつつある。彼は部屋の中ほどに座り込み、食パンを齧っている。石のようなバターを塗った食パンだ。何となく青味がかって見えるのはカビのせいなのだろうか、そうではないのだろうか、いずれにせよ、彼はそんなものは気にせず黙々と食べている。

本来は食べる目的ではなく買って来たパンなのだが、彼は自分でも特に意識しないまま、何気ない日々の折々にそれらを咀嚼し消化してしまった。まあ仕方ないことだ、と彼は思う。食パン、というくらいなのだから、やはり食べてこそそのものなのだ——彼はそう言って自分を納得させる。

ラジオからこぼれているのは、終末の預言だ。先日来日したと言う超能力者が、「来年の夏に人類は滅亡する」と情熱的にまくし立てている。その預言者によれば、半年前に日本が打ち上げた観測衛星が消息を絶ち行方不明になった事件があったのだが、これは異星人が衛星を回収したせいなのだという。異星人たちはその人工衛星から地球のデータを集め、人類が滅亡した後に地球に移住すべく調査を開始しているのだ、と。どんな気分なのか、彼は預言者の言葉を右耳から左耳に移動させて廃棄しつつ、ぼんやり考えてみる。世界の終わりを商売にする気分は、一体どんなものなんだろう。彼には分らない。

彼は真っ白いカンバスの前に立つ。世界が終わる前に、一枚くらい絵を描いておくか——いや、どうせ終わってしまう世界の中で絵を描くのは不毛な所業なのだろうか——不毛万歳！とりあえず、夏まで世界は終わらないのだから、そんなに焦ることもないよな。彼は木炭を部屋の隅に放り投げ、床に腰を下ろす。もうしばらく、真っ白いままで置いておこう。そして青味がかった食パンを手にし、石のようなバターを塗りつける作業を開始する。それにしても本当に固いバターだ、まともに塗れやしないよ。

彼は街に出る。リュックサックには、真新しいスケッチブックとクレヨンが入っている。真新しいスケッチブックは清潔で、毅然としていて、そして無限の可能性を秘めている。彼はそれが好きだった。そんな彼の期待に応えて、スケッチブックはいつまで経っても真新しいままであった。

彼は赤信号に行く手を阻まれる。街角に八百屋の屋台が停まっている。あの屋台を書いてやろうかしらん。もしくは店番の少年——のっぺりとした青白い顔、ひよろひよろと情けない伸び方をした不精髭、肘から根を生やしたかのごとく頬杖を突き——、あの少年の肖像画でも描こうか。いや、肖像画よりも静物画の方がいい。では、あの屋台に山と積まれ、絶妙なバランスを保っている林檎——そう、もう林檎の季節なのだ。きつとビニルハウスや農薬を用いて、杓子定規に作ったんだろう。まん丸で大きさが均一の、綺麗な赤色をした林檎——あれを一つ買って帰るか。石みたいに固いバターを塗って焼いたら、存外に旨いかもしれない——ああ、またしても食欲が創作意欲に勝ってしまったか。まだ食パンの存在感が胃袋の中に残っているというのに。

その時、赤林檎から青林檎へと光が移った。立ち止まっていた人々や車が慌ただしく動き出す。

彼も慌てて歩き出し、林檎のことは通りの向こうに置き去ってしまった。

※※※

歩き疲れ、彼は部屋に戻って来る。明日はまたバイトだ。今日は休みの日なのだ。では、休むとしよう。彼は床に寝転がる。先程世界の終わりを予言していたラジオは、今は彼の知らない流行歌を放送している。食パンの屑のカケラが、彼の規則正しい寝息によって吹き飛ばされ、部屋の隅に転がって行った。

第四章 恐竜紳士

佳子は立ち止まった。しかし本当は、立ち止まるつもりなど毛頭なかったのである。ただ、目の前に落ちていた何かを目にした途端、彼女はそれに心奪われ、歩くことすらも失念してしまったのだ。

それは別にたいしたものではない。何処にでも転がっていきそうな、一個のつまらない小石だったのである。

茫洋とした空からこぼれた光が、すっかり葉を落としてしまった木々の間をすり抜けて降り注ぎ、道の真ん中にぼつねんと在る件の小石を柔らかに照らしていた。それは普通ならば、そこに在ることすら見過ごしてしまうだろう、小さな小さな鉱物であった。ところが、その凡庸な小石が、彼女の心の隅へ奇妙な具合にひっかかってしまったのである。

何かしら心惹かれるものに出会った時、少年少女は大きく分けて二種類の行動に出る。まず一つ目のヴァリエーションでは、少年少女はそれに深い意味を見出し（往々にして、そうした意味づけは単なる思い込みにしかならないものだが）、畏敬の念すら抱き、崇拜する。

二つ目のヴァリエーションでは、少年少女はそれが必要以上に嫌悪し、邪険に扱い、あるいは、『悪いけど、まったく興味をそそられないよ』という素っ気ない態度をとり、無視を決め込む。

残念ながら、佳子はもはや少女ではない。ただ、かつては彼女も一介の少女であった。そして少女でなくなった今も、少女時代の心の残骸と思しき塵芥が心臓の奥に沈殿したままになっている。その塵芥が、小石を前にした時に、何の前触れもなく彼女の胸の中を漂い始めたのである。

佳子は手袋を脱いでから、腰をかめて小石を拾い上げた。小石は、彼女の小さな掌の中にすっぽりと納まった。そのひんやりとした感覚を味わいつつ、佳子は無意識のうちに一つ目のヴァリエーションをシュミレートした……佳子は注意深く小石を撫でさすった。なんだろう、やっぱりただの石ころに見えるが、変な胸騒ぎを覚えるぞ。ひよつとすると……二つ目のヴァリエーションをシュミレートする。投げ捨て、蹴り飛ばした。小石はつんのめるようにして転がって行き、やがて道路から外れ、路傍に植えられた草木の中に消えてしまった。

佳子は小石と決別した後、なぜだか変に疲れた気がして、路傍に設えられたベンチに腰を下ろした。錆のついた背もたれに体を預けて上を向いてみれば、空は本当に茫洋としていて、その茫洋さ加減ときたら、ありとあらゆる種類のやる気が消え失せてしまいそうな有様だった。ああ、いい天気だ、と佳子は胸のうちに呟いた。そして腕時計に目を落とすと、とつくに授業開始時間を過ぎていた。ああ、きつと今日は茫洋記念日か何かに違いない。茫洋記念日ならば、授業に行かなくても怒られやしないだろう。

冷たい風が何処からともなく吹いて来て、佳子のコートの裾を乱雑な手つきで翻している。もう冬なのだ、木々は枯れ、空を仰げば曇天模様、着ぶくれした人間たちが気忙しく行き交っている。しかしいくら着込んでみようが、この寒さはするりと人間の隙間に潜り込んで澄ました顔つきでいる。茫洋、茫洋、寒々しい頭の中で、佳子は歌の文句のようにつぶやき続けている。彼女の白いため息は、ためらいがちに空中へ舞い上がり、そして四散して行く。さっき学校に来る道すがら買った、焼き立ての甘栗が一袋、彼女の手のひらをじんわりと温めていた。こんなもの買

っているから授業に遅れるのだ、でもまあ、もういいや、と彼女はまた一つ溜息を吐く。温かいうちに食べるのが一番なのだけれど、そこはかたない背徳感が胸と胃とに引っ掛かっているように、食欲が湧かない。この栗は、後で齧る事にしよう。

カバンから文庫本を取り出し、少しだけ読みかける。すぐに止して、またしまい込む。甘栗の服を再び手にして、カイロ代わりにして暖をとる。目を閉じてみる。まぶたの裏は薄暗かった。そのまま佳子は全身の力を抜き、まどろみに身を任せようかと思ったが、ふと傍らに何者かの気配を感じて目を開けた。

視界の隅に入ってきたのは、型崩れしたシルクハットを被り、明らかにサイズの一回り小さい燕尾服を着て、昂然と胸を張ってベンチの端に座っている、一人の老紳士の姿だった。埃でレンズが白くなっている鼻眼鏡をかけ、深い皺が無数に刻みこまれたその手には、古新聞紙に包んだ四角い物体を持って、澄ました顔つきでいる。そして、右足だけ皮靴を履いていた（彼女は、雪山で靴を食べてしまった後のチャップリンの姿を思い出した）。佳子は少々面食らった。いつの間にかこの人は佳子の横に座ってしまったのだらう——そんな疑問が佳子の胸の中でぼんやりと固まりつつあった時に、突然、紳士が口を開いた。

「さつき君が蹴飛ばした石くれだがね」地鳴りのするような、苦くてとても口に出来ないカカオバターのような声だった。

「——はい、何でしょう」佳子は、心なしか震えながら返事を返す。

「あれはわたしの左足のツメだったのだよ」

一陣の風が、佳子と紳士の間を通り抜けて行った。佳子の首周りを覆っていたマフラーが煽られて、はらりとほどけた。もう立春を過ぎたというのに、その風は肌を切り裂くような冷たさを孕んでいた。佳子はマフラーを巻き直すのも忘れて、紳士に問うた。

「どういうことでしょうか？」

「そのままの意味だよ。取り合えず、自己紹介をした方がいいようだね」紳士は胸を張って名乗った。「私は、かつて恐竜だった男さ」

×××××

ちよつと指先で触れれば崩れてしまいそうな、それでいて何千年、何万年も変わらずに繰り返されているような倦怠と感傷の日々が続いていた。佳子はそんな日々の隙間に潜り込み、季節が廻り行くさまを息を潜めて眺めていた。自分が上手くやっているのか、賢く生きられているのか、分らずじまいだった。正直な話、そんな事はどうでもよかったのである。真つ黒な髪を襟足の処で切り揃え、化粧気のない顔に黒ぶちの眼鏡を掛け、地味な黒いコートを羽織り、気付けばまるで喪に服してでもいるかのような陰気な格好となり、しかし彼女はそんな事は全然、気にもしないのだった。ごくごくたまにしか。夜中、ふと喉の渴きを覚えて目が覚めて、時計の音と窓の外を走る車の音だけが自分を取り巻いている事に気づいた時ぐらいいにしか。

佳子は研究室に籠って本を読み耽るのを日課としていた。古びた紙の日向くさい匂い、インキの奇妙に甘い匂い、紙魚の死骸の匂いを肺臓一杯に吸い込みながら、大きな長机に向って、彼女は黙々と読み続けるのだった。そうしていると何だか自分が外界と切り離されたような、ひどく気楽な気分になって、まるで温かいお茶を飲んだ直後のように溜息を吐くのだった。

読書に疲れると、彼女は甘栗を齧る。甘栗の糖分が、彼女の疲れた脳髓をじんわりと癒してゆく。天津甘栗は彼女の大好物であり、彼女の主食であった。彼女はここ数年、甘栗と水を中心とした食生活を送っていた。小さい頃からともと偏食だった彼女は、高校の時に軽い拒食症になって以来、今に至るまで、ものを食べることに困難を覚えていたのだった。ただ、栗だけはこういうわけだか抵抗なく食べられるのだった。理由は彼女自身も分からない。

佳子が専ら栗ばかり食べて生きていることに関し、家族は心配の色を隠せなかった。彼女の両親は、もう栗はいい加減にして、他の食べ物を食べるようにしなさい、と口を酸っぱくして言うてきた。佳子は故郷を離れた後も、彼らからの電話を受ける度にそのお説教を聞かされるのであった。あんたまたどうせ栗ばかり食べてるんでしよう？そんなことないってば——佳子は溜息をついて電話を切り、そしてまたぞろ栗を齧り始める。

地元の小さな寺で尼僧をやっている姉も、佳子の食生活を不安に思っている。姉から届いたハガキの裏面にびつしりと並んだ、まるで教科書のフォントのように生真面目な文字を眺めながら、佳子はぼりぼりと栗を齧る。——栗はたしかに美味しい食べ物ですが、栄養のバランスを考えたら食事をしなければなりませんよ。もう春が来るのですから、旬の食べ物を食べるのがいいでしょう。温かいご飯に乗せたフキノトウ味噌。たけのこの煮つけ。佃煮にした土筆。他にもたくさん、春には美味しい食べ物がいっぱいありますよ。——その文章に目を走らせた途端、佳子の頭の中では、その文言が姉の声で再生される。静かで荘厳な、おそろしい声。たまらない。ごめん、姉貴。姉貴、まるで何処かのお母さんみたいな口調だ。私は出来の悪い娘が知らん。

——でも姉貴の方も、ちゃんとご飯食べてるか知らん。姉貴は、きつとすごく禁欲的な生活を送っていることだろうし。

姉が高校を卒業するなり出家し、自慢だった長い髪の毛をバツサリと切って戻って来た時には、佳子はずいぶん驚いたものだった。しかし、もともと佳子の母方の祖父は僧侶であったので、その繋がりもあったのだと言う。祖父が死んで彼の寺は危うく廃寺になるところだったが、姉が通いで勤めるようになり、どうにか寺の命は維持できて、近隣の住民たちも喜んでいるのだと言う。きつとこのハガキも、その寺で書いたに違いない。佳子の目の裏に映像が浮かんで来る、剃髪した頭が少しく染まりつつある姉、本堂でお経を上げた後、小さな書き物机に向い、静かに墨をすり、ハガキに筆を下す。佳子には全く似ていない、端正で可憐な横顔を午後の日差しが照らしている。なかなかいい感じじゃない、と佳子は自分の空想に勝手に頷いてみる。

そう言えば佳子にも、祖父の寺で遊んだ記憶がある。山の上にぽつねんと建っている、小さなお寺。冬になると、その境内でしばしば焚き火をして遊んだ。水の入ったバケツを下げた祖父に、「火事にならんよう気をつけろ」だとか「熱いぞ、寄りすぎたら駄目だぞ」だとか散々注意されたものだ。

ひよっとするとその時に栗を焼いて食べたことが、自分の栗好きの原点になっているのかもしれない。そうだ、きつとあの日焚き火をした時に食べた焼き栗の味が、いまだに私を捕えて離さうとしないのだ——佳子はそんな風に考えてもみる。その一方で、それは如何にもきれいにまとめられた、わざとらしく、都合のよい話のようにも感じた。さすがにベタすぎるストーリーよね、と彼女は赤面してしまう。単純に筋の通った物語に仕立て上げられるほど、日々の生活は親切なものではないのだ。しかし、記憶の断片をそんな風に胡散臭く意味付け、解釈し、時に改ざんしたものこそが「思い出」と呼ばれるものなのかも知れない。

とは言え、焚き火をしていた時に自分を取り巻いていた風景は、素直に好きだと言えるものだった。それだけは確かなことだった。

そんな風に、好きになれるものばかりに囲まれていれば、さぞかし楽しい日々を送れるだろうに、と佳子は思う。あの幸せな記憶がありきたりな思い出になってから十数年の間、彼女が対峙する世界の中に在るものは、好きになれるものが大半だった。いつからこうなってしまったのだろう。

姉貴はその風景を捨て去ることなく、その中で生きることを選んだ。しかし私は捨ててしまい、こんな遠くの町に来てしまった。——それが何故なのか、今となっては自分でもよく分からないのだった。

結局、私が拒絶してきたものは、あまりにも多すぎたのかも知れない。でも栗という愉しみがあっただけ、まだ私は幸運だったのかも知れない。佳子は最近そんな風に考えるようになった。何かを嫌って生きて行くよりは、何かを好いて生きて行く方が心安らかなのだ。しかし何かを嫌うよりも何かを好く方が困難であり、好きなものを見つけることは容易なことではないのだ。自分に合った食べ物を見つけられなかった断食芸人は、誰にもその死を悼まれることなく檻から出され、代わってその檻には精悍な黒豹が入れられる。佳子は戯れに想像してみる——自分が四散してしまった後、今しがたまで自分がいたその場所を飛び跳ねる、一頭の黒豹の姿。佳子は甘栗の袋とハガキを鞆にしまい、読書に戻る。

×××××

「さあ、君も自己紹介をし給え」

黙り込んでしまった佳子に向かって、紳士が言った。佳子は消え入りそうな声で「私は——学生です」と呟いた。紳士は深々と頷き、さらに問うた。

「時に、恐竜と席を伴にするのは初めてかね」

「はい」

「まあ滅多に無いことだろうな。」紳士はまたしても、深々と頷く。「別に取って食ったりしないから、急いで行ってしまうおうとしないで、もう少しの間この老いぼれの話に付き合ってくれ」どの機会を捉えて席を立とうかと思案していた佳子は、心の底を見透かされたようで思わず赤面した。

「私は数千万年前に死んだ。時に、死んだことはあるかね——」

「いいえ」

「幸運なことだ。」紳士は笑顔を見せた。その口から欠けた歯が覗いた。「死ぬのは余り、いい気分じゃない。何しろ突然にやって来る。何だかよくわからないもんだよ。いくら予兆が有っても、覚悟を決めている積りでも、生命の途切れる瞬間は突拍子もなく、まるで何かの冗談のように訪れる。まるで大きな欠伸を一つした瞬間のように、平凡な顔つきでね。」そして紳士は、首の関節を二、三回鳴らして見せた。

「今でも覚えているよ。昼飯時、私は巨大な首長竜を仕留めようとしていた。私はちっぽけな肉食獣で、その上すでに老いぼれていた。とうてい、首長竜と対等に渡り合えるだけの図体も、体力も、持ち合わせていやしなかった。どんな気分がすると思うかい、たった一匹で首長竜に立ち

向かった時には――。空に溶け込んでしまいそうなくらい高い処で光っている、濁った二つの目玉に睨みつけられた時、どんな気分がすると思うかい？」

「分りません」分かるはずがあるものか。佳子は正直に答えた。

「そうだろうな、私にも分からないんだから」紳士は自分の言葉に自分で深く頷いていた。「とても感慨に耽っている場合ではなかったんでね。どんな気分かなんぞ、分かるはずもないさ。食うか食われるか――まあ向うは草食獣だから私を喰らいはしなかっただろうが――、とにかく、生きるか死ぬかの戦いだった。」

佳子はふと思った、なんだか以前にも、こういう事があった気がする――そうだ、お祖父さんだ。何時だったか、私がまだ小さかった頃、お祖父さんは熱心に戦争の思い出を語っていたわけ。南方の島に閉じ込められて、毎日行進する日々。僧侶も戦争に行かされたのだ、あの時代には。

「私は首長竜の足に爪を突き立て、そして脇腹に食らいつき、致命傷を負わせた。彼の長い首がピンと伸び切り、濁った眼玉の光が失せてゆくのが分かった。いい勝負だった、全くもって、いい試合だったよ。私は勝利したのだ！しかし、私の方も無事ではなかった。あの丸太のような足で踏みにじられたせいで、私の背中には大きな亀裂が入っていた。その亀裂が私にとって命取りになるであろうことは、なんとなく分っていた。しかし私は最後まで、闘争本能と食欲とを忘れようとせず、喰らいついていたのさ。

私の鋭利な牙は、肋骨の隙間を擦り抜けて彼の体の奥へずぶりと喰らい込み、私の強靱な爪は、後ろの右足の脛脛にしっかりと突き刺さっていた。そして首長竜は、まるで根元が腐った大木のようにゆっくりと横倒しになった――もはや力尽きてしまった私を押し潰しながらね。」

どんな気分がすると思うかい。倒れて来た、不気味で巨大な生き物に押し潰され、下敷きになりながらも、その脇腹に必死で喰らいついている時、どんな気分がすると思うかい？」

「分りません」

「そうだろうな、私にも分からないんだから」またぞろ紳士は自分の言葉に自分で深く頷いていた。「何しろ押し潰された時に私は死んでしまったのだからね、感慨に浸ろうにも浸れるはずがない。気づいた時には私は、何か深い深い、静かな空間に置き去られ、それっ切りだ。

その一連の出来事は、ある日の午後、ほんのひと時の間に起こった。空は曇り空だった。と言っても、今の空とはずいぶん様子の違う空だったがね。色合いも、においも、光の屈折し具合も。」

佳子は、自分の頭の上に広がっている茫洋とした空を見上げた。二十一世紀の空の色がそこに在った。一体どんな風に変わって来たのだろう、あの「空」というものは。そして今私が見上げている、あの茫洋とした空も、何千何万年後にはその面影すら失くしてしまうのだろうか。

「しかし腹立たいのはだな、そうやって私が仕留めた獲物を結果的に横取りされてしまったことだ。首長竜、そしてその下敷きになっている私が呼吸を止めたのを見計らって、木陰に潜んでいた小型の肉食獣たち――私よりも、もっとちっぽけで、喧しい、下司な連中だ――が飛び跳ねながらやって来た。そして奴ら、口々にキヤアキヤアと喚き散らしながら、私が倒した首長竜の肉をついばみ始めたのさ。まったくつまらない奴らだよ、自分たちでは何も出来ない、ちよこまかと走り回って五月蠅く騒ぎ立てるだけ、誰かのものを盗み取ってはしたり顔でいる、あいつらに食べさせるにはもったいない肉だったよ。

それで結局、私が得られた取り分と言え、せいぜいこれぐらいだった――」紳士は膝の上に

乗せていた古新聞紙の包みを開き、中身を取り出した。昔ながらの、小さなアルミの弁当箱だった。

×××××××

佳子が研究室で読書をしている時、ふらりと入って来てはその邪魔をする人間が二人ばかり居る。

一人は、何年この大学に籍を置いているのか分らない院生で、常にトンボ眼鏡のサングラスを掛けていることから「トンボさん」と呼ばれていた。

このトンボ眼鏡が致命的なくらい似合っていないことが、トンボさんがトンボさんたる由縁だった。佳子は初めてトンボさんと対面した時、彼の顔上半分に陣取って違和感を具現化したかのように煌いている、巨大な楕円形のレンズに衝撃を受けたものだが、次第にその違和感は彼女の中にも潜り込んでしまい、この頃では奇妙な郷愁すら覚えるようになっていた。

しかし郷愁すら覚えるようになったとは言え、違和感は依然として確固たる違和感のままでトンボさんの顔上半分に居座っており、佳子はふと本から顔を上げた折などに、思わずそれを凝視してしまうのだった。

「何か僕の顔にくっついてるの？」と、トンボさん。

「いいえ」——はい、くっついています、具現化した違和感が。

とは言え、雨の日や曇りの日などにトンボさんがサングラスを掛けずにやってくると、その違和感たるやサングラス着用時の比ではなく、そんな時佳子は心乱れるあまりに読書も出来なくなってしまうのだった。この人は空気中に溶け込んでいる違和感の粒を、全部飲み込んで濃縮してしまったのかもしれない——佳子はそんな風に考えていた。

一度、本人に尋ねてみたことがある。「トンボさんは何でトンボ眼鏡のサングラスばかり掛けているんですか？」それは学科の懇親会のことだった。佳子は飲み慣れないアルコール（まるでジュースのようなサワーだった）が、栗と水ばかり摂取している彼女にとっては刺激が強すぎた）のせいで自我を喪失しかけており、普段ならば出来ないような質問をぶつけたのだ。

トンボさんは若干苦笑いをしたもの、気さくに答えてくれた。「いつもは『太陽光線が苦手なんです』『紫外線対策です』って言って誤魔化してるんだけどね、本当を言うと、『青空対策』なんだ。」

『『青空』対策？』

「そう、僕はこういうわけだ、すごく天気がいい日の、澄み渡った青空に弱いんだ。嫌いとか苦手とかなんじゃなくて、弱いんだよ。——理由は分からないんだが、青空を見るとね、何故だか反射的に涙が出て来て、号泣してしまうんだ。」

「それは体質的なものですか？」

「そう、体質的なもの。眼医者にも神経科にも行ってみたけれど、原因がさっぱり分らない。取り合えず、でっかいグラサンを掛けて応急処置してるわけだ。グラサン自体は余り好きじゃないんだが——似合っていない自覚はあるんだよ、一応——、これを掛けないことにはね、日本晴れの日や何かには号泣し過ぎて前後不覚になっちゃうからね。——ねえちよっと、佳子さん、大

丈夫かい？」

トンボさんに洗面所まで連れて行ってもらい、佳子は飲み慣れない缶チューハイを必死でもどした。朦朧とした意識の中で彼女は考えていた。ああ、やっぱり水を飲んで、栗を齧っておくべきだった。

それにしても、青空を見たら涙が止まらなくなるなんて、本当なのだろうか？ トンボさんはきと、いつになく酔っ払っている佳子を見て悪戯心を起こし、あんな作り話をしてみせたのだろう。

二日酔いの忌まわしい痛みに悩まされながら、彼女はそう結論付けた。

しかし何故だか、ありありと想像出来るのだった——雲ひとつない青空を見上げて号泣している、トンボさんの姿を。佳子はその奇異な情景を思い浮かべながら、やっぱりあれは本当の話なのかも知れないと思いたくなる衝動に駆られるのだった。

もう一人は、年中日焼けしている顔に爽やかな笑みを絶やさない、ヤマダという軽薄な男で、昨年までは佳子と同じ学年だったはずなのに、今年からは何故か彼女よりもひとつ下の学年に成っていた。彼は最近では佳子を「先輩」と呼称するようになり、僕は哀れなバシリですよ、とおどけながら、頼んでもいない焼蕎麦パンを買って来るのだった。佳子はそれを無視して、いつも通り甘栗を齧る。ヤマダは肩をすくめ、行き場を失ったそのパンを自分でペロリと平らげ、コカ・コーラを流し込む。そんなヤマダを、佳子は半分呆れたように見やりながらも、何故だか憎めないのだった。

佳子はヤマダが真面目に講義に出ているところを見たことがない。彼の生活は、彼とよく似た軟弱者たちと愉快に遊ぶことと、その遊びの資金を捻出するためのバイトに費やされていて、学業の入り込む隙は残されていないかった。飲み会と女の子が、佳子にとっての甘栗に相当する、カ彼の生きる糧だった。時々気が向いて大学に出て来ると、取り合えず研究室に寄り、焼蕎麦パンを片手に佳子をからかったり、トンボさんと他愛ない世間話をしては帰って行くのだった。何をやっているのだろうあいつ、と佳子は呆れ顔でため息を吐くのだった。

出会ったばかりの頃、佳子のヤマダに対する認識は単に「遊び人」「日焼け」「軽い男」という程度のものであった。しかしその後、ごくたまにはあるが、彼は少々不気味と言うか、不可思議な一面を見せる事があった。

大体においてヤマダは、ムードメーカーとしていつも必要以上に明るく振舞い、気楽に人生を謳歌している様子を厭味なほどに誇示して回っている。しかし彼は時々、意識を宇宙の外に飛ばしてしまったような、スイッチを切ったテレビの画面のような目をして、沈黙してしまうのだった。

たとえば早朝に研究室に入ってみると、部屋の一奥に置かれた椅子に一人座っているヤマダが、のっぺりとした青白い顔で（日焼けしてコーヒー牛乳色になった顔でも、こんな風に青白くなるものなのか、と佳子は少し驚いた）まるでゼンマイの千切れたカラクリ人形のようにひっそりと虚脱しているのを見た事がある。その時の彼の眼が余りに虚ろだったので、佳子はそのまますみもなくドアを開け、踵を返し立ち去ったのだった。

またある時には、文学部棟四階の喫煙所にて、大きく開け放った窓に向ってしな垂れかかっているヤマダを見かけた事もある（その時もまた、彼の目は佳子を怖気づかせるのに十分だった）。

何だかそのまま窓の外へ落下してしまいそうな気がしたので、佳子は思わず「ヤマダさん！」と叫んだ。すると彼はびっくりと身体を震わせて振り向き、すぐにいつもの軽薄なヤマダに戻って佳子に話し掛けて来たのだった。

「時々うまく自分を動かせなくなるんだろう」トンボさんはヤマダをそう評した。「パソコンがフリーズするみたいなんさ。本当はそんなに容量の大きくないHDを必死で回転させて、あいつはおどけ続けているんだよ。いじらしいもんさ」

トンボさんはそう言ってコーヒーを啜り込む。茶碗から立ち上る湯気が、彼のサングラスを白く染めている。

「でも心配になることがある。いつの日かあいつ、動かなくなったまま戻らなくなっちゃうんじゃないかね。そうしたら俺達は、一体どうしてやればいいんだろう。今日びは電化製品が壊れれば手数料を払って片す、しかし人間が壊れた時には何をどうすればいいんだろうな」

佳子は無言で栗を齧っていた。——時々うまく自分を動かせなくなるんだろう。——

×××××

「さて、どんな気分がすると思うかい、我が身が石に代わって行く時には——。砂埃にまみれ、土に覆われ、しなやかだった四肢は硬直し、自慢の牙は輝きを失い、ごつごつとした無機物に変化する。そして、地中に埋もれたまま、歴史から置き去られ、忘れら去られる——。一体どんな気分がすると思う？」

茫洋とした空の下、紳士は静かな声で話し続けていた。思いつきの服を着た学生たちが、キャンパスを足早に取り過ぎて行く。佳子の手のひらの上に乗っている甘栗は、もうすっかり冷めてしまったようだった。

「分りません」佳子はそう答えた。

「そうだろうな、私にも分からないんだから」紳士は自分の言葉に自分で深く頷いていた。「しかし、石になって生命の営みから距離を置いてみると、それはそれで気分のいいものでね。すると今度は逆に、自分が肉を身にまといて地表をうろろ歩き廻っていた事が、まるで何かの冗談のように思えて来てね。ひよつとして俺が恐竜として地上をうろろつき回っていたのは、夢か何かだったんじゃないか、とすら考えるようになったよ。私は昔からずっと石で、たまたまある日、たった一晚の間にそんな変な夢を見ただけなのではないか、とね。」

紳士は脚を組み換え、話を続けた。

「私が地下に潜り込んでからも、地上では相変わらずのどんちゃん騒ぎが繰り返されていた。私の種族はいつの間にか絶えてしまい、後には新興の種族が幅をきかせるようになった。しかしそいつらも時を置かずして絶え、また別の新しい、門脈の悪い連中が台頭して来る……その繰り返しさ。」

それはそれは目まぐるしい世代交代だった。地下に潜りこんで石になってからと言うものの、私は鉱物の時間感覚で過ごしていたから、地上の時間の流れ方をどれほど慌ただしく感じていたことか！

そうこうするうちに、恐竜という存在自体が地上から姿を消してしまった。まるであの激動の

時代が幻影だったかのように、すっかり姿を消してしまったのだ。もちろんその時には、私はとつくに恐竜ではなくなっていて、心の臓まですっかり石に成り果てていたよ。しかし、さすがに悲しい思いがしたね。むしろ自分が石になってしまった時よりも、ずっと深い喪失感を感じたものだよ。」

そして紳士は少しの間沈黙した。佳子も無言だった。二人の目の前を、テニスラケットを背負った学生たちが声高に喋りながら通り過ぎて行き、その声が静かな午後の空気の中でことさらに大きく響いていた。

しばらくして、紳士は再び口を開いた。

「一体これから何が起こるのかと思っていたら、今度は何と、出産時に子供を卵で包むことなく、そのまま産んでしまう連中が現れた！信じられないほど下品な奴らだ、と私は憤ったものだよ……いや失礼、君の種族もそうだったな。とにかく、地上世界の主導権を握ったその連中は次々と新しい種族に枝分かれしてゆき、仕舞には、君らの種族が出て来たわけだ。それからどんな風にこの地上が様変わりしていったかは、私の理解を超えているね。」

佳子は肩をすくめた。その種族の末裔であるはずの私の理解をも超えている、佳子は心の中でそう呟いた。

「だが、地下の生活だって地上に負けず劣らず波乱万丈だ。息つく暇もないよ。揺るぎないように見えている大地はしょっちゅう変動を繰り返しているし、タフでハングリーな生き物たちが大挙して住んでいる。ミミズや芋虫がどんなに勇猛だったかな連中か、君には分かるまい。君らには想像もつかない世界だろう、地下の喧騒、地下の騒乱などと言うものは。

私の体はいっしかバラバラに分散し、そのカケラの一つはより深く地下に潜り込み、また別のカケラは地上に押し上げられた。」

「そのカケラの一つを——」

「君が蹴飛ばしちまったわけさ、お嬢さん」そう言つて彼は、ハダシの左足を掲げて見せた。「私の左足の爪をね」

佳子は頭を下げた。「すみませんでした」取り合えず頭を下げてみたものの、それ以上どう謝つていいのか見当もつかなかった。

「別に謝ることはない」紳士は鷹揚な態度でそう言つた。「掘り返されもすれば、蹴飛ばされもする、それが石くれの運命というものだ。」

そう言つて、紳士は空を見上げた。深い皺の刻みこまれたごつごつとした顔を、茫洋とした色の光に照らしながら、彼は不可思議な感慨に耽つているようだった。その感慨の本身は、あと何千何万年もしなければ私には分りやしないだろう、佳子はそう思いながらも、彼にならつて天を仰いだ。しばらく二人はそのまま、茫洋とした早春の空を眺めていた。

紳士の方が先に視線を戻した。佳子はまだ、間拔けな顔付きで空を眺め続けている。そんな彼女が膝の上に大事そうに抱えている小さな紙袋に、彼は目を留めた。

「ところで、それは何だね」

佳子は我に返って答えた。「私の食べ物です」

「少し呉れんか」少しばかり幼げな声色を使つて、紳士はそう言つた。その声色に吹き出しそうになりながら、佳子は答えた。「いいですけど、植物系の食べ物ですよ」

「そうか」紳士は少し残念そうな素振りを見せた。「それなら、止めておくよ。なに、私にはこの

弁当があるしな」そう言って彼は、小さなアルミの弁当箱に目を落とした。

×××××

夕暮れ時、埃っぽい窓から西日が差し込んで来て、研究室の長机の上で踊っていた。佳子は横顔をその光に照らしながら、静かに本を読んでいた。しかし彼女はずっと、同じページばかり開いているのである。いくら活字を目でなぞっても、その内容がちつとも頭の中に入って来ず、どうしても先に進めないのだ。佳子は焦る事もやめて、諦めにも似た心持でその頁を眺め続けていた。時々、どうにもならない事があるのだ。そんな時には、どんなに焦ろうが、何も改善されやしないのだ。オレンジ色一色に染まった部屋の中、時間だけが流れて行った。佳子を遥か彼方に置き去りにして、時間だけがどんどん先へと流れて行く。彼女は一冊の黴臭い本を手にしたまま、忘れられたように置き去られる。そう、こんな事なんて、よくあること——佳子は大きく息を吐き、自分に言い聞かせる。今までに、もう何度もこういう事があったはず。

ドアが開いた。佳子が本から顔を上げると、トンボさんが入って来た。

「おはよう」とトンボさん。お馴染みの違和感が部屋に横溢した。

「こんにちは」佳子は無感動な顔付きで会釈する。トンボさんはまるで芸能関係者の人のように、いつの時間帯でも「おはよう」と挨拶をするのだ。

「ヤマダは？」

「まだ来てないです」

「そうか。まあ来なくてもいいんだけどね」

トンボさんは佳子の前に座り、別に彼女に聞かせようとする風でもなく、さりとして独り言を言っている風でもなく、世間話を始めた。「二昨日まで名古屋に行ってたんだよ。それでね、ちよつと面白いレストランに行ったんだ。甘口のスパゲティを出す店でね、苺味のスパゲティとか、バナナ味のスパゲティとかがメニューにあるんだよ。まあ、ちよつと俄かに信じ難いよね……。ああ、その目、作り話だと思ってるんだろ！ ネットや何かで調べてみなよ、嘘じゃないから。」

「はい」佳子は冷ややかな顔付きのまま、気のない返事をした。（しかし律儀にも、彼女は帰宅後にきちんとその店を検索してみたのだった）

「それで、僕は抹茶味を頼んだんだが、これが想像を絶する代物だね。抹茶色の面の上に、こしあんと生クリームと缶詰の果物が乗っているんだぜ！ あれには参ったね。」

またしてもドアが開き、日焼けサロンの広告にでも出ていそうな男が入って来た。彼はコンビニの袋を高々と掲げ、白い歯を見せて笑顔を作る。「佳子先輩、焼蕎麦パン買ってきました！ あ、眼鏡が素敵なトンボ先輩、メロンパンどうぞ！」

佳子は本を閉じる。今日はもう、読書をするのは無理のようだ。「私は栗を食べるから、パンは要らない」

ヤマダは肩をすくめる。「また栗っすか、佳子先輩！ っただけ好きなんすか、栗が！」

「じゃ、俺に焼蕎麦パンを呉れ。」と、トンボさんが言った。「メロンパンはあんまり好きじゃないんだ。」

「まったく、好き嫌いの多い人々だ！」ヤマダはトンボさんに焼蕎麦パンを渡し、自分はメロンパンにかぶりつきながら席に着いた。

「そう言えばヤマダ」と、焼蕎麦パンを片手にトンボさんが話し掛ける。「例の店、行ったよ。」

「え、マジすか。どうでした？」

「まあ、圧倒されたな」

「何食べたんすか？苺味？」

「いや、抹茶。」

「そうすか。おれはお汁粉味が好きで——。」

「お汁粉？そんなの在ったっけ。」

「ええ、ありましたよ。」

「そうか。じゃあ今度行った時には、それを食べてみようかな。」

「ええ是非そうして下さい。そうだ、今度はみんなで行きましようよ。」

「それはいいな！ねえ、佳子さん——。」

そう言つてトンボさんは佳子の方を見たが、冷徹な表情で栗を齧っている彼女の横顔に気圧されて視線を戻した。

何だかんだ言つて、この二人は意外に仲がいいんだな——冷徹な表情を保ちながらも、佳子はそんなことを思つて心を和ませていた。そう言えば、彼らは去年の夏に一緒に旅行に行ったそうだ。なんでも、佳子の姉がいる寺を見に行ったのだとか。物好きな人々だ、と佳子は苦笑いをする。それにしても、このお気楽で軽薄な二人と、求道者然とした堅物な姉貴とが、一体どんな会話を交わしたのだろう。きつと奇天烈な会談だったに違いない——その様子を想像してみると、佳子は思わず笑みがこぼれてしまうのだった。

トンボさんとヤマダの雑談は、いつの間にか甘口スパゲッティの品評会から、より深刻な話題へと転換していた。

「それで、トンボさんは来年もまだ此処に居るんすか？」

「うん。結局、修論を引っ込めちまったからな」トンボさんは漆黒の巨大なレンズをガーズで拭いながらそう言つた。「なんだかもう、俺は一生社会に出ないままにいる気がするよ」

「俺もそう思います」白い歯を見せながら、屈託なく笑うヤマダ。佳子は栗を齧りながら、おやおやと思つた。

トンボさんは、少しばかり不満そうな顔付きになった。「お前、そうやって笑つてるけどさあ、お前だつて人の事言えないだろう。先週、語学の試験があつたんだろ？どうだったんだよ。今度はちゃんと、進級できるのか？」

「いやあ、キツイつすね。まあ三割五分つてとこですかね」

「不味いだろう、それは」

「まあ、不味いですよ。」ヤマダは唇をへの字に曲げて見せた。へんな顔、と佳子は思った。「だつてしょうがないんですよ、試験前日から当日にかけて、オールだったんですから——。ひどい二日酔いで受けたんですよ。俺の頭の内側で、天使たちが千人くらい集まってバスケをしているみたいな有様で、もう問題を解いているどころじゃなかったんすよ」

「もうお前は駄目だよ、本当に駄目だ。」そうね、駄目だよ。佳子も心の中でトンボさんに同意した。

「仕方なかったんすよ」への字に唇を曲げたまま、ヤマダはそう言う。

「ああ、俺にはお前の未来が見えるぞ。お前はいつまで経つてもこの象牙の塔から出られず仕舞

い、後輩に次々と追い越されながら焦燥と倦怠の日々を送り——」

「挙句の果てには、トンボ眼鏡を掛け始める始末——」

「混ぜっ返すな。とにかくお前、アツと言う間にどうにもならなくなるぞ、俺みたいに。」

「いざとなったら佳子先輩のヒモになりますよ」

佳子は世にも恐ろしい形相でヤマダを睨み付けた。しかし、何故か頬が火照るのを抑え切れなかった。

「佳子先輩のヒモになったら、朝昼晩と栗ばっかりだな」

「そりゃあキツイっすね、さすがに」

ああ、この人たちは本当に駄目だ——。佳子は溜息を吐く。その感想は、二人に出会った時から今に至るまで抱き続けている。この人たちは本当に駄目だ。しかし、ふと気がつけば、その駄目さ加減に居心地の良さを感じている自分がいた。

何だかんだ言っても、私はこんな日常が好きなんだ。最近、佳子はそう認めるようになってきた。今までずっと、私はあまりにも多くのものを拒絶して来て、甘栗の袋ひとつ抱えて毎日やり過ごしているだけなのだと思い込んでいた。でも、別にそんなことはなかったのだ。日向くさい小さな研究室、具現化した違和感を顔に張り付けたトンボさんがいて、日焼けサロンの広告にでも出ていそうなヤマダがいて、そして私は甘栗を齧りながら、日がな一日古めかしい本を紐解いている……。その退屈な、倦怠と感傷の日々を、私は好きだったのだ。ずっと前から、気づかないくらいに。

それと同時に、この日常がいつまでも続く訳ではないという事実も、佳子は受け止めつつあった。トンボさんは修論を書いても、書けなくても、今年限りでいなくなってしまうそうだ。そして佳子自身だって、大学を去る日が数年以内にやって来るだろう。そうすれば彼女は、ヤマダを残してこの研究室を出ていかなければならない。いずれにせよ、この素晴らしい均衡は遅かれ早かれ崩れてしまう。そうすればまた、私は甘栗の袋を抱えたまま、居心地のよい場所を探しに行かなければならない。その日は、何時来るのだろうか。何時、来てしまうのだろうか。

何千年、何万年も変わらずに繰り返されているような、それでいて、ちよつと指先で触れれば崩れてしまいそうな、倦怠と感傷の日々が続いていく。佳子の胸の中に微かな悲しみが頭をもたげ、影法師のように伸びて行った。しかしその悲しみは悲しいことに、涙を流す種類の悲しみではなかった。心臓の中身が空っぽになってしまうような、茫洋とした想いだった。佳子は甘栗を齧りながら、目の前で漫才を続ける二人の青年を眺めていた。あんな風におどけてばかりいる彼らも、本当は私と同じような気分にいるのだろうか。

×××××

「どんな感じでした？」小さな声で、佳子はそう尋ねた。

「何がだね？」と紳士。思いがけなく、今度は佳子の方から話掛けて来たので、少々びっくりしたような面持でいる。

「何千万年も生き続ける——いや、死に続けているのは、どんな感じでした？」佳子はもどかく言葉をつむぎながら、そう問うた。

「まあ、悪くはなかったね」紳士はそう答えた。

紳士は再び感慨に浸っているようだった。深く皺の刻まれた硬質な手の上には、古びたアルミの弁当箱がぼつねんと乗っている。

「とにかく全てがあつと言う間だったんだ。宇宙が一つ瞬きをするだけの話さ。何もかもが変わってしまったようにも感じるし、何一つ変わっていないようにも思える。余りにも目まぐるしくて、私は何一つ分らずじまいのまま、何千万年も過ごしてきたわけさ」

昼休みも終わり、授業が始まって、キャンパスの中は少しだけ静かになった。その静けさは茫洋とした太陽の光と混ざり合い、佳子と紳士の間に柔らく降り積もっていた。

「だが不思議なのは、あつと言う間に過ぎてしまった長大な年月を構成している、一瞬一瞬の時間の断片——取るに足らない、ろくでもない瞬間の一つ一つが、奇妙にいとおしく思えて来るんだよ。おかしい話さ。そんな、ツメのアカのような瞬間、瞬間を、是が非でも私は自分の中に留めておきたいのさ。だから私は、ずっとそうやってきた。」

紳士は深く、息をついた。

「きつと私は、気が狂っているんだろうね」

風が吹いて来た。佳子のマフラーの端が巻き上げられて、くると空中に踊った。

「さて、そろそろ行かなければ」

紳士は立ち上がった。ハダシの左足でアスファルトの地面を踏みしめ、アルミの弁当箱を新聞紙でくるくると包み込み、昂然と空を見た。

「長々と年寄りの話に付き合ってくれて、ありがとう。何千年後か、何万年後になるかは分からないけれども、また会えるといいね」

そう言つて、紳士は振り返る事もなく、軽快な足取りで歩き去って行った。その時はじめて佳子は、彼の背中に大きなバラの花が一輪咲いているのに気が付いた。

遠ざかつて行く紳士の後姿は、すぐに茫洋とした空気の中に拡散してしまい、後にはキャンパスの空虚な喧騒と、車の走る音だけが残っていた。その中に身を沈めて、佳子は静かに息をしていた。何千年後か、何万年後になるかは分からないけれども、また会えるといいね——紳士の言葉が、彼女の胸の中を回り続けていた。

さて、私もそろそろ行かなくちゃ、佳子は立ち上がり、文学部棟を目指して歩き始める。まだ、研究室には誰もいないだろう。本でも読みながら、あの二人を待つことにしよう。二人がやって来たら、「さつき恐竜と会つて、話をして来た」と言ってみよう。そうしたら彼らは、一体どんな顔をするだろうか。想像しただけで、笑みがこぼれてきた。

佳子は茫洋とした空を見上げた。そして、甘栗の袋を小脇に抱えて、歩き続けた。

#ジムノペディ#

・・・・・・・・あとねえ、もうキュウとコロッケ頂戴。うん、コロッケ。そう、男爵芋のを一ヶね・・・・・・・・。

・・・・・・・・そうそう、今日は久しぶりに日本晴れだったなあ。朝は結構降ってたのに、昼からはカラッと晴れたもんだ。梅雨の中休みって言うやつかねえ。いやあ、久しぶりに、気持ちいい天気だったなあ。

それにしても、朝は結構降ってたのに、昼からは、もう夏が来ちゃったのかってぐらい気持ちよく晴れたなあ。青空なんてもの、久々に見た気がするよ。

・・・・・・・・ああ、お酒ももらおうか。うん、さっきのと同じ銘柄の奴でいい。そう、芋焼酎ね。お湯割りで。

・・・・・・・・はい、どうも有難う。では乾杯。

・・・・・・・・ああ、旨い。

またこの後、夜通し雨が降るんだろ？ウンザリするな。でもまあ、こうして飲んでる間は、そんなこともどうでもよくなっちゃうな。雨水がなんだ、おれは生命の水を五臓六腑に行き渡らせてるんだからな！

・・・・・・・・そうそう、話は変わるけどさ、今日面白いことがあってねえ。面白いっつか、妙な具合に心に引かかる出来事な。

今日の昼下がりに、駅前で出会ったおかしな男の話だ。ま、酒のツマミだと思って聞いてくれよ。おれはこの話を誰かにしたかったんだよ。エンエンと天気の話をするより、よっぽどいいだろうよ。まあ、聞いてくれ・・・・・・・・。

おれは西口のターミナルの辺を歩いてたんだ。朝っぱらから鬱陶しく降り続いてた雨が突然に止んで、おまけに青空まで覗いたもんだから、なんだかこう、胸の中が澄み渡るような、実に爽快な気分になってね、軽い足取りで歩いてたもんだ。するとね、タクシー乗り場の看板の下に、車海老みたいに丸まって横になってる男が一人いたんだ。大方浮浪者が昼寝しているんだろう・・・・・・・・おれはそんな風に思いながら通り過ぎようとしたんだが、思わず足を止めちゃった。その車海老みたく丸まった男が、泣きじゃくっているのに気づいてね。

しかも、その泣き方が尋常じゃない。嗚咽なんてもんじゃあない、号泣さ。そう、丁度昨日まで降ってた雨みたいなの、ひどいぎんざ降りさ。あんまり激しく泣いてるもんで、殆ど過呼吸みたいになってるんだよ。そりゃあもうね、そいつの中に詰まっているもんが全部、外に出ちゃうんじゃないかと思うぐらいの無茶苦茶な泣きっぷりだったよ。

「あんた、大丈夫かい」おれは基本的に博愛主義だから、その男にその声を掛けたよ。

男は何事か言おうとしてるんだが、如何せん、口を開けば涙と鳴き声の塊が飛び出してくるもんで、どうにもならないようだった。それでも何事かおれに言いたいことがあったようで、のたうつようにして泣きながら、その男は咳き込んでたよ。何なんだこいつは、ありったけの涙を流して、方舟が入り用になるようなでかい洪水でも起こそうとしてるのか・・・・・・・・？

しばらくすると、男は喋ることを諦めちゃった。そして今度は身振りでもって何か伝えようとしたんだろうな、しきりに地下鉄の入り口の方を指差し始めたんだよ。その内に、おれはようや

つと気づいたのさ、その男が自分を地下に運んで欲しがってることに。

おれは男を担いで、地下道の入り口へ運んで行った。奴は腰を抜かしちゃったから、全身を俺に預けている格好になって、重たかったのなんのって。

……そうして地下道の一角に坐らせて、取り合えず水を一杯飲ませると、ようやくとそいつは泣き止んだんだ。

——いやあ、助かりました。どうも有難うございました……。

腫れぼったい目をして、そいつはそう言った。時折、思い出したようにしゃくり上げながらね。一体なんであんなに泣いてたんだ、俺はなるたけ優しい声でそう尋ねた——腫れものに触るようになってね。何せ、折角落ち着いたのに、またぞろ泣き出されちゃ堪らないからな。しかし幸運な事に、泣き止んだ男はもうすっかり平静を取り戻したようで、地下道を行き交う通行人を眺めながらポツリポツリと話し始めたんだ。しかしだな、その内容が俄かには信じ難いもので、おれは「こいつは矢張り気狂いなのかもしれない」と思ったもんだ……。

そいつが言うにはな、自分は言わば「青空アレルギー」なんだと。要するに、雲一つないような気持のいい晴れた空を見ると、涙があふれて止まらなくなっちゃう……。そんな奇病に悩まされてるんだとよ。

……そんな病氣、初耳だよ！なんてセンチで、それでもって滑稽な症状なんだ！

——そりゃ、精神的なもんなのかい？体質の問題なのかい？と俺は尋ねた。

——さあ。一応、両方の医者に罹ってみたんですが、一向に治る見込みも無くて……。

——しかし、不便で仕方ないだろうに。

——だから、外に出る時には、でかいサングラスを必ず掛けるようにしておくんです。

——成程。で、今日は運悪く、掛け忘れてしまったと……。

——ええ……家を出る時は土砂降りだったし、今は梅雨の時季だし、まあ大丈夫だろうと思ってたんですが……。まさか昼から、あんなにいい天気になっちゃうとは……。

——雨や曇りの日でも、用心のために掛けておけばいいじゃないあふ。

——勿論その通りなんですけれどねえ、たまには忘れてしまう事もあるもんで……。

男は「取り合えず、日が暮れるまでここにいます。どのみち、半日ぐらいいは何もする気になれないでしょうし、夜まで待つのも苦じゃありません。青空の下で、あんな目に遭うよりはねえ……。」と言った。

それで、俺は仕事に戻らなければならぬから、男に別れを告げてそこを去った。不思議なこともあるもんだ、と思いつながらね。振り返ると、地下道の隅に坐り込んで、日が沈むのを待っている陰気な男がいるわけだ。何と言うか、遣る瀬ない気分になるわな。

地上に出ると、それはそれはキレイに晴れ上がった青空が広がっていて、爽快そのものだった。まるで、でかい冗談みたいな空だった。おれは今まで感じた事もないような気分に浸って、その青空を眺めていたよ。

——ことによると、あの男はおれをかついだけなのかもしれない。泣き真似をして、とんでもない法螺話をして、おれを騙してからかって喜んでただけかもしれない……むしろ、そう考える方が自然なのかもしれない。でも、おれはどうも、あいつが嘘をついていたとは思えないんだ。そうやって青空を眺めていると、何だか、あの男の気持も、分らなくはないような

気がしてさあ。うん、空がこんなに晴れ渡っているんだったら、あいつの突拍子のない話も、あり得ない事じゃあないように思えて……………。

……………とまあ、そんな事があつたのさ。うん、どうでもいい話なんだがね……………。さて、お酒もう一杯もらおうかな。

……………ああそうだ。ところで話は変わるが、この辺にある良い安宿を知ってたら教えてくれないか？

おれの常宿がさあ、どういうわけだか知らないけど潰れちまったんだ……………そう、駅前通りを少し南に行ったところにある商人宿。そう、郵便局の横の……………うん、たぶんそこだ。場所も便利だし、女将さんは綺麗だったし、おれのお気に入り宿だったんだがね。何で無くなっちゃったんだろう。

……………何、女将さんがいなくなっちゃったのかい！ショックだなあ！

そりゃあ女将さんがいなくなりゃ、あの宿は潰れちまうよなあ。なにせ、あの人がたった一人で切り盛りしてたんだものなあ。

一体、どうしちゃったんだい、女将さん。何があったんだ。

駆け落ちか、夜逃げか、実家に帰ったか……………。ま、どんな理由であろうと、おれは納得がいかないねえ。あんないい女が居なくなつて、あんないい宿が潰れちまうなんて、ふざけた話だ。許せないね。世の中、狂ってるよオ！

それにしても困つたな。しかも今夜は、また雨が降るんだろ？まあ、梅雨だものなあ。八方塞がりだなあ。なあ、どこかにいい安宿が無いかねえ？雨風凌げて、心地よけりゃいいんだ。何処かにそんな宿、無いもんかねえ……………。

第五章 お夏ちゃん

(1)

梅雨前線が立ち退き、今度は太陽の色一色に染められた日々が訪れた。そんな中、大学通りの中華料理屋「サムラ軒」がついに冷やし中華を始めたのである。と言う事はきつと、「お夏ちゃん」がこの町に戻ってくる季節になったんだな、僕はそう思いながら、湿気をたつぷり含んだウンザリするような空気をくぐり抜け、紫外線をトンボ眼鏡サングラスで遮りながら、雪崩れるように降って来る蟬の鳴き声をかき分けて、「サムラ軒」に足を運んだわけだ。

「サ」「ム」「ラ」と大書きされた赤い暖簾を手で払って中に入ると、小さなテーブルが五、六個並び、その上には折り目正しく配置された醤油さし、酢の瓶、ラー油の瓶、つまようじ、割り箸立てが鎮座している。この店のバイトであるところの、赤茶けてくしゃくしゃの髪の毛をした女の子が、気だるげな様子で団扇をいっつボンヤリとテレビを眺めていて、その横で汗、そして涙をとめどなく流しながら一心不乱に冷やし中華を吸っているのが、件の「お夏ちゃん」であった。お夏ちゃんは泣き腫らした目で僕を一目見、しばらくは目を泳がせていたが、ようやくと記憶の引き出しの中から僕の顔を引っ張り出せたのだろう、口から麺を垂らしたまま笑顔を作って「あらお久しぶり、トンボさん！」と叫んだ。

「本当にお久しぶりですね」と僕は苦笑いした。「覚えていてくれて幸いです」

「忘れやしないわよ、相変わらず掛けているのね、そのへんなトンボ眼鏡のサングラス！」

眼鏡で覚えられているのもどうかと思うが、まあ仕方がない。僕は肩を軽くすくめ、件の眼鏡のブリッジ部を眉間近くまで押し上げてみせた。

「例によって、芥子をつけすぎたわけですか」

「涙が出るくらいには効かせないと、食べた氣にやならないのよ」お夏ちゃんは涙をぬぐう事なく麺を吸り、ついでに鼻もすすり上げる。

「相変わらずね」赤茶毛さんが、テレビを眺めたままでそう言った。小さな四角い画面の中に映るのは、昼下がりの平和な番組、新型の布団乾燥機がお値打ち価格で紹介されている。テレビの傍らでは、大きな扇風機が一心不乱に首を振っている。その風は赤茶毛さんで遮られて、お夏ちゃんの席までは届いていない。

「まったく相変わらずですね」僕はお夏ちゃんの前に座り、回肉鍋を注文する。そしてお夏ちゃんを見やり、一息つく。水玉模様のハンカチを頭に巻き、魚の骨のイラストがプリントしてあるTシャツ、破れだらけのジーンズを身にまとい、ヒッピーが好みそうな赤いビーズ細工を首から下げ、小麦色の健康そのものの肌に珠のような汗を浮かべ、そして猛烈な勢いで涙をこぼしながら冷やし中華を食べているお夏ちゃん。

「何よ」と、僕の視線に気づいたお夏ちゃん。

「いえ、別に」そう言っ僕は思わず笑ってしまう。それにっられて赤茶毛さんも、小さなクシヤミのような笑い声を漏らした。

「それにしてもまた、突然戻って来るもんですから吃驚しましたよ」

「突然じゃなくて必然よ」誇らしげなお夏ちゃん。「この店が冷やし中華始めりや、すぐに帰って

来て、一番に食べるってだけの事よ」

「それにしても、どこ行つてたのやら」テレビを眺めたまま、赤茶毛さんが言う。

「色んなところよ」とお夏ちゃん。とうとう冷やし中華を食べ終えて、おしぼりで豪快に顔を拭っている。化粧が落ちやしないか心配になるが、おそらく化粧はしていないのだろう。「私だって忙しく生きているんだからね」

「ウイッス」と声がして、誰か店に入つて来た。不自然に日焼けした醤油顔に輝く、似合いもしない鼻ピアスが痛々しい奴——大学の後輩のヤマダだった。

「おや、お夏ちゃん」ヤマダはにやにや笑い顔を浮かべる。「やつぱり帰つて来てたんすか」

(2)

お夏ちゃんはサムラ軒が冷やし中華を始めると、決まつてすぐにこの町へ帰つて来る。そして、そのままひと夏をこの町で過ごす。何をするでもなくのんびんだらりと昼寝をしたり、極端に客足の少ない町内会の祭りに行ったり、可笑しなぐらい下手くそなくせにサーフィンに興じたり——この、いやになるほどに紫外線にまみれた季節を、十二分に満喫するのである。

しかしセミの屍骸を残して夏が通り過ぎて行き、かわつて秋が来ると、彼女はぷいと町を出て行つて、それっきり音信不通になつてしまう。彼女が何処に行つてしまうのかは、誰も知らないのである。そして彼女は白昼夢のような記憶の断片となつて、この町に残された僕らの中に貼りついてしまう。

やがて時は巡り、秋が冬になり、冬が春になり、春が夏になる。そしてサムラ軒がまた冷やし中華を始めると、秋口からの数ヶ月間の不在をまるで「無かつた事」にしてしまうような顔をして、彼女は颯爽と戻つて来るわけだ。彼女が何処から戻つてくるのかは、誰も知らないのである。

さて、そんな訳でお夏ちゃんは今年も無事に帰つて来たものの、この町に家があるわけでもない。去年まで彼女は、街はずれにある商人宿「ほろよい館」にただ同然の代金で泊めてもらつていた。なんでもお夏ちゃんは、「ほろよい館」を一人で切り盛りしている女将と昔馴染みなのだという。しかし、件の女将が今年の春に忽然と町から姿を消して、よく事情の分らないままに宿は閉まつてしまったのである。駆け落ちだろう、夜逃げだろう、様々な憶測が飛び交つたが、本当の処は誰も知らないのである。(さすがのお夏ちゃんも少なからず衝撃を受けていたようだ)

結局彼女は、赤茶毛さんの元に居候する事になった。別にかまわないけど、と赤茶毛さんは言い、それなりに快く了承したのであった。

こうして、お夏ちゃんの居候生活が始まつた。

赤茶毛さんの部屋は、物が少ないからさほど散らかっているようには見えないものの、『生活』というものを投げ出してしまった態度」が横溢している部屋であつた。時たま暇を持て余した僕もその部屋を訪れ、そしてヤマダも折に触れて遊びに来た。しかし、『生活』というものを投げ出してしまった態度」が横溢した狭苦しい部屋に三人も四人も人間が詰め込まれるとなると、当然ながらその暑苦しさは言語も想像も絶したものになるのである。おんぼろなクーラーは明らかに力不足で、ヤマダがわざわざ持参した扇風機は空しく首を振り続けるだけであつた。「窓開けましょう窓」、せわしなく団扇を使いつつ、ヤマダは窓を開け放つた。途端に、胸が悪くなるような空気が押し寄せて来る。「閉める、窓、閉める」と僕は喚く。

「夏だねえ」お夏ちゃんはそう言って、さつきから死んだエビのような体勢で横たわっている赤茶毛さんの背中を小突いた。「ねえ、生きてるの？まるで死んでるみたいに見えるよ」赤茶毛さんは煩げに体をねじったつきり、また動かなくなった。

「こんな季節に死んじゃったら、すぐに腐っちゃうよ！」ヤマダがそう叫んだ。悪趣味な事を言うやつである。「腐りたくないから、アイスちょうだい」赤茶毛さんの、無愛想な声が床の上を転がって行つた。ヤマダは心得たとばかりに立ち上がり、台所からチョコアイスキャンデーを一本調達して来る。赤茶毛並さんはその凍てついた菓子を、やっぱり死体のような姿勢のままで齧り始めるのであつた。

「俺にも一本頼むわ」と僕。「すみません、さつき赤茶毛さんにあげたので終わりです」とヤマダは団扇を拾い上げながら言つた。それを聞いた赤茶毛さん、食べさしのキャンデーを僕の鼻先に突き出してきた。「いや、やっぱりいいよ」と僕は言い、赤茶毛さんに倣って死体のように床に寝転んでみる。「暑いねえ」とお夏ちゃんが、わかりきつた事を言う。クマゼミの絶叫が耳に痛い、いくら夏と言えども少々暑すぎる午後の事であつた。

死体ごっこを続ける僕の視線の先にはお夏ちゃんが座り込んでいて、彼女は分厚いノートを床の上に開けて何事か文章を書き綴つていた。「お夏ちゃん、何やってるんですか」と僕。

「絵日記書いてるの」お夏ちゃんは、汗まみれの涼しげな顔でそう言つた。「日々の記録を付ける事は、規則正しい生活習慣を送るためのいい方法なのよ。夏になるとどうしてもだらけてしまうからねえ」

溶けたアイスクリームみたいに過ぎしながら、『規則正しい生活シュールカン』も何もあつたものではないのでは——とは思つたものの、僕は「へえ、ちょっとだけ見せてくださいよ」と言つて戯れに手を伸ばしてみた。するとお夏ちゃんは予想に反し、あっさりとそのノートを僕に手渡した。そしてカラカラと笑いながら「好きだけ見たっていいわよ。見られてもいいように、難しい文字で書いているから」

確かに、開いたページを覆いつくしているのは判読不可能な文字ばかりであつた。そう言えば、インド哲学科の友人が持っていたノートに、こういう文字が整列していたような気がしないでもない。「サンスクリット語ですか？それともチベット語？」

「まあそんなところね」お夏ちゃんはそう言つて、澄ました顔でいるのである。

しかもその判読不能な文字で書かれた文章に添えられている絵は、抽象画なのである。不気味に歪められた丸や四角、三角が絡み合い、これは何か重大な事を象徴しているか、そうでなければ全くのデタラメに違いはないと思わせるに足る芸術作品であつた。しかし果たしてこのノートは絵日記と呼べるのだろうか——？

「なんだかこういう日記帳、前にもいっぺん見た事がある気がする……」ヤマダがノートを覗き込んで言つた。「そりゃ、毎年つけてる日記だもの。そっか、トンボ眼鏡さんには今まで見せた事なかったかぁ」とお夏ちゃん。それにしても、こんなものを毎年つけているなんて、俄かには信じ難い話である。

「読める日記をご所望？」お夏ちゃんはイタズラっぽい笑みを浮かべて言つた。「それならこつちを読みなさい」

手渡されたノートを開いてみれば、左ページには花のスケッチが描いてあり、右ページにはその日の日付、天気、気温、「特に変化はなかった」といったどうでもいいメモが殴り書かれていた。

「ああ、この帳面には見覚えがありますよ」僕は笑った。確か去年も、一昨年もお夏ちゃんはこの帳面を使っていたはずだ。

「朝顔の観察日記ですね」

「正解」お夏ちゃんは窓の外を指差した。「ベランダ見てごらん」

確かに、ベランダには朝顔を植えた鉢が置かれていた。もう昼過ぎなので、その植物はただ傘のような要領でかたくなに花弁を閉じてしまっていた。これは元々赤茶毛さんが育てていたものなのだろうか、それともお夏ちゃんが持参したものだろうか。

「これも、『規則正しい生活習慣』のためですか」

「まあ、そう言う事ね」とお夏ちゃんは言った。

そしてまた僕は、申し合わせたかのように黙り込むのである。静まり返った空気の中、部屋の隅に転がっているラジオから他愛も無い歌謡曲の番組が流れて来た。一度耳にした事はあるものの、どうしてもその題名を思い出せない歌を、ラジオは次から次へと歌っていた。胸の中でハミングしながら、ああ遣る瀬無い、と僕は思うのであった。

夏は確かに素晴らしい。しかし、その幸福な季節は気温も湿度も不快指数もあまりに高過ぎ、その上あまりに長く続き過ぎるのである。そして長く続き過ぎる割には、あつという間に終わってしまう。いつもいつも思うのである、サムラ軒が冷やし中華を始める頃には、「ああまた夏が来たか、よし、今年の夏はあれをしよう、これもしよう」と。そして、お夏ちゃんが居なくなる頃には決まって「あれやこれをするどころか、何一ツ手につかなかった。何でだろう、時間つてのは十分にある時も、足りない時も、どっちにしろ、何かをやり遂げるのに必要なだけの余裕を与えてはくれないものだ」と。ああ、そんな事はともかく、さつきからずっと僕はアイスキヤンデーが食べたくて堪らないのである。僕はヤマダの阿呆を金輪際許さない積もりだ。

「そうだ！」静寂を打ち破り、お夏ちゃんが叫んだ。

「今晚ね、鍋パーティーやろうよ」

「鍋………つすか？」ヤマダが心底不思議そうな声で問い返した。

「そう。何故か、突然食べたくなったのよ、お鍋」そして立ち上がって、虚脱した残りの人間たちを見回しながら「三人以上集まったら、そりやあもう鍋が始まるのが当然の事でしよう」

「このくそ暑い時に？」さすがにあきれ果てて、僕はそう尋ねた。

「そうよ。昔からよく言うじゃない、ほら、えーっと、『暑い時には熱いもの』ってや」

「そう言えば、田舎の婆ちゃんがそんな事を言ってた気がする………」ヤマダが空ろな目でそう呟いていた。彼は存外に暑さに弱いようだった。

「まあ、いいんじゃない、鍋」死体に成り切っている赤茶毛さんが、ぼそりとそう言った。

「じゃあ、決まりね！」

決まってしまった。僕とヤマダは顔を見合わせた。もうどうにでもなればいいんだ、と僕は思った——おそろくヤマダも。

「じゃあ赤茶毛ちゃん、私後で買出しに行くから、いっしょについてきてくれな——」そう言いながらお夏ちゃんは赤茶毛さんの方に向き直った。すると、赤茶毛さんはいつの間にか判読不能の絵日記を手にとって、一生懸命読み耽っていたのである。

「ちよつと赤茶毛ちゃん、まさかその文字が読めるんじゃないだろうね」とお夏ちゃんは少し動揺したらしき声で問うた。

「読めやしないよ」すました声で赤茶毛さんは答えた。「だから、読んでいて飽きないね」僕とお夏ちゃんは顔を見合わせた。

(3)

近所の小学校が校庭を開放して開催する、町内会の夏祭りの日がやって来た。しかしこれが全くもって締まりのない、盛り上がりには欠ける祭りなのである。

本来祭りというものは盛り上がりてこそ祭りなのであり、盛り上がるべきものが盛り上がりがないというのは、実にやる瀬ない状態なのであった。たくさん屋台が出るわけでなし、歌手だの芸人だの有名人がやって来るでもなし、それ以前に、運営者たち自身にやる気があるでもなし――。

そもそもこの祭りは、伝統と格式のある祭りではないのである。戦後になってから適当に始められた、歴史の浅い（無い、とも言う）催しごとに過ぎない。年々参加者は減少してゆく一方であり、しかも数年後には会場となっている小学校が学校統合のため廃校になる予定で、それを機にこの祭りは無くなってしまうだろうというのが一般的な見方であった。しかしこの付近の住民たちは皆、同日に隣町の川辺で開催されている花火大会（こちらは立派に盛り上がりつつある）に行ってしまうので、別に自分の町の祭りがなくなろうがどう成ろうが、一向にかまわない、そもそも僕らには最初から何も関係がない、という風情なのであった。そして僕もまたそんな風情でいる人間の内の一人であつたわけだ。

しかし、お夏ちゃんはどういう訳だかこのしょぼくれた祭りをこよなく愛していたのである。何が彼女の心を捉えていたのかは分らない。理解しがたい。しかし彼女は毎年のようにその祭に足を運んでいた。そして今宵もお夏ちゃんは赤茶毛さんに浴衣の着付けをしてもらつて、真夏の夜の祭りへ意気揚揚と出かけて行つたのであった。

僕もどうせ暇だつたし（僕はやらなければいけない事は山のように抱えていながら、どういうわけだかいつでも暇なのである）、隣町の花火大会に行くつもりもなかったので（あの混雑、人の海、充満したわきがの臭い、身を寄せ合う目障りなカップルども、うんざりする！）、彼女のお伴をする事にして、空豆のようなにおいが染み着いたゴム草履をひっかけ出発した。

赤茶毛さんと言うと、お夏ちゃんに浴衣を着せ終わると、「お祭りのある夜は、いつもよりも早く眠くなるのよね」と言い残して毛布にくるまり、本当に寝息を立て始めてしまった。陰気な奴、と思った。ヤマダは、案の定、友人と連れ立って隣町の花火大会に行ってしまったのである。軽薄な奴、と思った。

それにしても、本当にどうしようもないみたいだ――僕は小学校の正門の前に立ち尽くし、砂漠の真ん中のような情景を黙りこくつて眺めていた。そもそも、祭りとは神様を囲んで行う人たちの営みであるはずなのに、この場にいる人間の数はあまりに少な過ぎるのであった。親子連れが一组。露店は、焼きりんご屋が一店と、プラスチックのちやちな玩具を売る屋台が一店、計二店のみ。そして校庭の真ん中に建てられた櫓（ちよつと風が吹けばすぐに倒れてしまいそうな櫓だつた）にもたれて座り込み、缶ビールを呷っている血色の悪い中年男が一人、彼の腹は月まで届けとばかりに突き出していた。それから――僕と、お夏ちゃん。

「閑散としてるねえ！」お夏ちゃんが弾んだ声で言った。

「さて、どうしますかねえ」途方にきれながら、僕はそう尋ねた。

「取りあえず露店でも冷やかそっか」袂をくるくると回して遊びながら、お夏ちゃんはまたで歩き始めた。

「ま、と言つても、二店しか出てないですけどね」

というわけで、二人して焼きりんごを購入し、校庭の隅に生えている鉄棒にもたれてしゃがみこんだ。焼きりんご屋の親仁——親仁というには少し若すぎるようにも見える、虎刈りの小ぢんまりとしたあんちゃん——は、僕らの目を見ないようにしながら、その甘ったるい匂いを放つ食べ物を渡してくれた。それはそれは居たたまれなかったものだ、お互いに。もう止めようぜ、こんな事！そう叫びたかった。そして、叫んだ、心の奥底、誰の手も届かない場所で。

ところで、正直に言つて僕は焼きりんごはさほど好きではないのである。しかし、涼しさをほんの少しだけ含んだ夜風に吹かれ、この場にそぐわない陽気な盆踊りの音楽をBGMとして、居たたまれなさ、やる瀬なさと一緒に噛みしめる焼きりんごの味は、なかなか乙なものであった。べとつく独特の甘さを持つタレがこぼれぬように、僕は慎重な手つきでりんごを食べ続けた。

と、そんな僕とお夏ちゃんの頭の上、はるか上空に大きな花火が打ち上った。花火は軽快な爆発音とともに無数の曲線を一瞬だけ空の上に描き殴り、速やかにかき消すようになくなってしまった。深い紺色のような空つてのは、火で絵を描く時にはうつつけのカンバスになるものだな、と僕は思った。

「まあ、キレイ！」甘ったるい焼きりんごのタレを顔中にくつつけて、お夏ちゃんは歓声を上げた。「この寒々しいお祭りにも、ステキな瞬間があるもんだね！」

「あれは隣町の花火大会の花火ですよ」と僕。

「いいじゃない。ここからでもよく見えてるんだし」お夏ちゃんは、屈託の無い笑顔を見せて言う。

「どうせなら、花火大会の方に行けばよかったんじゃないですか？こんなところで見てるより」
「ここで見ても同じ事よ、おんなじ花火よ」そう言つてお夏ちゃんは大きく口を開け、りんごの最後の一欠けらを放り込んだ。確かにそうかもしれない、ここで見ても、同じ花火だ。僕は肩をすくめ、彼女の真似をして大口を開けてりんごを食べようとしたのだが、その最後の一欠けらは串の先からヌリと落下し、砂にまみれてしまった。さすが、ニュートンによる万有引力の法則の発見以来、りんごほど「落下」が似合う果物は他にはないのである。

そんな僕たちよりも、もっと切なそうな様子でこの混迷の地に佇んでいるのは、何の間違いかこんな処に来てしまった親子連れであった。三人の子どもを連れた母親はおそらくかつては美人と呼ばれた事もあったのであろう、しかし今となつてはその整った顔立ちも痛々しいばかりである。安い美容院でパーマを当てたくしゃくしゃの髪の毛は、使い古してほつれたマフラーの端っこのように（くしゃくしゃの髪の毛と言えば赤茶毛さんがその道の権威だが、方向性はまったく異なっている）、日々の暮らしの重たさが刻み込んでいった小皺、竹ひごのように細身の脚が二本、よれよれのTシャツを身にまとい、戸惑つたように——いや、「ように」ではなく、本当に戸惑つて辺りを見回している。その一定しない視線は、時折僕やお夏ちゃんにぶつかる事もあったが、そんな時彼女は光の速さで目を逸らしてしまうのであった。それに釣られて、僕も何故か眼を伏せてしまうのだった。お夏ちゃんはと言うと、全く何も気にしていない風情であった。

そのものの悲しい婦人が引き連れている、三人の子供たち——そのうち二人は、母親の周りにま

とわりつき、戸惑ってばかりの彼女を押しくら饅頭の要領で揺さぶっている。だが、どうやら二人とも別の理由から彼女を揺さぶっているようだ。一人は、屋台で売っているプラスチックのおもちやを買ってくれとせがんでいる。彼にとつては、テレビ番組に出てくる英雄たちの武器やロボットを模したちやちなガラクタが、この上なく意味あるものに見えるのであるう（僕もかつてそうだった）。母さん、何か一つくらい買ってやれよ、僕はそう思いながら事の成り行きを見守っていたのだが、彼女はゆらゆらと揺さぶられているばかりで、彼の要求は受け入れられそうもなかった。それでもう一人の子は、この異様に閑散としている空間に連れ出された事で、おびえ切っているようであった。彼はこの場に溶けこめず、と言うよりか、溶けこむまいとして、母親の手を死んでも離すまいとばかりに握りしめていた。母さん、いつまでその手を握っていてくれるのかな、と僕は思った。

その二人が母親にまわりついているところから少し離れて、おそらく一番年上なのであろう、あどけない顔に老人くさい表情を浮かべて無然としている少年が一人、ぼつんと立っている。将来哲学者にでもなるのだろうか、彼は覚えたてのニヒリズムでもって世界と向き合っているかのように見えた。誰しもそんな風に世界と向き合う時期があるものである。一瞬目が合ったが、僕は方をすくめ、彼は目をそらした。

そんな風にしてぼんやりと子供らの様子を眺めているうちに、どういうわけか奇妙なノスタルジーが僕の内部で頭をもたげて来たのである。

「僕らにも、あんな頃がありましたね」僕はお夏ちゃんにそう言いながら、三者三様の顔付きでいる子供たちを指差した。

「そうねえ。誰だって昔は子供だったものね」と、お夏ちゃん。

「なんか、懐かしい気分になりますね」

「そうねえ。」と、お夏ちゃん。「まあ、私は子供時代なんて二度とごめんだけどね」

頭をもたげていた奇妙なノスタルジーは粉碎され、僕は沈黙した。

「子供の時、なぜだかお祭りって苦手だったわ」とお夏ちゃんは、指先についた焼きりんごのタレをねぶりながら言った。

「そりゃあお祭りなんだから、気分が盛り上がるわよ。着慣れない浴衣を着せてもらって、履きなれない草履を履いて一目散に会場へ行ったものよ。その時の高揚感たらなかったわよ。でもね、そんな風に気分が高揚するとすぐに、しょうむない事が頭に浮かんで来ちゃうのよね。『ああ、お祭りが終わった後には、きつとすごく寂しくて悲しい気分になっちゃうんだろうな』だとか『そう言えば夏休みの宿題、手付かずのものが沢山残ってる。自由研究もドリルもまだ終わってないそれなのに私はお祭りに行こうとしてるんだ』だとか、そんな事を次から次へと考えちゃって、結局暗い気分になっちゃって。それでもって、周りのみんなはと言うと、心底楽しそうな様子でお祭りを満喫しているのよ。その中で私一人だけ盛り下がっている、そう思うと憂鬱の度合いも倍増したわ。わたしはそう言う、陰気で嫌らしい子供だったわ」

「僕も似たような子供でしたよ」苦笑いして、僕はそう言った。

「だから二人揃って、こんなしょぼくれたお祭りに来てるってわけね」

お夏ちゃんはそう言って夜空に目をやった。年増の娼婦の化粧のようにけばけばしい花火が、節操なく暴れ狂っていた。

と、僕はふいに肩を「トントン」と叩かれた。振り返ると、たいそう立派な腹を突き出してい

る、そしてその腹以外には立派な部分の見当たらない、血色の悪い中年男が立っていた。櫓の下に座り込んで、ビールを飲んでいた男である。顔にこそ酔いが出ていないものの、完全に出来上がっているらしい風情の彼は、両手に缶ビールを握っていた。

「なあ」アルコール度数の高い息を吐きながら、彼は僕らに話し掛けて来た。「あんたらも飲むか？」そして、手に持っていた缶ビールを僕らに手渡した。

「ああ、ありがとうございます！」とお夏ちゃんは言い、僕も深く会釈をした。

中年男はビールを渡すとすぐに回れ右して、歩き去って行った。ビール樽がビールを持ってやって来た、僕は酒をもらって置きながら失礼にもそんな事を考えていた。その哀愁溢れる後姿を見送りながら、「折角ですから一緒に飲みましょう」と言うべきだったかな、と少しだけ思った。

「乾杯！」さっそく景氣のよい音を立てて蓋を開けたお夏ちゃんが、缶を高く掲げて言った。

「乾杯」

缶と缶がぶつかり合った。お夏ちゃんは汗の浮かんだ首筋を豪快に波打たせながら、ビールを胃の中へと思い切り流し込んだ。そしてほのかに酒の匂いのする息を一つ吐き、まじまじと僕の顔を見た。

「何でしょう」と僕は、舌の上に残っているビールの苦味を飲み下しながら言った。

「サングラスしてないのね」おそろしく静かな声で、彼女はそう言った。

「そりやあもう日が暮れていますし、掛けて来ませんでした」僕は苦笑いした。

「何かヘンだと思った」もう酔っ払ったのであろうか、お夏ちゃんは潤んだような目つきをしながら愉快そうに笑った。「いやね、なんかずつとね、貴方の顔いつもと違う、ヘンだなんてずつと思ってたんだ。そっか、サングラス外してるせいかな。」そして勝手に一人で何度も何度も頷きながら、「もう私はあのサングラスを貴方の顔の一部分だと認識してるからね。すっごい違和感あるわよ。まるで首のない人間がヒョコヒョコ歩いているみたいなんよ！」

また花火が上がった。いい加減に飽きてきた、たまには別のものを空に向かって上げてみればいいのに。

「よし」突然、お夏ちゃんが立ち上がった。「そろそろ、踊りに行くわよ！」

「ええ？」と、僕は間抜けな声を出して戸惑いを表現した。「本気ですか？確かにさっきから盆踊りの音楽は流れてますけど、踊っている人は誰もいませんよ」

「だから、踊りに行ってやるのよ」お夏ちゃんは満面の笑顔でそう言った。「誰も踊っていないお祭りなんて、どうしようもないじゃない！」そして、僕の肩をぱたぱたと叩き、「さ、行きましよ」

「いや、僕はちよつと・・・」及び腰で、僕はそう答える。

「なんだ、恥ずかしいの？」お夏ちゃんは目を丸くして尋ねる。

「まあ」僕はお茶を濁す。

「まったく、意気地がないんだから」そう言って、お夏ちゃんは櫓の方へ歩いて行った。「まあ見ときなさい。私、踊りはわりに得意なんだから！」

そう言えば彼女、去年は二、三人の客に混じって踊っていたわけ——と僕は何となく記憶の断片を探ってみた。それが今年はいよいよ、彼女一人だけになったか。

お夏ちゃんは櫓の周りをゆつくりと回りながら、恍惚とした表情を浮かべて踊り続けた。時折打ちあがる花火が、彼女をみすばらしくライトアップしていた。楽しげで無邪気な盆踊りの音楽が、ためらいがちにスピーカーからこぼれ落ちて来る。もの悲しい母親は呆氣に取られた顔をし

て、その酔っ払いの踊り子を眺めている。しかしお夏ちゃんは何を気にするでもなく、たった一人でくるくると踊り続け、僕はそれを見守りながら静かにビールを飲んでいたのである。

(4)

「ところで今年の夏は、どうも危ないらしいですよ」

サムラ軒にて、ヤマダが春雨サラダをつるつると飲み込みながら言った。

「どうした？悪い女の子にでも引っかけかかったか？」

「そんなの、願ったり叶ったりですよ——」とヤマダ。「もつとヤバい事です、地球規模の」

「地球規模？」僕はしばらく首をひねり、そしてハタと思い当たった。「ああ、この前テレビでやってたアレの事だろ」

「そうです、アレです」

「何の事？」一心不乱に骨付きの唐揚げを齧っていたお夏ちゃんが、口の周りを脂でぴかぴかに光らせながら顔を上げた。

「予言つすよ、予言」と、ヤマダ。「何でも、今年の夏に天変地異が起こって、人類が滅亡しちゃうとか——」

「その予言をしたのは、最近よく話題になっている超能力者ですね。〇〇地震や、××地震を予知したって主張しているイカサマ師で」僕は苦笑いして言った。「この前来日して、テレビで特番が組まれたんですよ。そうしたら結構な視聴率で、テレビ局には問い合わせが殺到したらしいんですよ、『本当に人類は滅亡するの？』って。ちよつとした社会現象になったんですよ」

「またよく出来てたんだよね、その番組が」とヤマダ。「最初から『こんな番組は全部ウソッパチだ』と否定的に見えていても、しまいには何となく『案外、本当かもしれない』なんて思えてしまうくらい——」

「いや、それはお前が騙されやすいだけだよ」僕は笑った。「そうですか？」とヤマダは不満そうな顔付きでいる。

「そう言えば私もその予言、聞いた事がある」と赤茶毛さん。「この前来たお客さんが言ってたよ。その人は完全に信じてたね、夏の間はアメリカに避難するって言ってた」

「日本滅亡ならともかく、人類滅亡だったらアメリカに逃げてもアウトなんじゃないの？」

「ま、そうだよ」と僕は苦笑いをした。

「なんだか、一九九九年七月を思い出すわね」鶏の骨をしゃぶりながら、お夏ちゃんが言った。

「そう言や、そんな予言もありましたね」僕はノスタルジーすら感じていた。

結局、恐怖の大王は空から降りて来なかったのである——わざわざ空から降りて来なくとも、地上にはすでに十分過ぎるほど多くの恐怖の大王がひしめいているのだ。過去、現在、そしておそらく未来を通じて。

「本当に滅亡するのか」とお夏ちゃん。

「どうせ、一九九九年七月と同じパターンですよ」と僕。「散々騒いで、何にも起らないだけですって」

「ふうん」お夏ちゃんはおしぼりで手を拭いながら、ため息をついた。

「何だお夏ちゃん、信じてるんすか？」からかうような声で、ヤマダが言った。

「詐欺師の言う事は信じないよ」お夏ちゃんはそう言った。「たぶん世界の終わりは、終わった事に誰も気づかないぐらい、何気なく訪れるはずよ。それは食べ残したアイスクリームがひっそりと溶けるみたいに、何気なく訪れると思うわ。そんなことが詐欺師たちに、わかってたまるか」

「ま、そんな事より、明後日の海行きの事を話しましょ」とヤマダは言った。

「さて、お夏ちゃんは今年もサーフィンにトライしてみるんですか？」

「あたぼうよ」そう言ってお夏ちゃんは笑い顔を見せた。

一九九九年に生きるぼく

バイパスの上で眠ってた

一九九九年の夏を待つ

こわれた街はまるでキャンディーボックス

大王が来るぞと誰か言った

流線型に日が暮れてゆくのに

ひとつおとりなさいご婦人方

夕暮れ色のキャンディーですよ

一九九九年に生きるきみ

貝殻で海の水をすくってる

一九九九年の七月は

住み慣れた小屋にペンキをぬっていた

フィードバックの音が聞こえて

ライブハウスが停電した

この有刺鉄線解きほぐして

間違えた答え全部そのままにして

それは暑い夏だった

世界が終わってしまう夜

ラジオで誰かが歌ってたっけ

こんな暑い日だから帰ってきてくれよ

こんな暑い日だから帰ってきてくれよ

こんな暑い日だから帰ってきてくれよ

こんな暑い日だから・・・・・・

一九九九年七月に生きるぼく

誰も立ち止まりやしなかった

一九九九年七月に生きるぼく
住み慣れた小屋で目が覚めて
一九九九年七月に生きるきみ
あんなに瞬いてた星の屑
一九九九年七月に生きるきみ
くるまの走る音だけ聞こえてた

(5)

大きな波が来た。おっかなびっくり、喜劇役者のポーズのようなへっぴり腰のままでボードの上に立とうと奮闘していたお夏ちゃんは、ひとたまりも無く海中に没した。数秒後、顔を濡れた髪の毛で覆いつくした、まるで昆布のバケモノのごとき状態で浮かんで来て、必死に息を吸おうとするお夏ちゃんの上に、また新しい波が被さって来た。何度顔を水面に出しても、その瞬間を見事に捉えて波が迫り来るのである。ヤマダはボードの上に乗って巧みに波を乗りこなし、お夏ちゃんの狼狽振りに大爆笑していた。お夏ちゃんは藻掻くのに精一杯で、ヤマダの無礼に怒る余裕すら無いのであった。

お夏ちゃんは例年この海水浴場に来てはサーフィンに挑戦しているのだが、ちっとも上達しないのだった。一昨年からはヤマダがコーチを務めているのだが、この有様なのである。街の小さな海水浴場、人手もそこまでは多くなく、のんびりと海を楽しむのには絶好の場所において、お夏ちゃんは水の上で転倒を繰り返し、波にどつき回され、そしてヤマダに笑われるのであった。

僕と赤茶毛さんは海の家の中へ引き籠もり、笑い転げるヤマダと、波間をたゆたっている物凄いい形相のお夏ちゃんを眺めていた。

「元気ね」赤茶毛さんは、海水浴場には似合わない生白い顔でそう言った。そして、安物の焼き蕎麦を啜り込んだ。焼き蕎麦の麺は赤茶けて縮れていて、彼女の髪の毛にそっくりであった。共食い、という言葉が僕の脳裏に浮かんた。

「まったく」僕も生白い顔で同意し、不味いラーメンを啜り込んだ。哀しい味がした。

「ちよっとお、赤茶毛さあん、トンボさあん」ヤマダの間抜けな声が響いて来た。「そんなところでだべっていないで、こっち来て下さいよ！せっかく海に来たんだから、もっと遊びましょう！」

「申し訳ないが、俺は太陽光線が極端に苦手なもんで」そういつて僕は、サングラスを押し上げてみせた。

「私、カナヅチ」と、赤茶毛さんは簡潔に返答する。そして我関せずといった様子で、大口を開けて焼き蕎麦を食べている。そんな彼女が一瞬、自分の髪の毛を啜り込んでいるように見え、僕は思わず目をしばたいた。

「仕方ない人たちだなあ」ヤマダはにやにや笑ったまま、両手を広げて見せる。「せっかくの海だつてのに！」そして鮮やかな身のこなしでボードに乗ると、沖に向かって海の上を勢いよく滑り始めた。お夏ちゃんも負けじと後を追おうと試みたものの、またしても波に阻まれて、人魚姫の

ように海の中へ消えて行ったのであった。

「それにしても、ヤマダさん今日は絶好調ね」赤茶毛さんが言った。

「まったく。海水浴に行くと、あいつの独断場になるのさ」と僕。

「ホント」そう言って赤茶毛さんはまた自分の髪の毛を、もとい、焼き蕎麦を啜り込む。

「あいつは人類よりも魚類に近い生物だな」と僕は笑った。

「人類が滅亡しても——」と赤茶毛さん。「魚類は残るのかな」

「わからないけど、出来ればそうあってほしいね」と僕は答え、ラーメンの汁を飲み干した。哀しい味だった。

ヤマダは猛り狂った波をもとせず、まるで公園でスキップをしているような何気ない動きで水面を滑っていた。今更ながら、僕は彼のサーフィンの腕前に舌を巻いたものである。「水を得た魚」とは正にこの事だな、別に彼を魚類に仕立て上げようとしているわけではないのだが、僕はそんな慣用句を心に思い浮かべていた。こんなに生き生きとしているヤマダを見るのは、久しぶりの事である気がした。あいつ、文学部の学生なんて性に合わない事は止めちまって、海を拠点に生きる人生設計を立てたらいいのに、と僕は半ば本気で考えていた。

しばらくして、お夏ちゃんが海から戻って来た。

「やっぱり難しいものね。全然出来ないや」

お夏ちゃんは、苦笑いを浮かべてそう言った。そして彼女は赤茶毛さんの隣に座り、生ビールを注文した。

「去年に比べて上達したように見える？」

「さあ、どうでしょう」と僕は苦笑いした。しかし彼女は別に僕の答えなどには興味がない様子で、小脇に抱えていたボードにしきりに目をやっている。

「どうしたんですか」

「何か張り付いている」そう言ってお夏ちゃんはボードから何かをはがし、テーブルの上に置いた。

見ると、それは小さなヒトデであった。

「ヒトデだ」と赤茶毛さんは言い、興味深そうに覗き込んだ。ヒトデは擬態でもしていたのか、縁の部分が黒く染まっていて、中心部分の赤い色が一層際立って見えた。

「ホント、ヒトデだわ」とお夏ちゃん。「いつの間にくっついたのかしら」そして感に堪えぬと言った様子で「私も、こういう吸盤能力を足の裏にでも持ったら、もっと上手にサーフィンが出来るようになってるだろうに」

砂浜には色とりどりのパラソルが立ち並び、砂の上に寝そべる者、砂の中に埋もれる者、それぞれがそれぞれのやり方でのん気に楽しんでいるようだった。ヤマダは相変わらず海の上で、波を乗りこなしては満足げな顔付きでいる。そして僕は空っぽになったラーメンの丼の中を覗き込んで見た。どんなに不味いラーメンであろうと、食べ終えてみればその丼の中には一抹の寂しさが漂っているものと思った。

程なくして、ビールが運ばれて来た。お夏ちゃんはビールを一気に飲み干すと、ヒトデを手にとって、つると食べてしまった。

呆気に取られている僕に向かって、

「意外にかたいわ。スルメってか、ゴムみたい」お夏ちゃんはヒトデを咀嚼しながら、そう言い

放った。そのまま彼女は口をもぐもぐさせながら、また海へ歩き去って行ったのである。

「まあ、ガム噛んでいるようなもんでしよう」と赤茶毛さんは言ったが、いや、そうではないだろう、と凡人たる僕は思ってしまう。

その夜、僕は恐ろしい夢を見た。夢の中には、自分の髪の毛をずると食べている赤茶毛さんと、バケモノのように巨大なヒトデを齧っているお夏ちゃんが出て来たのである。夏にお似合いと言えはお似合いの怪奇的な幻影であつたが、冷や汗で体が冷えるわけでもなく、ただでさえ寝苦しい夜が余計に寝苦しくなっただけであつた。

(6)

神社は木立に囲まれていた。暦の上では秋になったというのに、相変わらず日差しは強く、蟬たちはあらん限りの大声を張り上げていた。まだ夏なんだな、と僕は思った。しかし、青く生い茂った木々のあちこちで声を張り上げている蟬がいる一方で、参道のあちこちに落下したまま動かなくなっている蟬もその数を増やしつつあり、着実に季節は変わりつつあるようであつた。

「神社って静かね」とお夏ちゃんが言った。

「ええ。蟬の声を除いてはね」と僕は答えた。

「岩に染み入る、蟬の声」と赤茶毛さんが独り言のように呟いた。

蟬の屍骸と一口に言っても、様々なヴァリエーションがある。ある者は裏返り、脚をきっちり折りたたみ皺だらけの腹部を見せて逝去している。またある者は低空飛行をしながら地面に突っ込んでしまったのだろうか、不自然に羽根を開いたまま、出鱈目な方向に脚を突き出して活動停止している。しかしまるで干物のように乾燥し切っているのは、それら全ての屍骸に共通している特徴であつた。一度強い風が吹いたならば、ぱらぱらと崩れ落ちて消えてしまいそうな、そんな様子だった。

お夏ちゃんは敷石の上にしゃがみこんでいる。赤茶毛さんは木立の中をふらふらと歩き回っている。僕は鳥居の横に佇んで、そんな二人を眺めている。特にする事もない休日だったので、三人揃って近所の神社に来てみたのである。涼やかな神社の中には、一足早く訪れた秋の空気と、まだそこに留まっている夏の空気が混在しているように思えた。もう夏も終わるんだな、と僕は感じた。

「もう夏も終わりねえ」とお夏ちゃんが呟いた。

「そうですね」と僕は、鳥居の上に石くれを乗せようとしながら答えた。

「今年の夏も、何にも出来ないままで終わった気がするな」

「色々遊べたじゃないですか」と僕。「祭りにも行っだし、海にも行っだし」

「今年も結局、サーフィンが出来るようにならなかったし」お夏ちゃんはそう言って、僕が鳥居に乗せ損ねて落とした石を拾い上げた。「今年こそ、出来るようになるかもしれないって思ってたんだけど」

「また、来年練習すればいいでしょう」と僕。「ヤマダは懲りずに付き合ってくださいよ」

「来年はもう行かないかもね」お夏ちゃんはそう言って石を投げ上げた。石は鳥居をかすめ、そしてまた落下した。

「去年もそんな事言ってましたよ」僕は苦笑した。「どうせ来年になったら、また海へ行くに決まっていますよ、あなたって人は」

「そうだったっけ」お夏ちゃんにも苦笑が伝染した。

日差しは強いものの、じりじりと肌を焼いてゆくような暑さは無い昼下がりであった。神社の前を、子どもらが駆け抜けていった。その後姿を見送っていると、ふと思いついて

「そう言えば、結局人類は滅亡しなかったですね」そう言っただけ僕は笑った。

「そうねえ」お夏ちゃんも笑った。

そして僕らの間に、沈黙の時間が訪れた。僕は空を見上げた。サングラスを通して見た青空はいつもと同じ、灰色であった。

お夏ちゃんは敷石の上にしやがみこみ、何するでもなく、何を眺めるでもなく膝を抱えている。その時のお夏ちゃんの顔付きを、僕はどこかで見た事があるような気がした。デジャ・ヴではない。確か、赤茶毛さんの部屋で鍋パーティーをやった日の翌朝、彼女は開け放たれた窓の外を眺めながら、こんな顔付きをしていたように思えるのである。

誰もが酔い潰れて眠りに就いた夜が明けた。どんな夜でもいつかは明けるものなのである。僕は布団も、タオルケットの一枚も敷かず堅い床に寝転がっていたせいで、目が覚めると全身が痛んでいた。起きるなりこんな痛みに出くわすとは、今日は厄日だ、と僕は陰鬱な気分になったのである。やがて体中に分散していた痛みは少しずつ引いてゆき、最後に一箇所、頭の痛みだけが残った。ところがその痛みは脳髓の奥深いところに沈み込んだり、一向に消える気配もなかった。そこで僕はようやくと、自分が二日酔いになってしまった事に気づいたのである。

僕は頭を動かさぬよう気をつけながら、枕元に転がっているサングラスを取った。すると、微かにウキスキーのにおいが混じった甘ったるい息が鼻先にかかった。痛みを堪えながらそっと横を見てみると、赤茶毛さんが車海老のような姿勢のまま一心に眠りを貪っていた。その無防備であどけない顔を、僕はしばらくぼんやりと眺めていた。

ふいに、まだ夜の涼しさを留めている心地よい風が吹き込んで来た。窓は大きく開かれ、その傍に早起きの二人組が座り込んでいた。二人は互いに言葉も交わず、目すら合わさず、それぞれがそれぞれの世界の中に入り込んでいるようであった。

ヤマダは微動だにせず、たばこの煙を空に溶かしていた（その空はおそらく青く澄み渡っていたようだが、サングラス越しに見たのでよくわからない）。

そしてお夏ちゃんは片手に一冊のノート——朝顔の観察日記か——を持ち、もう片方の手で頬杖をついて窓の外を眺めていた。その目には何も映っていないようであった。何も喋らず、何をするでもなく、お夏ちゃんはその腕と首筋の輪郭を朝の光に溶かし込んでいた。逆光に揺らめいている彼女が、そのままこの静寂の中に消滅してしまうのではないかと感じすらした。余りに朝が静か過ぎるのであった。

その時、僕はお夏ちゃんを心底美しいと思った。髪の毛は寝癖がついてぐしゃぐしゃだったし、昨夜の狂宴の疲れ故か頬はこけ、目の下には大きな隈が出来ていた。それでも哀しいぐらいに美しいと思った。雲一つない青空を見上げた時のような、限りなく空しさに近い哀しみが僕を貫いて拡散して行った。僕はただじっと、それを受け止めていた。

お夏ちゃんはふいに立ち上がり、ノートを床に放ると変わりにラジオを拾い上げ、部屋を出て

行った。階段を下りて行く音がした。程なくしてアパートの庭から、ラジオ体操のピアノ伴奏が聞こえて来た。

テーブルの上には大量の酒瓶と汚れた皿、食べ切れなかった具料が沈殿している鍋が置き去られていた。そしてベランダには、蓄音機のような朝顔の花が咲き乱れていた。夏だ、と僕は思った。

蝉たちが鳴いている。僕らの影法師はゆっくりと伸びて行った。

僕は鳥居の横に佇んでいた。とうとう一個の石くれも思い通りに乗せられぬままで。

赤茶毛さんは木立の中をふらふらと歩いていた。彼女は樹木にくっついたまま忘れ去られている、蝉の抜け殻を拾い集めていたのであった。

お夏ちゃんは敷石の上にしやがみこみ、何するでもなく、何を眺めるでもなく膝を抱えていた。夏が終わる、と僕は思った。

(7)

新幹線の遅延を知らせるアナウンスが駅の構内に響き渡った。お夏ちゃん是不恰好に膨らんだ巨大なショルダーバッグを肩に掛け、そして手には朝顔の鉢を抱えていた。その出で立ちは、正直に言って間抜けとしか言いようがないものであった。

「何も今日発たなくてもいいのに」ヤマダが呆れ顔で言った。僕と赤茶毛さんもそれに同意した。「いや、私はもう決めちゃったのよ、今日発つてね」とお夏ちゃんは断固とした態度で言った。

「県内のほぼ全域に警報が出てますよ」と僕は携帯の天気情報を見ながら言った。

「そりゃ警報も出るでしょうよ、この雨と風だもの」とお夏ちゃん。それならば出発の日にならずらすなりすればよかったのに、こんなに天候の悪い日にわざわざ表へ出て新幹線に乗りうとしなくてもいいのに。しかしそう思っても、やっぱりお夏ちゃんを止める事は出来ないのだった。風雨にしたって、新幹線を止める事は出来ても、お夏ちゃんを足止めする事は出来ないだろう。

結局二十分ほど遅れて新幹線は入って来た。お夏ちゃんは振り返り、大きく手を振った。

「色々お世話になったね。特に赤茶毛さん、長い間居候しちゃってごめんね」

「いえいえ、おかまいなく」赤茶毛さんは素っ気ない、しかし決して悪意があるわけではない声でそう答えた。

発車ベルが鳴り響く。お夏ちゃんは慌てて乗り込もうとして、ドアに朝顔を引っ掛けてしまった。見かねたヤマダが手を貸してやり、彼女はやっとの事で車中の人と相成る事が出来たのであった。

ドアが閉まると、列車は再び何の感動もなしに走り始めた。

こうして台風の猛威が街を襲っている最中に、拍子抜けするほど呆気なくお夏ちゃんは去って行ったのだった。

「なんだか呆気ないお別れね」赤茶毛さんがそう呟いた。まったくもって、その通りであった。

実に、呆気なかった。

「でも、そんな大層にお別れをする必要はないっすよ」とヤマダが言った。「どうせまた一年経ったら、戻って来るんだから」

確かに、それも一理あるように思えた。

(8)

お夏ちゃんが去ってから数日後——殊の外長く居座っていた台風が去った日に、僕とヤマダは赤茶毛さんの部屋を訪ねた。

赤茶毛さんの『生活』というものを投げ出してしまった態度」が横溢している部屋は、一段と殺風景なものになっており、埋めがたい穴がぼつかりと開いてしまっている様子であった。しかしそれはいづれ埋めるまでも無く埋まってしまう、気にもされなくなる穴である事には違いなかった。それが無性に寂しい事に思えた。

僕らは何となく車座になって座り、三人で夏の思い出などを訥々と語り始めた。そのまま大して話も弾まないまま、気が付いたら夜になっていたのである。

「いつの間に、日が暮れるのがこんなに早くなってたんだろう」赤茶毛さんがそう言った。

「気付かない間に、だよ」と僕は言った。「いつだってそうさ」

そして僕らは黙りこんだ。特に語る事も無かったのである。

窓の外に広がる空には、ヒトデのような星が瞬いていた。僕は天文学に疎いので、秋の夜空にどんな星座が見えるものなのかよく知らない。あのヒトデたちはどんな風な幾何学模様を描こうとしているのだろうか、そしてそれは、いつかお夏ちゃんがノートに書き残していた抽象画のように難解な図形なのだろうか。

赤茶毛さんは床の上に座り込み、自分の膝小僧に耳を当てていた。貝殻に耳を当てると打ち寄せる波の音が聞こえると言うが、彼女は自分の膝小僧から何の音を聞き取ろうとしているのだろうか。僕はわからなかったし、恐らくは彼女自身にもわからなかったろう。

ヤマダは微動だにせず、タバコの煙が夜空に溶け込むのにまかせていた。彼は時々こんな風に動きを止めて、自分の中に在る堅穴のような世界に降りて行ってしまうのである。彼がどんな感慨に浸っているのか、それは誰にもわからない。心行くまで波と戯れていた、あの幸福な昼下がりの事でも思い起こしているのだろうか。

そして僕は、不要になったサングラスを外した。夜空の色が、限りなく優しいものに思えた。

ふいに、大きく開け放たれた窓から風が吹き込んで来た。朝顔の無くなったベランダを越えて僕らの元まで到達したその風は肌を蝕むような冷たさを持っていて、湿気を含んだ夏の生温い風とは全く別物であった。

「やたらと肌寒くなってきたな」と僕は呟いた「これだけ寒けりや、今夜はオーロラでも見えるかもな」

赤茶毛さんが僕の顔をまじまじと見つめた。そしてヤマダが、微動だにせずに言った。

「俺もなんだか、そんな気がしてるんです」

そして僕は三人は夜が明けるまで、一睡もせずオーロラを待ったのであった。

夜は中々明けなかった。夜とはこんなに長いものだっただろうか、と僕は不思議に感じていた。もしかすると、このまま明けないのではないかとすら思ったが、流石にそんな事は無かった。どんな夜でもいつかは明けるものなのである。

結局、オーロラは見えなかった。

そして、夏が終わった。

(9)

これでひとまず、「お夏ちゃん」の物語はおしまいである。別に彼女がいなくなったところで何かが大きく変わってしまったという事も無く、ありきたりな毎日が洪水のように、それでいて慎ましく淡々と押し寄せて来るのであった。僕は下らない事で頭を悩ませ、詰まらない事で俯いてしまい、そして取るに足らない事で時に幸せになったりしながら日々をやり過ごしてゆくのだった。

しかし、お夏ちゃんの影が記憶の断片を揺り動かしつつ、あちらこちらに飛散していた事もまた事実なのである。例えば海の近くを通りかかり、潮の匂いのする風に吹かれれば、ホンの一瞬ではあるが、波に飲まれて物凄い形相になっていた彼女の姿、それから、ヒトデを一口でペロリと食べて涼しい顔をしていた彼女の姿がフラッシュバックして来るのであった。

また赤茶毛さんの部屋には、あの判読不能絵日記の一部と思われる、幾何学模様の絵と難解な文字の羅列に覆われた紙くずが残されていたという（どうやら、書き損じたページを破いたものらしい）。僕はそれを借りて来て、古代インド学を専攻している友人に見てもらったところ、「いやあ、こんなのは見たことも無いよ。学会に発表したら『新発見史料だ!』と騒がれるかもね」との事で、結局判読は不可能であった。

そして僕は二日酔いで目覚めた早朝には、窓辺に腰かけて物憂げに外を眺めている彼女がすぐそこにいるような気がしたものである。しかし頭の痛みが確かな質感を伴い頭蓋骨の中で響き始める頃になるとその幻影はかき消え、そのまま代わり映えのしない一日が始まるのであった。

或いは、こんな事もあった。どうしようも無く所在無かった夜、僕は赤茶毛さんと二人でカラオケに行った。僕は黙々とデンモクを操作して次から次へと曲を入れ、そして機械的にひたすら歌い続けた。耳障りのよい事だけが取り柄のメロディーに、字幕にして出て来るとその下らなさが一層際立つ歌詞を載せ、モニターに映し出される陳腐で古めかしい映像をバックに、ひしよげたような、痙攣したような声で、僕は淡々と歌い続けるのであった。ドリンクは温く水くさく、おまけに妙な臭いがした。部屋の照明はどう調節しても暗過ぎるのであった。そして僕は、そんな空間が割りと好きなのであった。

と、歌っている僕の肘を、赤茶毛さんがクイクイと引つ張った。どうしたのだろう、余程酷く音程を外してしまったか、と思っていると、赤茶毛さんは「今、画面にお夏ちゃんが映ってた」と言い出したのである。

僕と赤茶毛さんはマイクを放り出し、もう一度同じ曲を入れ、食い入るようにモニターを見つめた。ドアが開き、店員が追加注文したドリンクを持って来たが、僕はそんな事はお構い無し

に、歌も歌わずひたすらモニターを凝視し続けた（店員はさぞかし不審に思った事であろう）。

次々と現れては消える字幕の向うで、素人臭い若い役者二人が甘ったるいイメージ・ドラマを演じていた。舞台は海辺、空にはカモメが舞っていた。戯れる恋人たちの後ろで、堤防の上をふらふらと歩いている女性が一人、その人は水玉模様のハンカチを頭に巻き、魚の骨のイラストがプリントしてあるTシャツ、破れだらけのジーンズを身にまとい、ヒッピーが好みそうな赤いビーズ細工を首から下げ、小麦色の健康そのものの肌をしていて――。

「あれ」と赤茶毛さんはモニターを指差した。

「本当だ」僕は思わず間抜けな顔付きでそう言った。

「本当ですか、それ」苦笑いしながらヤマダがそう問う。

「本当だよ」僕は炒飯をがつがつとかき込みながらそう答えた。「なあ、赤茶毛さん」

赤茶毛さんは「うん、本当」と言い、お冷のお代わりを汲んで来た。代わり映えのしない、昼下りのサムラ軒の情景である。

「じゃあ俺も、今度カラオケ行ったらその曲入れてみますよ」半分は信じ、半分は信じていないらしき表情でヤマダはそう答え、運ばれて来たばかりのお冷を一息に飲み干した。

そんな風にして、お夏ちゃんは折に触れて僕らの前に姿を現した。ある時は潮のにおいがする海風として、ある時は部屋の隅に転がっている紙屑として、ある時は二日酔いで目覚めた朝に漂っている冷気として、ある時はカラオケボックスの中で――。そして僕らは彼女を忘れたり、時に思い出したりを繰り返しながら、まだ肌に馴染み切っていない新しい季節の中を生きてゆくのであった。



食パンを抱えて、彼はパン屋を後にする。これも結局、炭を消す事も無く、胃袋の中に消えて行くのだろくな、と漫然と思いながら、彼は歩き続ける。

リュックサックの中には真新しいスケッチブック——その清潔感、その毅然とした表情、その秘めたる無限の可能性が、彼を苛立たせながらも、同時に嬉しくさせる。

街路樹をくぐり抜けて吹いて来た排ガスまじりの風が、彼のTシャツを翻す。そのシャツには、魔法のランプに似た金属食器が描かれている。いくら撫でて何も出て来ない、のっぺりとした魔法のランプだが、彼はそれを割と気に入っているのだ。

そう、彼は割と気に入っているのだ。たとえ、風に排ガスのにおいを嗅ぎ取っても。またぞろ食パンをひとつ食い潰してしまっても。大方の約束が破られて、取り残されたままでドタバタ芝居を続けなければならなくても。そして最後の最後になって、下らない冗談によってずっと裏切られ続けていたのだと気付いたとしても——。彼はそれを気に入っているのだ。

散策を続けながら、彼はこの都市風景に何か音楽でも付してみるかと思いつく。彼はポケットからトランジスタラジオを取り出し、ウォークマンを耳に突っ込む。そしてノイズまみれの空気中から電波を拾い集め、耳を澄ませる。

#ジュマンペグデイ#

……それじゃあ次のお便りです。北極在住の『ハガキ職人』さん！「りやまた何と言
うか、すごいラジオ・ネームだね。『ラジオネーム』『ハガキ職人』！」って、もはや直球を通り越し
て、なんというか、ねえ……。その昔、『The Band』っていうロック・バンドがいたけ
ど、そのノリだよな。しかも北極在住だそうぜ——「りやまた随分遠いところからおハガキあ
りがとう。でも今日は四月一日じゃないぜ」。

なあ読むぞ。「今日リウエストするのは The Rice Fields の『Corn Flake Blues』だよ。この歌
は、僕の古い友人が好きだった曲です。彼女は森に住む偏屈なマジック・ママで、赤茶けてくしゃ
くしゃの髪の毛がトレード・マークでした。たぶんホルムズの一種でしょう。僕が風邪をひいた時
には、エリマキトカグヤトノサマガエルを煮込んだ独特の味わいの、それって甘いスープを御馳
走してくれたものです。その時のお礼を込めて、彼女にこの歌を送りたいと思います。」ほほ、
そうかいそうかい、マジック・ママのお気に入りときたら、かけないわけにはいかないね。ちっ、
マジック・ママさん、森の何処かでこのラジオを聴いてるかな？あなたの元にこの放送が届いて
いるのを祈りつつ、リウエスト曲をかけると思います。The Rice Fields の『Corn Flake
Blues』だよ。

ぼくはきみを待っているのさ

あゝひげも伸ばし放題

待ちくたびれて 焦がれるあまり

空に向かって逆立っている……………

(二〇〇八年十一月二十一日脱稿)